

一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

鳥取県西伯郡伯耆町

坂 長 第 8 遺 跡

2 0 0 9

財団法人 鳥取県教育文化財団



1 S I 1 床面出土土器



2 S I 2 床面出土土器



3 S I 1 床面出土ガラス玉



1 S I 1 遺物出土状況 (東から)



2 S I 2 遺物出土状況 (南から)



1 S11完掘状況（東から）



2 S13完掘状況（西から）



1 S I 1—SK 1埋甕出土状況（南から）



2 S I 1土層断面中の白色粘土（東から）

序

近年、鳥取県では妻木^{むきばんだ}晩田遺跡、青谷^{あおやかみじち}上寺地遺跡をはじめとする古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、それらの遺跡の調査成果に基づいて、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。

遺跡という貴重な情報を秘めた先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務と考えております。

さて、西伯郡伯耆町において国道181号線（岸本バイパス）の道路改良工事が着々と進められているところではありますが、この事業に先立ち、当財団は、鳥取県からの委託を受け埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

平成18年度に調査を行った坂長第8遺跡では、古墳時代の竪穴住居跡が発掘され、多くの土器などが出土し、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。

このたび、それらの調査結果を報告書としてまとめることができました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるに当たり、鳥取県西部総合事務所県土整備局、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成21年 3月

財団法人 鳥取県教育文化財団
理事長 有田 博 充

例 言

1. 本報告書は「一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」として実施した坂長第8遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書に記載した坂長第8遺跡の所在地は、以下のとおりである。
鳥取県西伯郡伯耆町坂長字大清水通大峯2102ほか
3. 本発掘調査では、2,340m²を調査した。
4. 本報告書における座標は、世界測地系に準拠した公共座標第V系の座標を、方位は座標方位を用いている。また、レベルは海拔標高である。
5. 本報告書に使用した地図は、岸本町（現伯耆町）発行の1/2,500地形図及び国土地理院発行の1/50,000地形図を縮小し、加筆して利用した。
6. 本発掘調査における基準点測量と方眼測量と調査前地形測量、及び放射性炭素年代測定とリン・カルシウム分析は業者に委託したものである。
7. 掲載した遺構図面は文化財主事又は調査員及び調査補助員が作成し、文化財主事、調査補助員又は整理作業員が浄書を行った。
8. 遺物の実測及び浄書は文化財主事又は整理作業員が行った。
9. 遺構及び遺物の撮影は文化財主事が行った。
10. 発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類、及び出土遺物などは鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。
11. 本報告書は、高橋章司が執筆した。
12. 現地調査及び報告書の作成に当たっては、多くの方々から御指導、御助言、御支援いただいた。感謝いたします。

凡 例

1. 遺跡の略称は「サカ8」とした。
2. 遺物には、すべて遺跡略称及び遺構番号を記載している。
3. 遺構の略称は下記のとおりである。
S I：竪穴住居跡 S S：段状遺構 S D：溝 S K：土坑 P：ピット
4. 本報告書における遺物の略称及び縮尺は下記のとおりである。
番号のみ：土器、土製品（縮尺：1/4） S：石器（縮尺：2/3、1/2等） B：玉類（縮尺1/1）
5. 遺物実測図中のトーンは、石器の場合使用または製作による摩滅を、土器の場合赤色塗彩を表す。
6. 本文中、挿図及び写真図版の遺物番号は一致する。

目 次

序

例言・凡例

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の経過	2
第3節 調査体制	4
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 発掘調査の成果	9
第1節 遺跡の立地と層序	9
第2節 縄文・弥生時代の調査	14
1. 概要	14
2. 段状遺構	14
3. 出土遺物	15
第3節 古墳時代以降の調査	38
1. 概要	38
2. 竪穴住居跡	38
3. 溝	59
4. 土坑とピット	59
5. 遺構外の出土遺物	66
第4章 自然科学分析	68
第1節 坂長第8遺跡の放射性炭素年代	68
第2節 坂長第8遺跡出土埋甕内部のリン・カルシウム分析	69
第5章 考察 坂長第8遺跡出土の突帯文土器について	71

挿図目次

第1章 調査の経緯と経過

- 第1図 調査地位置図……………1
- 第2図 調査区グリッド図……………3

第2章 位置と環境

- 第3図 遺跡位置図……………5
- 第4図 周辺遺跡分布図……………7

第3章 発掘調査の成果

- 第5図 遺構分布図……………10
- 第6図 東壁土層断面……………11
- 第7図 西壁土層断面……………12
- 第8図 その他土層断面……………13
- 第9図 S S 1……………15
- 第10図 石器（1）……………16
- 第11図 石器（2）……………17
- 第12図 石器（3）……………18
- 第13図 石器（4）……………19
- 第14図 石器（5）……………20
- 第15図 石器（6）……………21
- 第16図 縄文土器（1）……………24
- 第17図 縄文土器（2）……………25
- 第18図 縄文土器（3）……………26
- 第19図 縄文土器（4）……………27
- 第20図 縄文土器（5）……………28
- 第21図 弥生土器（1）……………33
- 第22図 弥生土器（2）……………34

- 第23図 弥生土器（3）……………35
- 第24図 S I 1……………39
- 第25図 S I 1 遺物出土状況……………41
- 第26図 S I 1 床面出土土器……………43
- 第27図 S I 1 出土ガラス玉……………44
- 第28図 S I 1 出土土器（1）……………45
- 第29図 S I 1 出土土器（2）……………46
- 第30図 S I 1 出土石器（1）……………48
- 第31図 S I 1 出土石器（2）……………49
- 第32図 S I 3 および出土遺物……………51
- 第33図 S I 2……………53
- 第34図 S I 2 遺物出土状況……………54
- 第35図 S I 2 床面出土土器……………55
- 第36図 S I 2 出土土器……………56
- 第37図 S I 2 出土石器……………58
- 第38図 S D 1 および出土遺物……………60
- 第39図 土坑……………61
- 第40図 ピット（1）……………62
- 第41図 ピット（2）……………63
- 第42図 ピット（3）……………64
- 第43図 上層遺構外出土の土器（1）……………65
- 第44図 上層遺構外出土の土器（2）……………66

第5章 考察

- 第45図 突帯文土器の分類基準……………71

挿表目次

第3章 発掘調査の成果

- 第1表 S I 1内の遺構……………40
- 第2表 S I 3内の遺構……………52
- 第3表 S I 2内の遺構……………53
- 第4表 土坑およびピット一覧……………59

第4章 自然科学分析

- 第5表 放射性炭素年代測定結果……………69
- 第6表 暦年較正結果……………69
- 第7表 リン・カルシウム分析結果……………70

第5章 考察

- 第8表 突帯文土器の属性……………73

図版目次

巻頭図版

- 1—1 S I 1 床面出土土器
- 1—2 S I 2 床面出土土器
- 1—3 S I 1 床面出土ガラス玉
- 2—1 S I 1 遺物出土状況（東から）
- 2—2 S I 2 遺物出土状況（南から）
- 3—1 S I 1 完掘状況（東から）
- 3—2 S I 3 完掘状況（西から）
- 4—1 S I 1—S K 1 埋甕出土状況（南から）
- 4—2 S I 1 土層断面中の白色粘土（東から）

図版

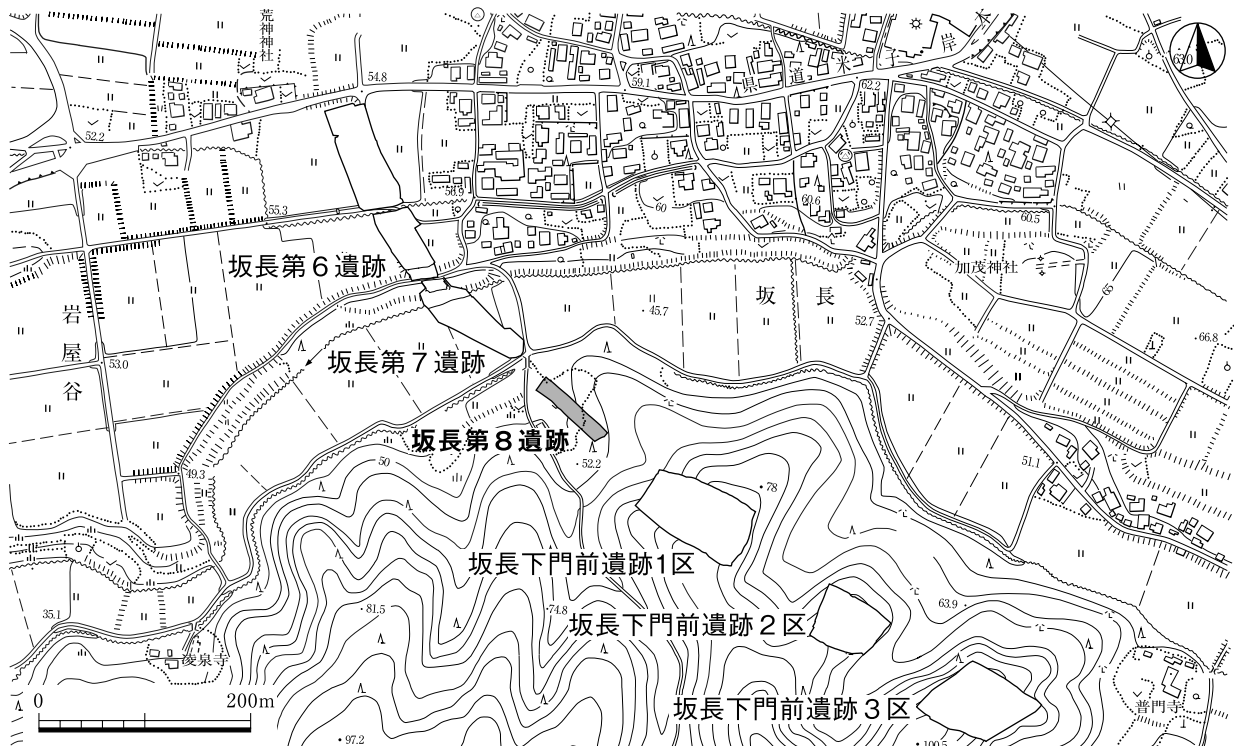
- 1—1 調査地周辺の地形（上が北）
- 1—2 調査地周辺の地形（西から）
- 2—1 調査前の状況（南から）
- 2—2 調査区完掘状況（北から）
- 2—3 下層弥生土器出土状況（南から）
- 3—1 S I 1 検出状況（西から）
- 3—2 S I 1 土層断面（北から）
- 3—3 S I 1 土層断面（東から）
- 4—1 S I 1 およびS I 3 貼床（北から）
- 4—2 S I 1 貼床および白色粘土（東から）
- 4—3 S I 1 床面検出状況（東から）
- 5—1 S I 1・S I 2 床面検出状況（南から）
- 5—2 S I 1 白色粘土検出状況（南から）
- 5—3 S I 1 白色粘土断面（南から）
- 6—1 S I 1 遺物出土状況（北西から）
- 6—2 S I 1 床面甑形土器出土状況（東から）
- 6—3 S I 1—S K 1 断面（南から）
- 7—1 S I 1—S K 2 検出状況（南東から）
- 7—2 S I 1—S K 2 断面（東から）
- 7—3 S I 1—S K 2 底面の土器（西から）
- 8—1 S I 1—P 1 断面（東から）
- 8—2 S I 1—P 1 完掘状況（東から）
- 8—3 S I 1 床面完掘状況（東から）
- 9—1 S I 1 ベッド状遺構（西から）
- 9—2 S I 1 貼床除去後の状況（東から）
- 9—3 S I 1 貼床除去面でのP 11（東から）

- 10—1 S I 3 床面検出状況（西から）
- 10—2 S I 3—P 1・P 2 断面（北から）
- 10—3 S I 3 完掘状況（西から）
- 11—1 S I 2 およびS D 1 検出状況（西から）
- 11—2 S I 2 検出面遺物出土状況（西から）
- 11—3 S I 2 検出面遺物出土状況（西から）
- 12—1 S I 2 土層断面（東から）
- 12—2 S I 2 土層断面（南から）
- 12—3 S I 2 床面検出状況（南から）
- 13—1 S I 2 床面遺物出土状況（東から）
- 13—2 S I 2 集石出土状況（東から）
- 13—3 S I 2 完掘状況（南から）
- 14 S I 1 出土遺物（1）
- 15 S I 1 出土遺物（2）
- 16 S I 1 出土遺物（3）
- 17—1 S I 1 出土遺物（4）
- 17—2 S I 1 出土遺物（5）
- 17—3 S I 3 出土遺物
- 17—4 S D 1 出土遺物
- 18 S I 2 出土遺物（1）
- 19 S I 2 出土遺物（2）
- 20 石器（1）
- 21 石器（2）
- 22 縄文土器（1）
- 23 縄文土器（2）
- 24 縄文土器（3）
- 25 縄文土器（4）
- 26 弥生土器（1）
- 27—1 縄文土器（5）
- 27—2 弥生土器（2）
- 27—3 遺構外出土土師器（1）
- 27—4 遺構外出土土師器（2）
- 27—5 石器（3）
- 28 古墳時代以降の土器

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯

坂長第8遺跡は、一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴って発掘調査を実施した遺跡である。この遺跡は、鳥取県西伯郡伯耆町地内の道路ルート上に位置する周知の遺跡で、道路建設工事に先立ち、伯耆町教育委員会が国および県の補助金を受けて平成17年度に試掘調査を実施したところ、土器や石器が出土し、古墳時代の集落跡が存在する可能性が想定された。この結果を受け、鳥取県西部総合事務所県土整備局と鳥取県教育委員会事務局文化課は遺跡の取り扱いについて協議を行ったが、現状保存は困難であり記録保存を行うとの結論にいたった。この結論に基づき、鳥取県西部総合事務所長は文化財保護法94条に基づく発掘通知を鳥取県教育委員会教育長に提出し、事前発掘調査の指示を受けた。そのため、鳥取県西部総合事務所長は発掘調査を財団法人鳥取県教育文化財団に委託した。そこで、当財団理事長が鳥取県教育委員会教育長に文化財保護法92条に基づく発掘調査の届出を提出したうえで、当財団調査室岸本調査事務所が調査を実施した。



第1図 調査地位位置図

第2節 調査の経過

坂長第8遺跡の調査は、当初の計画では5月下旬に開始する予定だったが、用地買収交渉等の遅れから着手が遅れ、実際に発掘作業員が稼動したのは6月29日であった。

調査地は、高塚山と越敷山を主峰とする丘陵地帯から派生する尾根の末端に位置する。2つの尾根に挟まれる緩やかな狭い谷に面した、北西方向に下る緩斜面に、長辺約77m、短辺約15mの細長い長方形の調査区を設定した。標高は最も高い所で約53m、低い所で約47mを測る。

調査に先立ち、専門業者に委託して、調査前地形測量と4級基準杭の打設を5月中に行った。

6月26日から6月28日まで、重機による表土剥ぎを実施した。現地表下約40cmの黒褐色土（2層）中から多量の古墳時代の遺物が出土したため、表土剥ぎは遺物が出土する層準で止めた。

表土剥ぎ後、測量業者に委託して、4級基準杭と公共座標第V系に基づく9m間隔の方眼杭を打設した。方眼軸には、北から南にアルファベットを、西から東に数字を付し、方眼の呼称は、例えばP77というように北東角の杭で代表する。

発掘作業員の稼動は6月29日に開始し、人力による掘削に入った。作業は調査区の周囲と、調査区を横断する3本のトレンチの掘削から始め、堆積状況を確認した上で、2層の調査を概ね南側から北側に向けて実施した。次いで、黒色土（3層）上面での古墳時代の遺構検出を行い、竪穴住居跡2棟などを確認した。遺構の調査は8月8日に着手した。竪穴住居跡はともに大量の遺物を含んで保存状態がよく、その内の1棟の下からは入れ子状にもう1棟が検出されたため、最終的に全ての遺構の調査が終了したのは、10月13日であった。

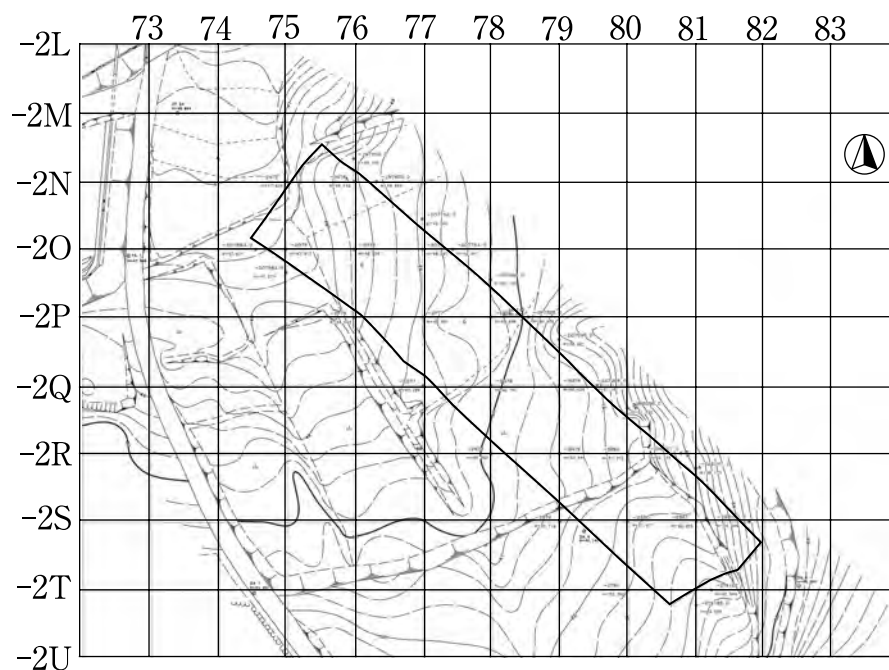
古墳時代の遺構の調査と平行して、3層の掘削を8月10日から10月17日まで行った。3層中からは、縄文晩期から弥生前期の遺物が大量に出土したが、いずれも転磨しており、また、暗褐色土（4層）上面で行った検出でも、明確な遺構は見つからなかった。4層上面から、縄文草創期のものと考えられる黒曜石製尖頭器が出土したため、付近をソフトローム層まで2×10mの範囲で調査したが、遺物は出土しなかった。10月19日に掘削作業を、10月25日に調査後の地形測量を終了し、全ての調査日程を終えた。なお、7月18日から7月24日までは集中豪雨により、8月11日から8月16日までは盆休みにより、調査を中断した。

この間、9月30日には、坂長村上遺跡や坂長第7遺跡と合同で現地説明会を開催し、地元の方々を中心に72名の参加をいただいた。この他、鳥取大学や島根大学の学生等17名や、岸本小学校5年生等15名をはじめ、随時の見学者があった。

なお、当初の計画では調査範囲に含まれていた北端部分約250m²と南端部分約150m²については、北端は地権者の同意が得られなかったため、南端は下門前遺跡1区の伐採作業等のため、調査範囲から除外せざるを得なかった。発掘調査の結果、北端には角礫を多量に含んだ土石流に由来すると思われる土層が厚く堆積し、南端は斜面地で、ともに無遺物であることが判明したので、協議の上、追加の調査は行わなかった。

○坂長第8遺跡の調査経過

- 5月26日 調査前地形測量
- 6月26日～6月28日 重機による表土剥ぎ
- 6月28日 方眼測量
- 6月29日 発掘作業員稼働開始
- 7月18日～7月24日 集中豪雨による作業中止
- 7月28日 竪穴住居跡S I 1を検出
- 8月8日 S I 1調査開始
- 8月11日～8月16日 盆休み
- 8月17日 上層包含層調査終了
- 8月18日 S I 2調査開始
- 8月28日 鳥取大学および島根大学学生ほか17名見学
- 9月1日 3層から突帯文土器出土
- 9月12日 S I 1から埋甕出土
- 9月15日 4層上面から尖頭器出土
- 9月28日 S I 3調査開始
- 9月30日 現地説明会
- 10月17日 岸本小学校児童ほか15名見学
- 10月18日～10月19日 旧石器文化層の確認調査。掘削作業終了
- 10月25日 調査後地形測量終了



第2図 調査区グリッド図

第3節 調査体制

調査は以下の体制で実施した。

○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長	有田 博充 (平成18～20年度)
事 務 局 長	中村 登 (平成18年度)
	國弘 博之 (平成19年度)
	中村 金一 (平成20年度)
事 務 職 員	山本まゆみ (平成18、19年度)
	大川 秋子 (平成18年度)
	岡田美津子 (平成19、20年度 兼調査室事務職員)

財団法人鳥取県教育文化財団調査室

室 長	久保穰二郎 (平成18～20年度 本務 県埋蔵文化財センター所長)
次 長 (事務)	國弘 博之 (平成18年度)
	中村 金一 (平成19年度)
	石本 富正 (平成20年度)
文化財主事	西川 徹 (平成18、19年度)
	大川 泰広 (平成20年度)
事 務 職 員	船曳 朋子 (平成18年度)
	岡田美津子 (平成18～20年度)
	福田早由里 (平成19、20年度)

○調査担当

財団法人鳥取県教育文化財団調査室 岸本調査事務所

所 長	國田 俊雄 (平成18～20年度)
文化財主事	高橋 浩樹 (平成18～20年度)
	高橋 章司 (平成18～20年度)
	坂本 嘉和 (平成17～20年度)
	加藤 裕一 (平成17、18年度)
	河合 章行 (平成18年度)
調 査 員	祝原 幸治 (平成18年度)

○調査協力

財団法人米子市教育文化事業団 西部土地改良区 伯耆町教育委員会
(五十音順、敬称略)

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

坂長第8遺跡は、鳥取県西部、西伯郡伯耆町坂長に所在する。

周辺の地形および地質は、日野川を挟んで大きく様相を変える。日野川の右岸は主に、大山のさまざまな火山噴出物からなる緩やかな台地で、第四紀更新世に形成された。一方、坂長第8遺跡が位置する日野川左岸は主に、標高270mの高塚山と標高226mの越敷山を中心とした南北8km東西3kmにわたる起伏に富んだ丘陵地帯と、長者原台地と呼ばれる平坦な洪積台地とで構成される。丘陵地帯は、第三期鮮新世の粗面玄武岩を基盤とし、部分的に大山上中部火山灰に覆われている。洪積台地は、南側では安山岩質の砂礫層を、北側では火山砕屑物を主体とする古期扇状地堆積物を基盤とし、上部はやはり大山上中部火山灰で覆われている。この他に、日野川付近には、低位段丘や扇状地などの地形も見られる。なお、日野川は中世までは岸本集落の北から東北方向に流れて佐陀川に合流していたが、天文19年（1550）と元禄15年（1702）の洪水により、現在のような西寄りの流路になった。

坂長第8遺跡は、越敷山からのびる丘陵の末端に立地し、標高は50m前後である。丘陵の北には、東西方向に谷が走る。この谷は湧水が豊富で、丘陵の直下にはかつて泉が湧き、豆腐小屋が設けられていたという。谷の北側には長者原台地が広がり、多くの遺跡が分布する。

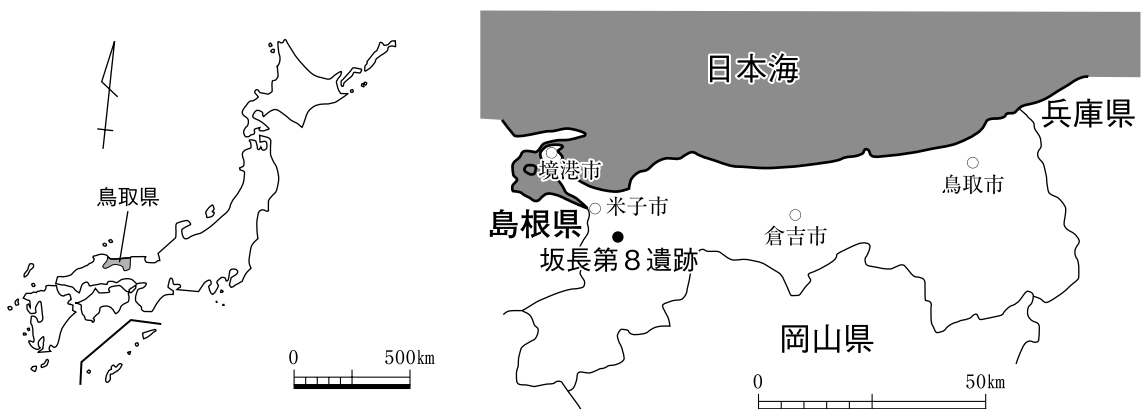
第2節 歴史的環境

旧石器時代

長者原台地上の諏訪西山ノ後遺跡（24）では、ナイフ形石器がローム層中から出土した。2点のナイフ形石器はともに珪岩製で、小型の石刃を二側縁加工したものである。坂長村上遺跡（50）からも、黒曜石製のナイフ形石器が1点出土している。この他に、泉中峰遺跡（79）と小波遺跡（80）からナイフ形石器が出土しているが、石器群が原位置でまとまって出土した例はまだない。

縄文時代

坂長村上遺跡からは、多様な石材と形態の5点の尖頭器を中心とする草創期の石器群が出土した。



第3図 遺跡位置図

他に、貝田原遺跡（61）、奈喜良遺跡（20）などで、サヌカイト製有茎尖頭器が見つまっている。

早期後半から、大山西麓では押型文土器を出土する遺跡が多く知られ、上福万遺跡（73）では集石遺構や土坑が多数検出されている。前期になると、中海沿岸にも集落が形成され、目久美遺跡（8）や陰田第9遺跡（9）では、土器や石器のほか、動植物遺体が豊富に出土している。中期になって新たに出現する遺跡は少なく、後期になると再び増加する。晩期には、古市河原田遺跡（12）をはじめ突帯文土器を伴う遺跡が多く見つまっている。周辺地域では非常に多くの落とし穴が発掘されていて、妻木晩田遺跡（83）で963基、青木遺跡（22）で228基、越敷山遺跡群（45）で341基を数える。年代の判明したものでは、後・晩期の例が多い。

弥生時代

前期の代表的な遺跡としては、目久美遺跡（8）や長砂第2遺跡（4）などの低湿地遺跡がある。両遺跡では、前期から中期にかけての水田跡が重層して検出され、農耕具などの木製品も多く出土している。この時期の集落は丘陵上にもあり、宮尾遺跡（28）や諸木遺跡（29）では環壕が発掘されている。特に清水谷遺跡（17）の環壕は内部に堅穴住居等をもたない点で注目される。

中期後葉以降は遺跡数が増加し、丘陵上には、妻木晩田遺跡（83）、青木遺跡（22）、福市遺跡（21）など大規模な拠点集落が出現する。越敷山遺跡群（45）は高い丘陵上に位置する集落跡で、多数の鉄器をもつ。同時期にこの地域には四隅突出型墳丘墓が分布し、妻木晩田遺跡洞ノ原地区・仙谷地区の墳丘墓群や父原墳丘墓群などが代表である。日下1号墓（75）は木棺墓群に、尾高浅山1号墓（76）は環壕集落に隣接して築造されているのが注目される。

なお、当地域では青銅器がほとんど出土しておらず、浅井土居敷遺跡（37）の環状の青銅器や、久古第3遺跡（60）の銅剣の可能性のある青銅器片などを挙げるのができるのみである。

古墳時代

主要な前期古墳には、三角縁神獸鏡が出土した前方後方墳と方墳の普段寺1・2号墳（35）、方墳で6基の埋葬施設をもつ日原6号墳（19）がある。墳丘規模20m前後の比較的小さな古墳が多い。

中期古墳としては、全長108mの前方後円墳の三崎殿山古墳（26）が著名であるが、最近の研究では、前期古墳である可能性が指摘されている。他には画文帯神獸鏡が出土した浅井11号墳（36）、宮前3号墳（32）といった小型の前方後円墳が築造されている。

後期に入ると古墳数は爆発的に増加し、多くの群集墳が営まれる。長者原台地上では諏訪古墳群や長者原古墳群（53）などが縁辺部に、丘陵地帯には越敷山古墳群が形成される。吉定1号墳（63）の割石小口積みによる持送り式横穴式石室や、東宗像5号墳（18）の横穴式箱式棺などは、九州地方との関連性を窺わせる。終末期には、陰田横穴墓群（9）や日下横穴墓群（75）などの横穴墓が造営される。

この時代の集落遺跡は、主に台地上や丘陵上に分布し、福市遺跡（21）や青木遺跡（22）のように、弥生時代後期から継続して営まれたものが多い。

古代

白鳳期には、大寺廃寺（52）が創建される。東向きの法起寺式伽藍配置を取り、金堂の瓦積基壇と三段舍利孔を持つ塔心礎が確認されている。石製鴟尾は全国に他に1例しかない。創建時の瓦と同一文様の瓦は金田瓦窯（39）からも出土したという。付近の台地上には坂中廃寺（51）があり、塔心礎が残る。奈良末から平安初めの瓦が散布しているが、伽藍配置等は明らかでない。

『和名類聚抄』によると律令制下において周辺地域は伯耆国会見郡にあたる。長者屋敷遺跡（48）



- | | | | | | |
|------------|-------------|------------|------------|-------------|------------------|
| 1 錦町第1遺跡 | 17 清水谷遺跡 | 33 田住古墳群 | 49 坂長下屋敷遺跡 | 65 番原遺跡群 | 81 井手勝遺跡 |
| 2 久米第1遺跡 | 18 東宗像古墳群 | 34 宮前遺跡 | 50 坂長村上遺跡 | 66 須村遺跡 | 82 今津岸の上遺跡 |
| 3 米子城 | 19 日原古墳群 | 35 普段寺1号墳 | 51 坂中廢寺 | 67 真野ブナ遺跡 | 83 妻木晩田遺跡 |
| 4 長砂第1・2遺跡 | 20 奈喜良遺跡 | 36 浅井11号墳 | 52 大寺廢寺 | 68 藍野遺跡 | 84 晩田遺跡 |
| 5 長砂第3遺跡 | 21 福市遺跡 | 37 浅井土居敷遺跡 | 53 長者原古墳群 | 69 林ヶ原遺跡 | 85 向山古墳群 |
| 6 水道山古墳 | 22 青木遺跡 | 38 天王原遺跡 | 54 坂中第5遺跡 | 70 下山南遺跡 | 86 上淀廢寺跡 |
| 7 池ノ内遺跡 | 23 樋ノ口第4遺跡 | 39 金田瓦窯 | 55 岸本大成遺跡 | 71 長山馬籠遺跡 | 87 今在家下井ノ原遺跡 |
| 8 目久美遺跡 | 24 諏訪西山ノ後遺跡 | 40 両部太郎窯 | 56 岸本古墳群 | 72 石州府古墳群 | 88 坂長第7遺跡 |
| 9 陰田遺跡群 | 25 別所新田遺跡 | 41 荻名遺跡群 | 57 岸本遺跡 | 73 上福万遺跡 | 89 坂長第8遺跡 |
| 10 奥陰田遺跡群 | 26 三崎殿山古墳 | 42 田住松尾平遺跡 | 58 岸本要害跡 | 74 日下寺山遺跡 | 90 坂長下門前遺跡 |
| 11 新山遺跡群 | 27 天萬土居前遺跡 | 43 朝金古墳群 | 59 岸本下の原遺跡 | 75 日下古墳群 | 91 大殿狐谷遺跡 |
| 12 古市遺跡群 | 28 宮尾遺跡 | 44 朝金小チヤ遺跡 | 60 久古第3遺跡 | 76 尾高浅山遺跡 | 92 坂長第6遺跡 |
| 13 吉谷遺跡群 | 29 諸木遺跡 | 45 越敷山遺跡群 | 61 貝田原遺跡 | 77 尾高城 | |
| 14 橋本遺跡群 | 30 後塔山古墳 | 46 手間要害跡 | 62 口別所古墳群 | 78 尾高御建山遺跡 | |
| 15 福成石佛前遺跡 | 31 天万遺跡 | 47 荒神上遺跡 | 63 吉定1号墳 | 79 泉中峰・前田遺跡 | |
| 16 福成早里遺跡 | 32 宮前3号墳 | 48 長者屋敷遺跡 | 64 久古北田山遺跡 | 80 小波原畑遺跡 | |

0 1 : 100,000 2km

第4図 周辺遺跡分布図

や坂長第6遺跡(92)などでは大型の掘立柱建物跡が確認され、会見郡衙の施設である可能性が高い。坂長村上遺跡(50)や坂長第7遺跡(88)からも円面硯や刻書土器など、官衙的な性質が強い遺物が出土した。なお、相見駅家も付近にあったと考えられる。北方の台地上では西山ノ後遺跡(24)で和同開珎と墨などを納めた胞衣壺が、樋ノ口遺跡(23)で石帯が出土している。

古代山陰道は、大寺廃寺、坂中廃寺、長者屋敷遺跡を通過して、伯耆町岩屋谷から南部町天万を抜ける南側のルート、もしくは米子市諏訪から古市を抜ける北側のルートが想定されている。ただし、発掘調査による明確な確認には至っていない。

『延喜式』等によれば、古代にはこの地方から鉄が貢納されていたことが知られる。坂長第6遺跡では、多くの鉄滓や羽口などが出土し、郡衙に伴う官営製鉄工房として注目される。坂長村上遺跡や長者原18号墳(91)周溝上層などからも多くの鉄関連遺物が出土しており、この地方での製鉄の開始が、文献に記された年代よりも大きく遡ることは確実である。

中世

平安時代には各地に荘園が発達し、遺跡周辺は八幡荘に含まれていたとされる。

大山寺の鉄製厨子には、承安元年(1171)の火災の翌年に伯耆の豪族紀成盛が大山権現御神体と厨子を奉納したことが記されている。伯耆町坂長には紀成盛が居宅を構えたという伝承が残る。

南北朝時代には大寺に安国寺が置かれた。要衝の地であり名和氏などの南朝勢力を抑える目的があったとされる。42坊を数える大寺院であったが、永禄8年(1565)に、杉原盛重に焼き討ちされた。坂中地区の旦那寺である普門寺は、元はこの安国寺の奥の院であったといわれている。

南北朝から戦国時代の動乱期には、山陰道沿いの要地を中心に、数多くの城砦が築かれた。小波城(80)、尾高城(77)、手間要害(46)は、文献にも登場する代表的な城跡である。このうち尾高城跡では、発掘調査により槽跡や輸入陶磁器などが出土している。

近世

西伯耆は、吉川広家・中村一忠・加藤貞泰と領主交代を繰り返した末に、元和3年(1617)に、因幡・伯耆32万石を領する鳥取藩の一部として池田光政が領主になる。寛永9年(1632)国替えにより池田光仲が封入すると、周辺地域は藩の直轄領と寺社領を除いた大半が米子城主荒尾家の給所に属し、以後明治2年(1869)まで荒尾氏による自分手政治が行われた。

坂長村は、明治11年(1878)に、坂中村と長者原村が合併して成立した村である。『伯耆志』の記載によれば、安政頃の坂中村は67戸280人で、長者原村はわずか2戸12人であった。

長者原台地では、石田村吉持家により佐野川用水の開削事業が実施された。事業は元和4年(1618)から数回の中断を経ながら約250年にわたり、文久元年(1861)にようやく完成を見た。これにより、荒蕪地であった長者原台地は水田・畑地となり、現在に至っている。

【参考文献】

地質調査所 1962『5万分の1地質図幅説明書 米子』(岡山一第18号)

山名巖 1964「山陰地方における第四紀末の諸問題」『鳥取県立科学博物館研究報告』

岸本町 1983『岸本町誌』

会見町 1996『会見町誌 続編』

米子市 2003『新修 米子市史』

第3章 発掘調査の成果

第1節 遺跡の立地と層序

立地

坂長第8遺跡は、標高226mの越敷山から派生する2つの尾根の末端に挟まれた、幅約45m奥行き約95mの北西方向に開いた細長い谷に位置している。西側の尾根は痩せていて遺跡との比高差は15m程と急である。一方、東側の尾根は幅約50mの緩やかな舌状を呈し、遺跡との比高差も5m位しかない。今回の調査地は、この東側の尾根の西斜面にあたり、標高は47mから53mで、北西方向に緩やかに下っていく。検出された遺構の分布が調査区の東端に偏っていることや、わずかに転磨した遺物が多く出土したことからすると、遺跡の中心部分は東側の尾根上にあるはずである。

遺跡の北方には長者原台地が広がり、台地との間を、幅約100mの細長い谷が、東から西に向かって走っている。この谷は湧水が豊富で、幕末になって台地上に佐野川用水が開削されるまでは、周辺地域では数少ない美田ができる場所であった。調査地の北隣にも、数十年前までは水源があり、集落共同の豆腐小屋が設けられていたという。坂長第8遺跡に集落がつくられた理由は、この湧水と水田として耕作可能な土地の存在が大きいであろう。

坂長第8遺跡の北には、水路跡などが発掘された坂長第7遺跡が隣接し、ともに下層からは縄文晩期から弥生前期の遺物が多く出土しているので、両者には密接な関係があると考えられる。その先の台地上には、坂長第6遺跡があり、律令期の会見郡衙関連施設と鍛冶工房が発掘されている。しかし、本遺跡からはこの時期の遺物は出土していない。また、南側の丘陵上には坂長下門前遺跡が所在するが、縄文時代の落とし穴が希薄に分布するだけで、本遺跡との関係は不明確である。

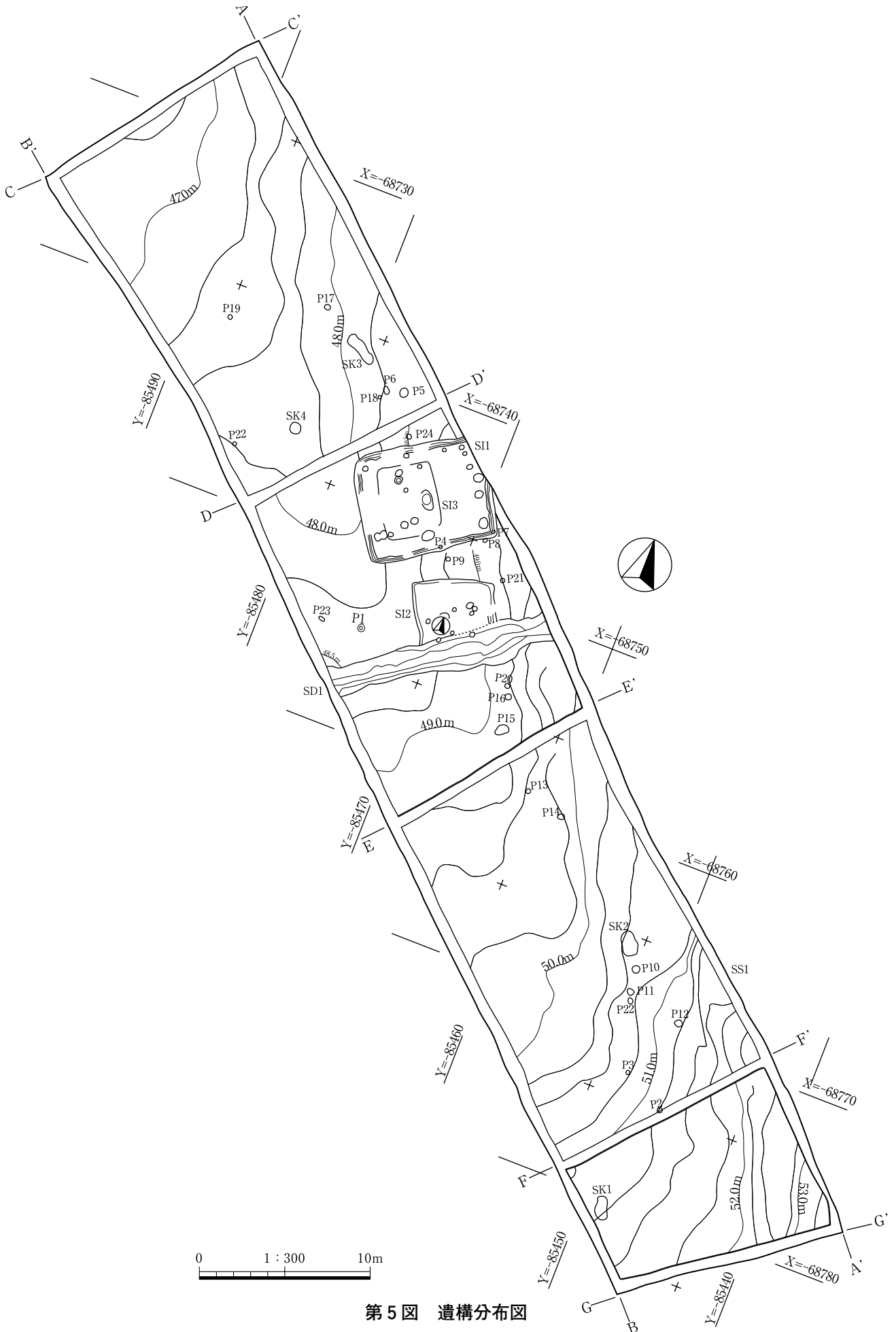
調査地の調査前の状況は畑および山林で、近代以降のものと思われる2段に造成された畑地や浅い溝と小屋跡が認められた。しかしこれらによる地形改変はごくわずかで、圃場整備が行われなかったため、遺構と包含層の遺存状態は非常によい。

層序

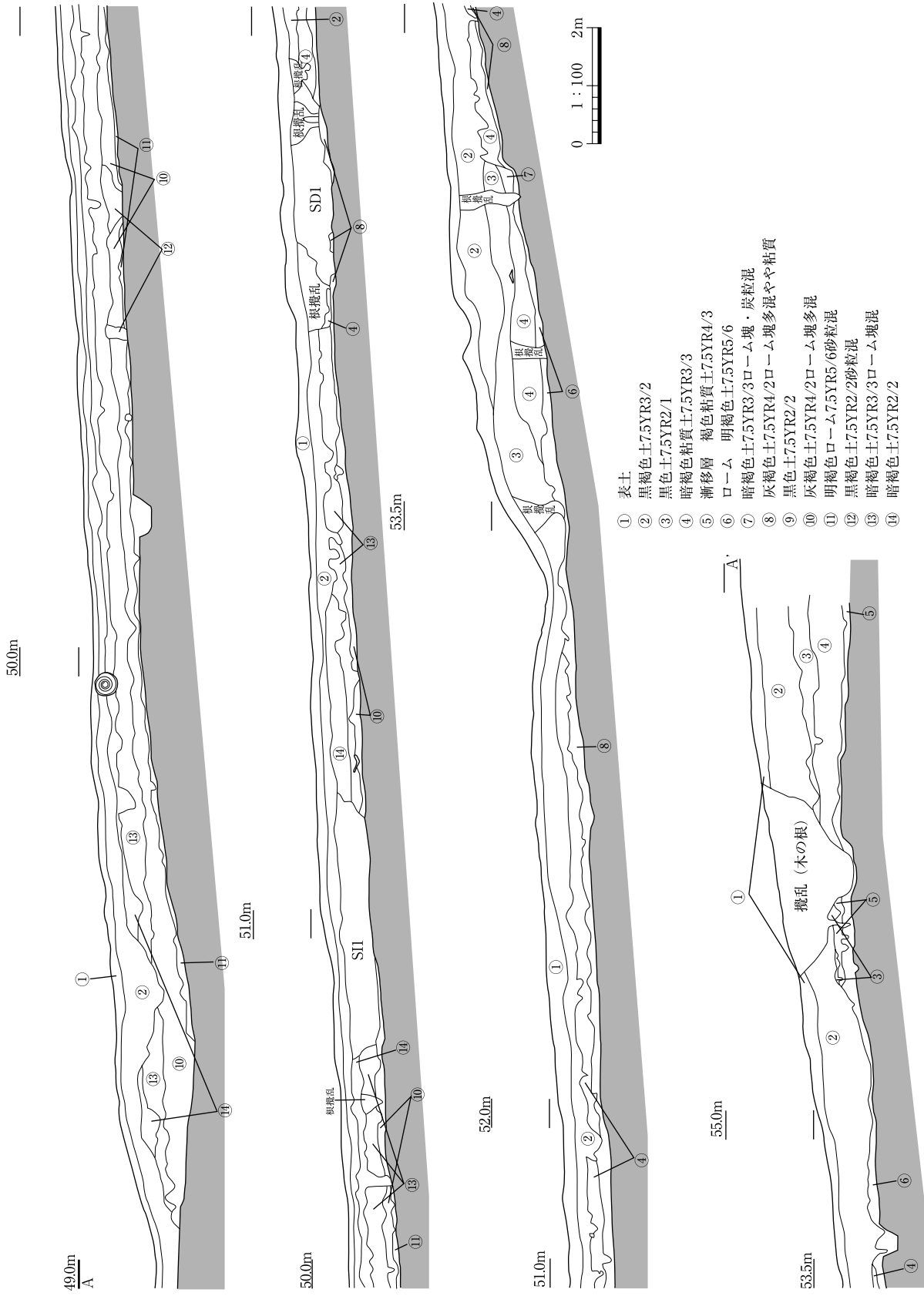
調査地の基本的な層序は、次の通りである。

- 1層：表土。厚さ約10～20cm。
- 2層：黒褐色土。厚さ40～80cm。古墳時代中期以降の遺物を包含する。
- 3—1層：黒色土。やや粘質。厚さ30～50cm。上部に古墳時代中期の遺物を、全体に縄文晩期から弥生前期の遺物を含む。
- 3—2層：黒色土。厚さ30～50cm。縄文晩期から弥生前期の遺物を上面を中心に包含する。
- 4層：暗褐色粘質土。砂粒をわずかに含む。厚さ30～50cm。尖頭器が1点出土したほかは無遺物。
- 5層：褐色粘質土。厚さ5～15cm。漸移層。
- 6層：明褐色土。層厚不明。ソフトローム層。

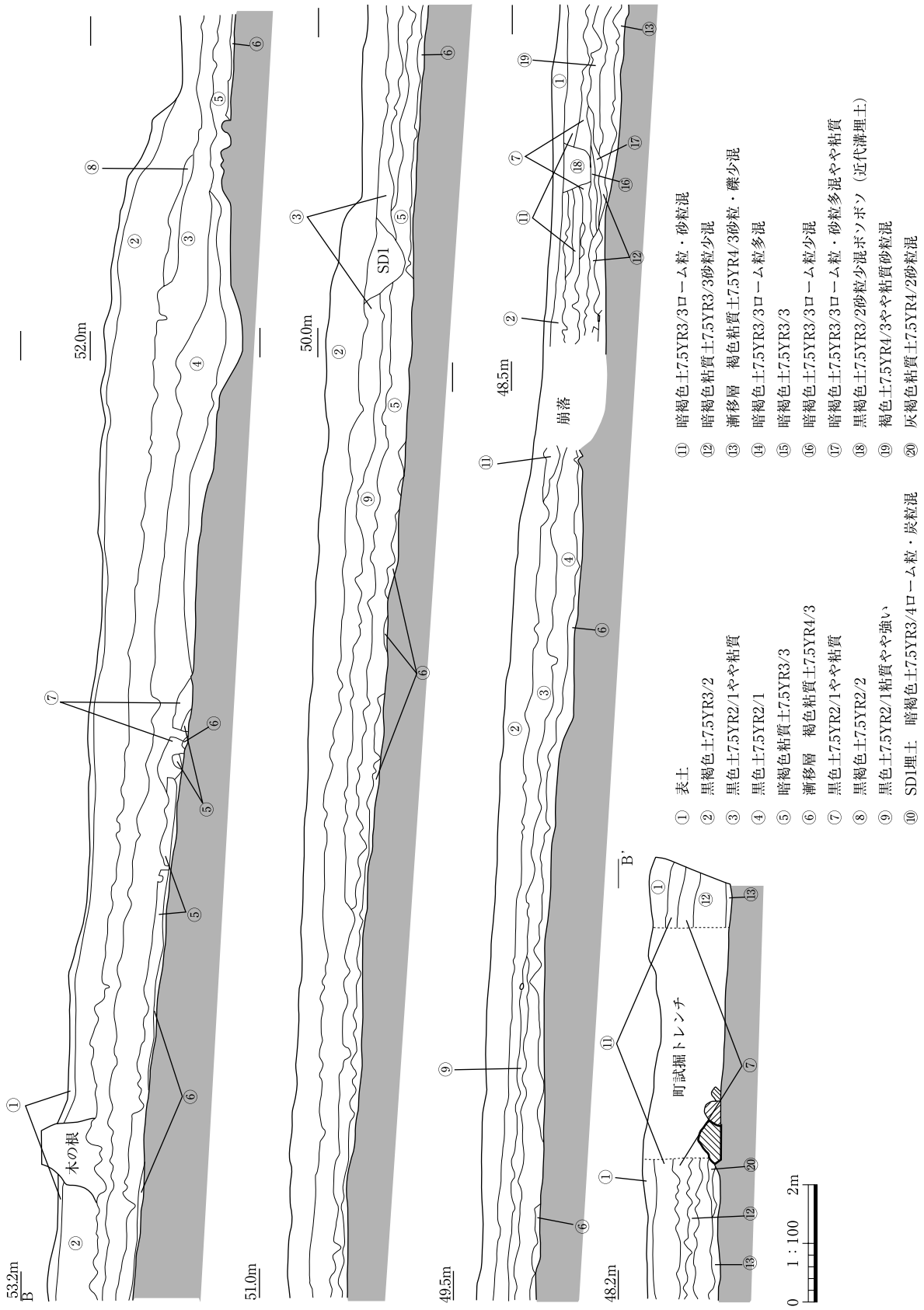
谷地形に位置するため、実際の堆積は部分的にはもう少し複雑である。各々の層は、概して谷に沿う調査地西側でより厚く、東側で薄い。また、南側の山に近い方ほど構成が単純であり、調査地南端



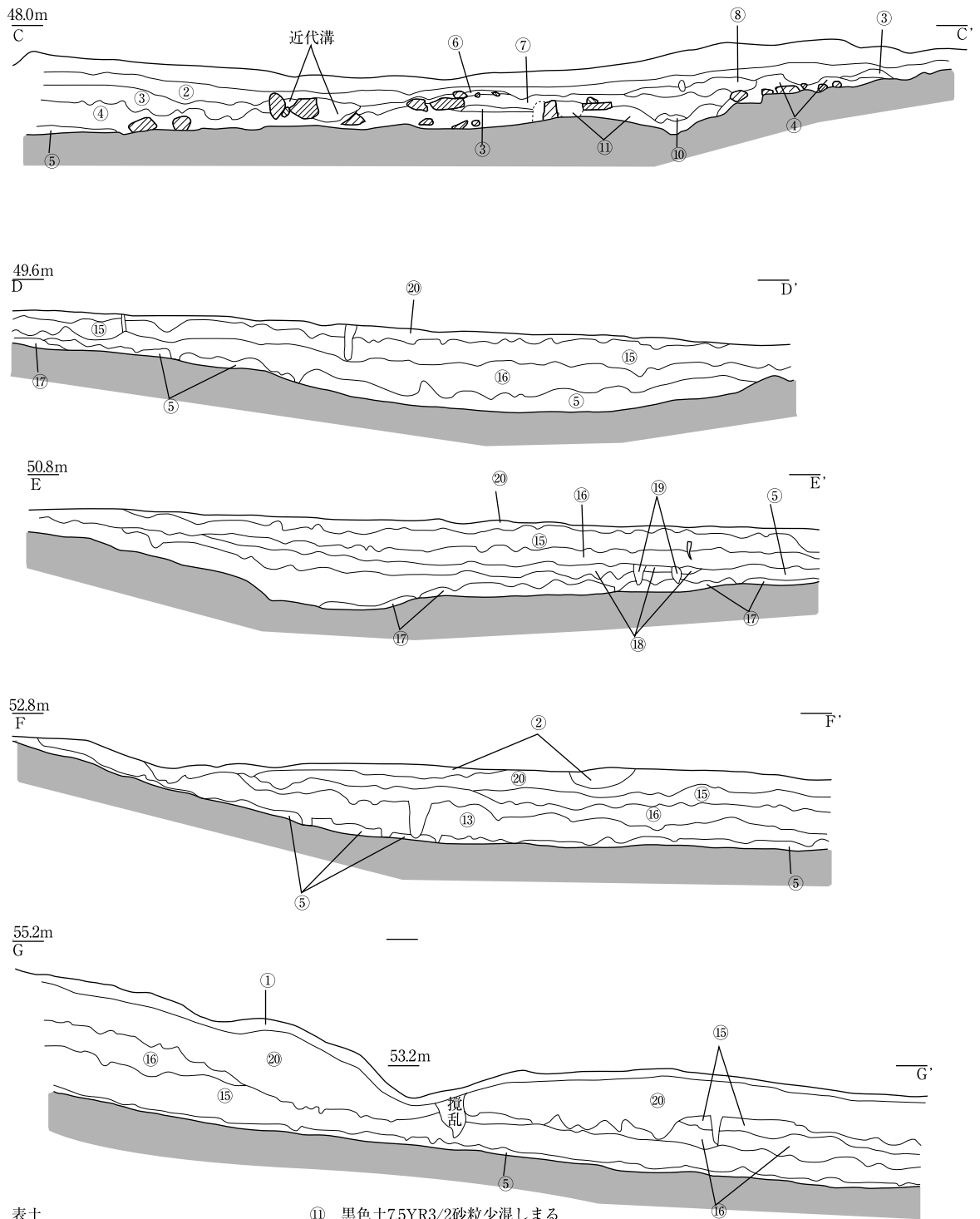
第5図 遺構分布図



第6図 東壁土層断面



第7図 西壁土層断面



- | | |
|-------------------------|----------------------|
| ① 表土 | ⑪ 黒色土7.5YR3/2砂粒少混しまる |
| ② 暗褐色土7.5YR3/3 | ⑫ 暗褐色土7.5YR3/2 |
| ③ 黒色土7.5YR2/1砂粒混 | ⑬ 暗褐色粘質土7.5YR3/3 |
| ④ 暗褐色粘質土7.5YR3/3砂粒混・角礫混 | ⑭ 黒色土7.5YR3/2 |
| ⑤ 漸移層 褐色粘質土7.5YR4/3 | ⑮ 黒色土7.5YR2/1やや粘質 |
| ⑥ 暗褐色土7.5YR3/2砂粒混 | ⑯ 黒色土7.5YR2/1 |
| ⑦ 暗褐色土7.5YR3/2砂粒少混しまる | ⑰ ローム 明褐色土7.5YR5/6 |
| ⑧ 暗褐色土7.5YR3/4砂粒混 | ⑱ 黒褐色土7.5YR2/2やや粘質 |
| ⑨ 暗褐色土7.5YR3/4砂粒少混 | ⑲ 黒褐色土7.5YR2/2 |
| ⑩ 暗褐色土7.5YR3/3砂粒混 | ⑳ 黒褐色土7.5YR3/2 |

0 1 : 100 2m

第8図 その他土層断面

の最高所では、4層のかわりに、3—1層に類似した粘性の強い黒色土が存在する。一方、調査区北西角を頂点に120m²の範囲には、粘性や包含物が多様な薄い暗褐色土層が、場所により黒色土を挟んで複雑に重なる。この部分の土層には、表土を除くいずれの層にも一辺50cmまでの角礫が多量に含まれているので、調査地西側の谷からの水流や土砂が、時に土石流となって浸食と堆積を繰り返した結果であると考えられる。調査区北端では、遺構も遺物も近代以降のものを除いてほぼ皆無であったことは、縄文時代から近世までの長期にわたり、このような作用が継続したことを示している。余談ながら、調査期間中にあった集中豪雨の水流も、ちょうどこの部分を洗い流していた。

第2節 縄文・弥生時代の調査

1. 概要

坂長第8遺跡では、大きく分けて2時期の遺構および遺物包含層が確認されている。上層は古墳時代中期を中心とし、下層は主に縄文時代晩期から弥生時代前期のものである。年代順に、まず下層から報告する。

縄文・弥生時代の遺構として確実なものは検出されなかった。調査区東端にわずかにかかっていた段状遺構SS1は、埋土の状況から、この時期に属する可能性が高い。なお、4層上面で検出した土坑やピットの中にも、この時期のものがあるかもしれないが、いずれも無遺物な上に、厚い黒色土層のどこから掘り込まれたものか認識することは不可能であったので、上層のものとして一括して扱う。

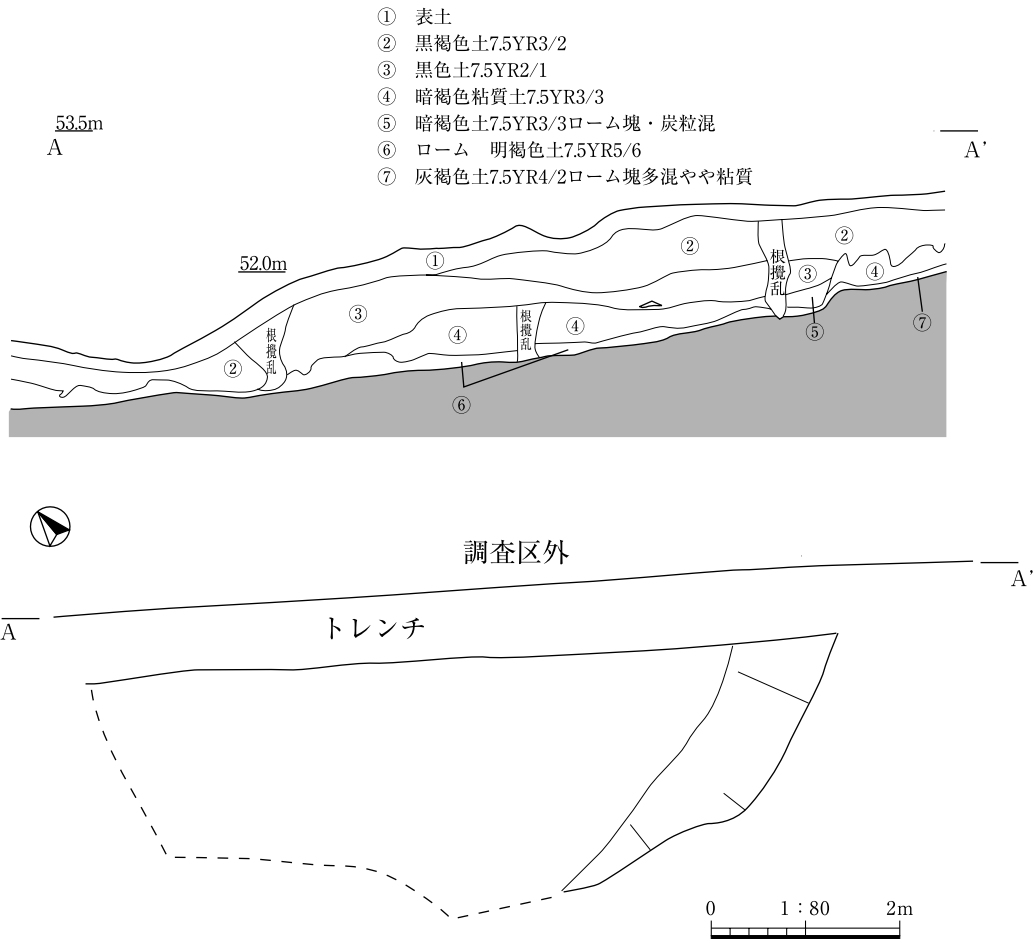
この時期の遺物が多く出土するのは、調査区の中程のO78グリッドからR80グリッドにかけてである。出土状況は散漫で、平面的に明瞭な集中部を形成することがない。土器は大半が細片で、弱い転磨の痕跡が認められるものが多い。したがって、ほぼ全てが原位置を動いていると考えられる。原位置は、おそらく東側の尾根か斜面上にあったであろう。層位的には、遺物が最も多く包含されるのは、3—1層であるが、ある特定の層準に集中するわけではない。3—2層からも遺物が出土しており、特に3—2層の上面を中心とした上部に偏り、下部では出土しないので、3—2層の上面あたりに本来の生活面があると考えられる。

出土遺物は、縄文土器・弥生土器・土製品・尖頭器・石鏃・石鋤・石錘等である。なお、竪穴住居や溝などの上層の遺構の埋土や、上層の遺物包含層である2層中からも、上層の遺物に混じって下層の遺物が多く出土した。石器については、数が少なく、敲石や砥石などどちらに属するか判断が難しいものが含まれるため、遺構から出土したものについては上層の各遺構の中でまとめて触れる。土器については、煩雑を避けるため、縄文土器と弥生土器については、上層の遺構や包含層出土のものもここで扱う。

2. 段状遺構

SS1（第9図）

R81グリッドの調査区東端に位置し、ほとんどが調査区外にある。西側を浸食によって失っており、4×2.4m分だけが調査できた。4層を60cm掘り込んで設けられており、埋土の主体が3層であることから、下層の遺構と考えられる。壁の立ち上がり部分には炭粒を含む土層が堆積している。床面から縄文土器か弥生土器の細片が出土した。床面に柱穴や壁溝などはないが、竪穴住居跡の一部であるかもしれない。



第9図 SS1

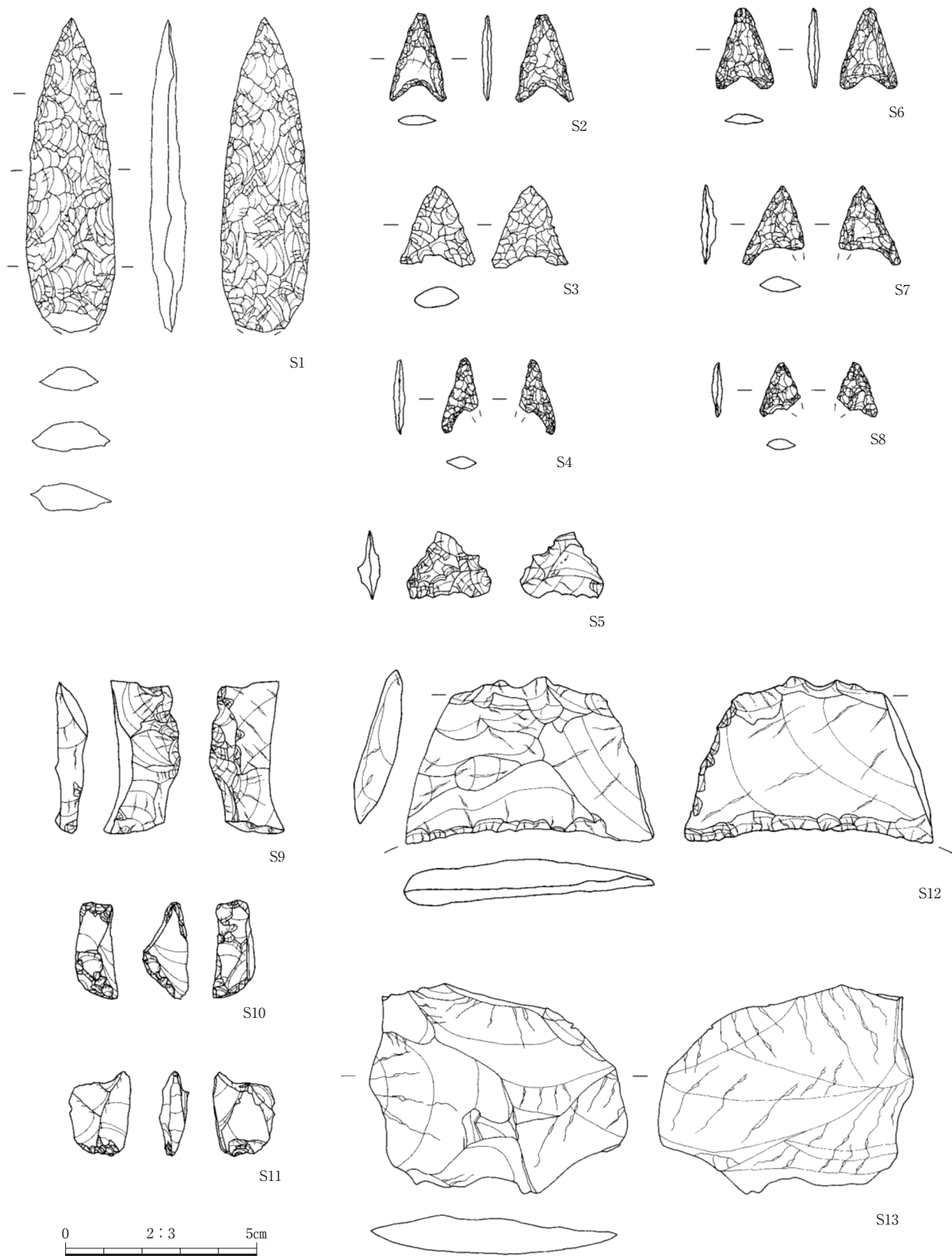
3. 出土遺物

石器（第10～15図、図版20、21、27）

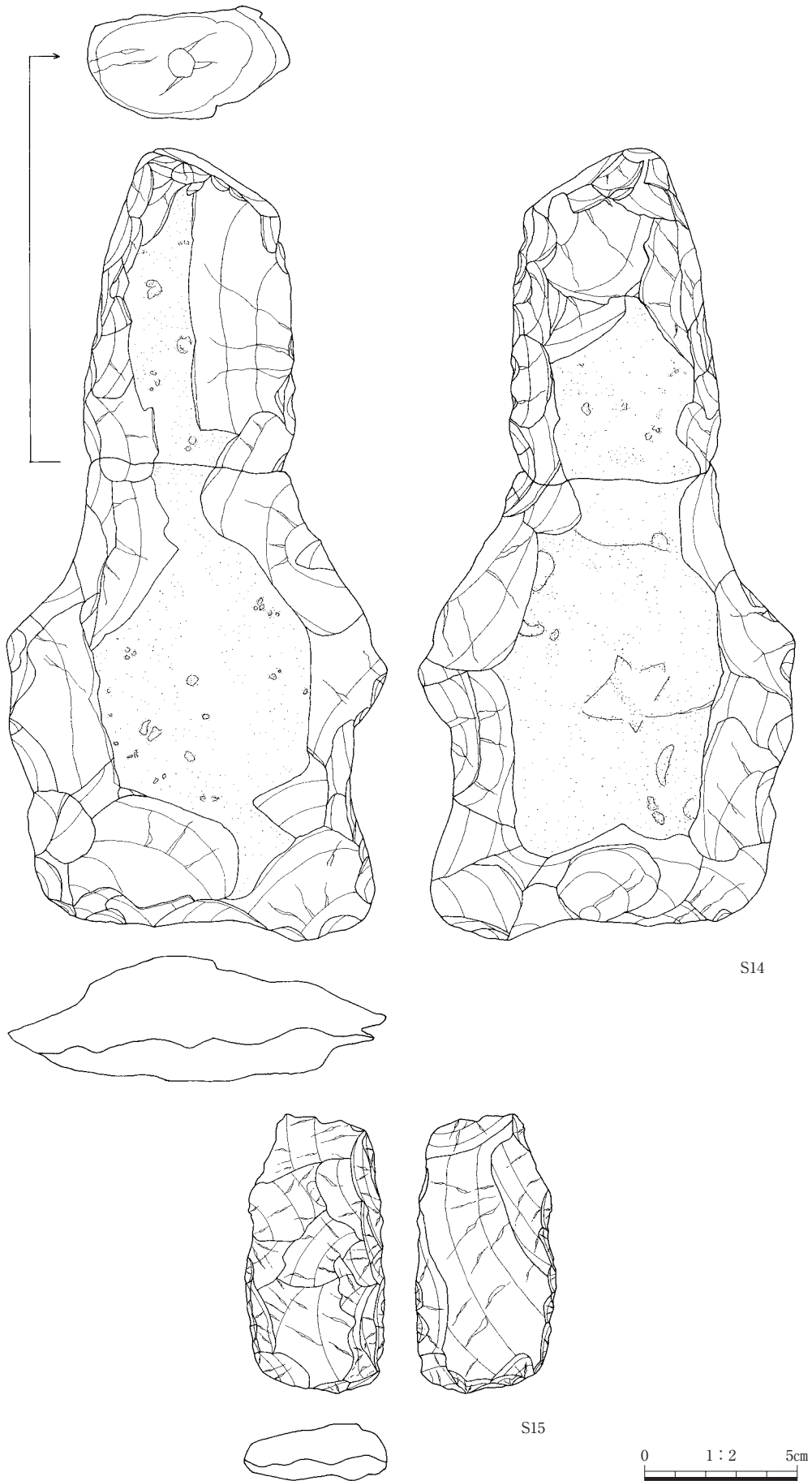
S1は黒曜石製の尖頭器で、N76グリッドの4層上面から出土した。押圧剥離ではなく打撃によって製作されており、片面を中心に突出部や反転事故の段差があるものの、刃縁や先端は丁寧に鋭く仕上げられている。表面は水和層が少し認められ、縁部には若干の転磨の痕跡がある。出土層位と形態から、この尖頭器のみは縄文時代草創期のものと考えられるが、技術的には旧石器時代のものである可能性を残す。

S2からS5は石鏃で、S2・S6・S7はサヌカイト製、他は黒曜石製である。S5は製作途中の事故品で、他はみな凹基である。

S9からS11は楔形石器またはその削片。S9とS10は黒曜石、S11は鉄石英を石材とする。



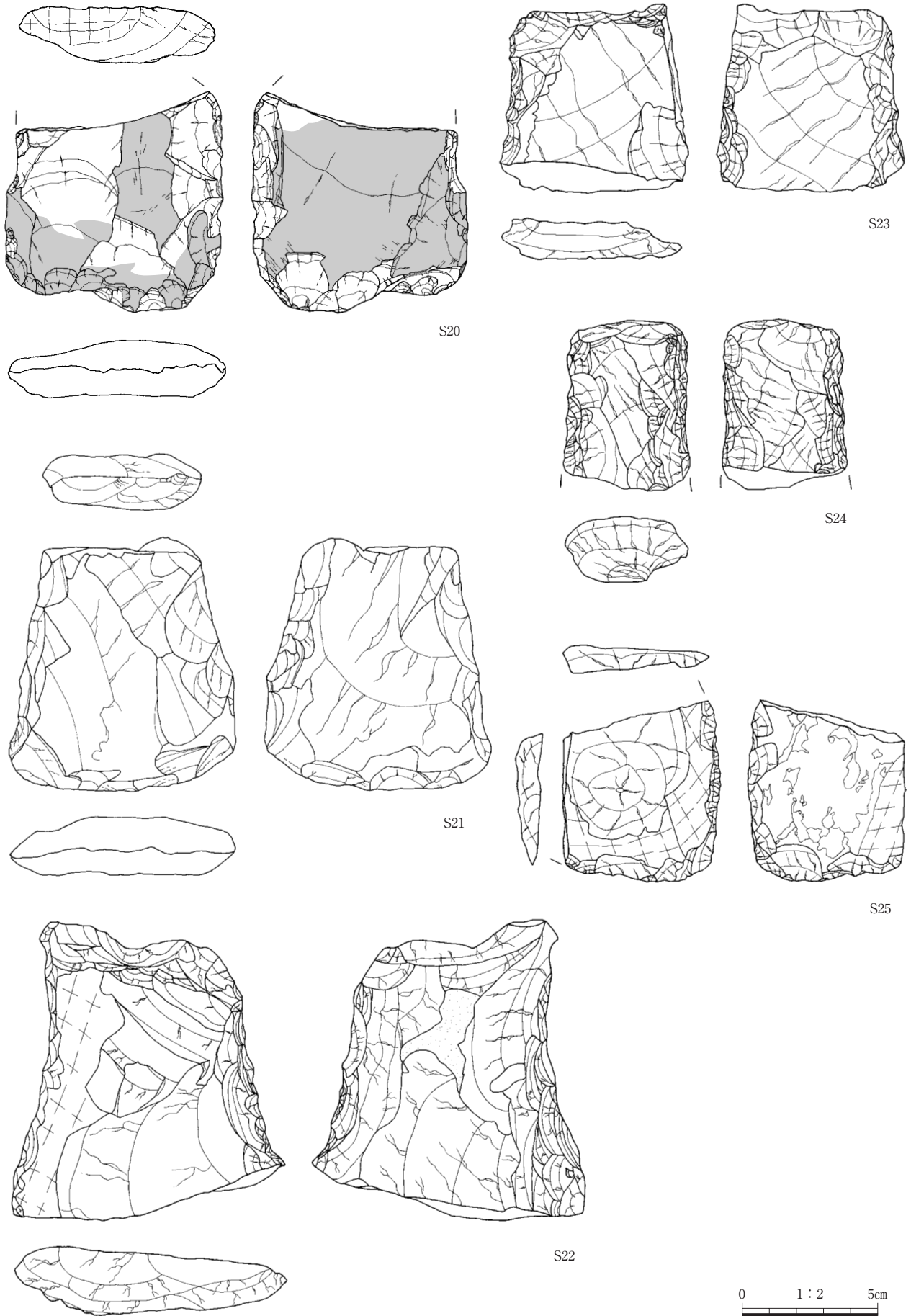
第10図 石器 (1)



第11図 石器(2)



第12図 石器(3)

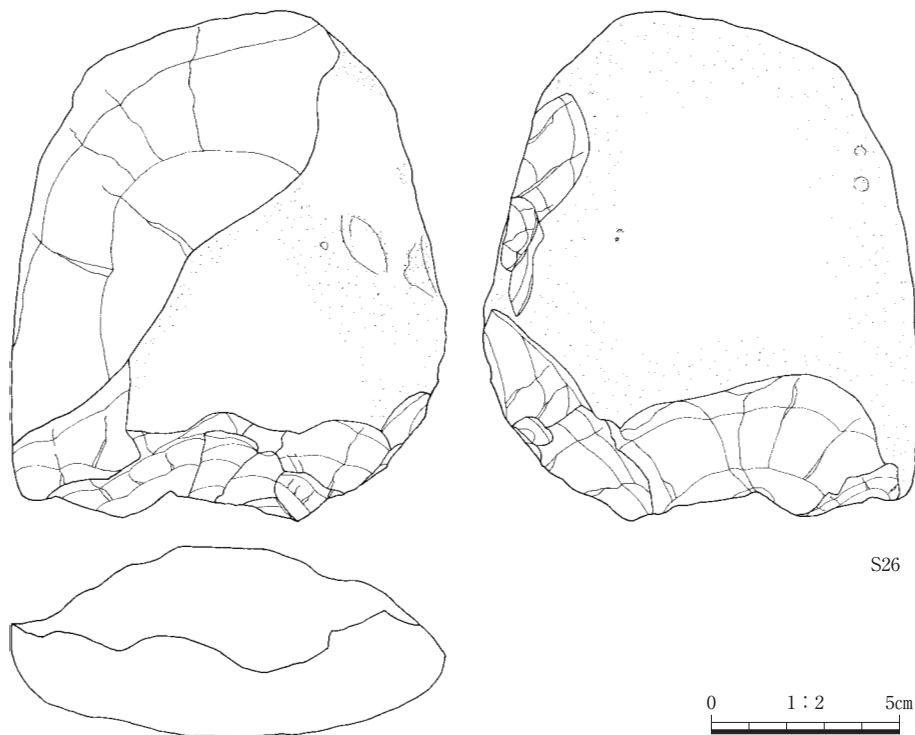


第13図 石器（4）

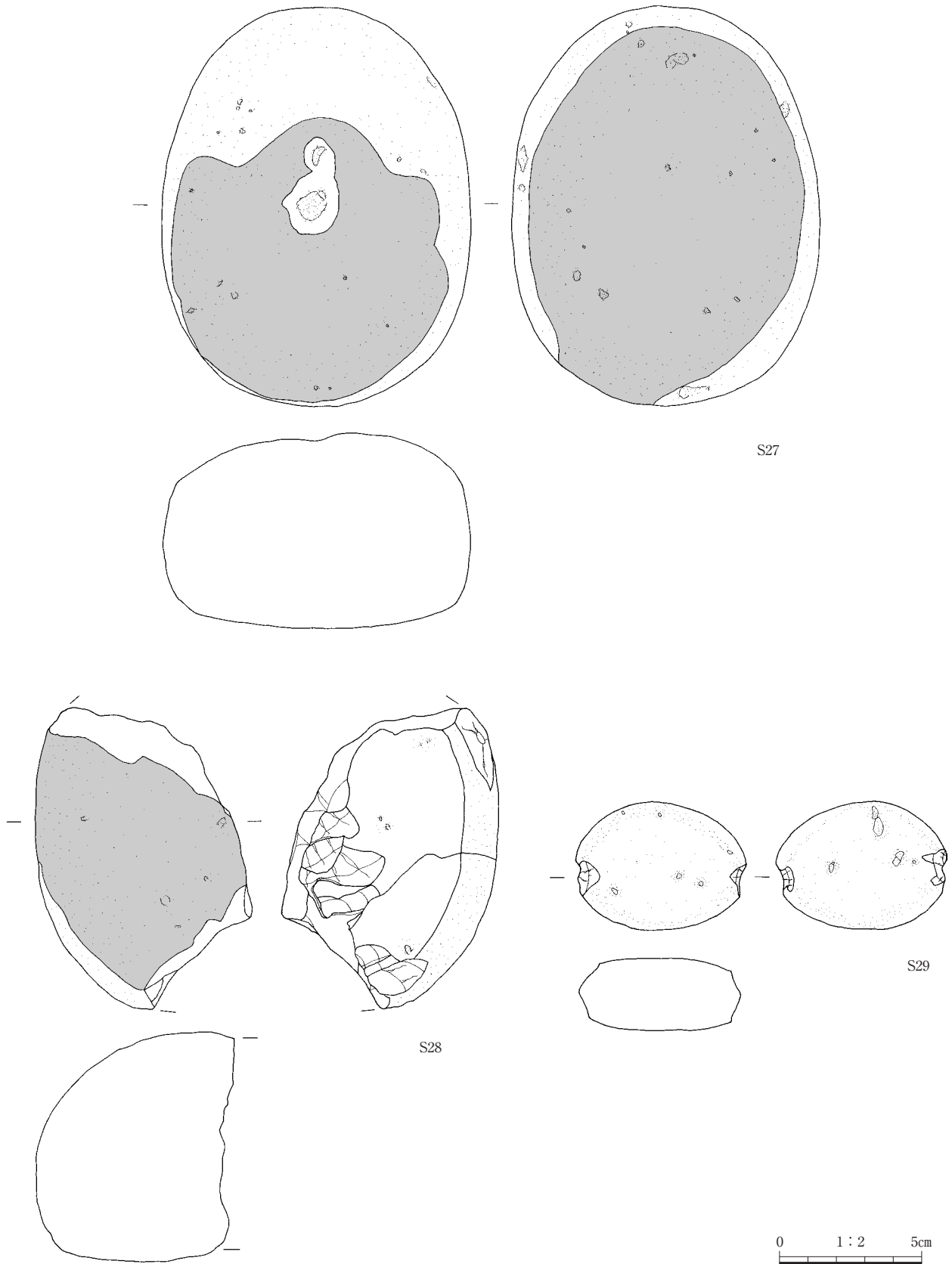
S12はサヌカイトの削器。横形剥片を素材とし、両面調整で周辺に刃部を形成する。折れはおそらく使用時で、本来は倍近い大きさがあったであろう。S13は二次加工のある剥片。サヌカイト製。横形剥片の打面側をわずかに二次加工したもの。

S14からS25は石鋤である。石材は安山岩が多く、他に泥質片岩、デイサイト、閃緑岩、玄武岩のものが少量ずつある。完形品は3点のみで、ほとんどが破損している。破損面の状況から、多くは使用時の折損と思われる。形態は短冊形が多く、撥形もある。S15のような軽量のものも例外的で、重量のあるものが多い。特に、S14は有肩に近い形態を呈する長大なもので1,224gを量り、受熱により折損したものが接合した。重くて破損した石鋤が多く存在することは、土を掘る作業が頻繁に行われたことを暗示するもので、農耕具としての使用を想定するのが自然であろう。

S26は安山岩製の両刃の礫器で、石鋤の製作途中品かもしれない。S27とS28は磨石である。ともに安山岩で、S27は2面が、S28は1面が、激しい使用によって平滑になっている。S27は凹石と複合している。S29は石錘で、安山岩の小礫の両端をわずかに打ち欠いたもの。



第14図 石器（5）



第15図 石器(6)

第10～15図 石器観察表

遺物 番号	挿図 番号	遺 構 層 位	型 式	長 (cm)	法 幅 (cm)	量 厚 (cm)	重量 (g)	石 材	備 考
S 1	10	N76 4層上面	尖頭器	8.2	2.4	1.0	17.1	黒曜石	縄文草創期 (旧石器の可能性有)
S 2	10	P79 3層	石鏃	2.3	1.5	0.3	0.7	サヌカイト	
S 3	10	Q79 2層	石鏃	2.1	1.9	0.6	1.3	黒曜石	
S 4	10	Q79 3層	石鏃	2.0	1.0	0.3	0.3	黒曜石	
S 5	10	P78 2層	石鏃	1.7	2.2	0.6	1.3	黒曜石	
S 6	10	Q79 3層	石鏃	2.1	1.5	0.3	0.6	サヌカイト	
S 7	10	Q80 3層	石鏃	2.1	1.6	0.4	0.7	サヌカイト	
S 8	10	表土剥ぎ後検出	石鏃	1.4	1.1	0.3	0.3	黒曜石	
S 9	10	P77 3層	楔形石器	4.0	2.0	0.8	5.1	黒曜石	
S10	10	R80 3層	楔形石器	2.5	1.1	1.2	2.4	黒曜石	
S11	10	O77 3層	楔形石器	2.2	1.6	0.8	2.2	鉄石英	
S12	10	R79 3層	削器	4.4	6.5	1.2	25.7	サヌカイト	
S13	10	S80 3層	二次加工のある剥片	5.3	6.6	1.0	34.4	サヌカイト	
S14	11	N76 3層	石鏃	25.2	12.1	4.1	1,224.0	安山岩	
S15	11	Q80 3—1層	石鏃	9.1	4.6	1.8	83.0	デイサイト	
S16	12	1Tr 3層	石鏃	19.6	7.9	3.4	425.0	デイサイト	
S17	12	東側Tr 3層	石鏃	14.3	4.8	2.3	203.0	閃緑岩	
S18	12	R80 3層	石鏃	7.7	52.0	1.8	90.0	安山岩	
S19	12	N76 3層	石鏃	12.1	9.3	3.6	546.0	安山岩	
S20	13	P79 2層	石鏃	8.1	8.0	2.1	163.0	泥質片岩	
S21	13	R80 3層	石鏃	9.1	8.2	2.1	213.0	安山岩	
S22	13	O78 2層	石鏃	10.9	10.0	2.6	361.0	安山岩	
S23	13	R80 3層	石鏃	6.9	6.9	1.5	112.0	泥質片岩	
S24	13	P79 2層	石鏃	6.2	4.6	2.4	103.0	玄武岩	
S25	13	P78 3—1層	石鏃	6.6	5.8	1.0	58.0	泥質片岩	
S26	14	S81 2層	礫器	13.2	11.4	5.0	783.0	安山岩	
S27	15		磨石 (凹石)	13.9	10.8	6.8	1,543.0	安山岩	
S28	15	077・078 3層	磨石	10.0	7.1	7.8	787.0	安山岩	
S29	15	O77 3層	石錘	4.4	6.0	2.5	85.3	安山岩	

縄文土器（第16～20図、図版22～25、27）

出土した縄文土器は、晩期の突帯文土器が主体で、条痕を施す粗製土器が一定量含まれている。ほとんどが細片であるため、両者の比率や、器形、大きさ、口縁部以外の形態についてなど、不明なことが多い。

突帯文土器は、ほとんどが深鉢と思われる。突帯の刻目の有無で大分類し、突帯の位置で細分した。体部の調整は、転磨や風化により不明なものが多いが、条痕を施すものよりは、ナデによるものが多い点で、粗製土器とは異なるようである。底部まで残存する資料がないため、底部の形態は不明である。しかし、後述するとおり、弥生土器の資料数が縄文土器に比べてはるかに少ないにもかかわらず、多数の平底の底部片が出土しており、また、明らかに丸底を呈する底部の破片は出土していないので、平底であった可能性が高い。

1a類（1～5）：刻目の突帯が口縁から十分離れているもの。突帯は一般に突出度の高いものが多い。5は例外的で、突帯が非常に低く上下に沈線がある。

1b類（7～37）：刻目の突帯が口縁の直下に付くもの。突帯は突出の強いものが多いが、弱いものも少なからずあり、28のように痕跡的なものまである。刻目の入れ方は、多様であるが、線状や溝状のものが多い。

1c類（38～64）：刻目の突帯が口縁とほぼ一体化したもの。突帯の形態はさまざまで、59のように痕跡的なもの、64のように幅広のもの、62や63のように屈曲した口縁に見えるものなど、個性の強いものが含まれる。口縁を損なうことを嫌ったためか、この類の刻目には三角形や菱形を呈する浅いものが多いようである。

1d類（65～69）：突帯と口縁の両方に刻目をもつもの。桂見遺跡などに類例があり、山陰地方の突帯文土器としては比較的早い段階に位置づけられるものが多い。69は例外で、口径が小さく口縁が外反する特殊な形態を呈し、刻目は点状である。69と同種の土器は、長瀬高浜遺跡で多く出土しており、遠賀川式土器との関係が強いとされる。弥生土器に分類すべきかもしれない。

この他に、1点だけ無頸壺と考えられるものがある（70）。突帯と口縁は十分離れ、その間にはナデが施される。突帯は細いが突出し、丁寧な作りである。

2a類（71・72）：無刻目の突帯が、口縁から十分離れているもの。突帯文土器の中で最も数は少ない。口縁が外反するもの（71）と内湾するもの（72）が含まれる。

2b類（73～109）：無刻目の突帯が、口縁の直下に位置するもの。突帯は突出度の強いものが多いが、弱いものも一定量含まれる。103のようにナデにより隆線文のように作られるものもある。口縁が外反気味のものが多い。73には補修孔があげられている。弥生時代前期の突帯文系土器が一定量含まれていると思われる。

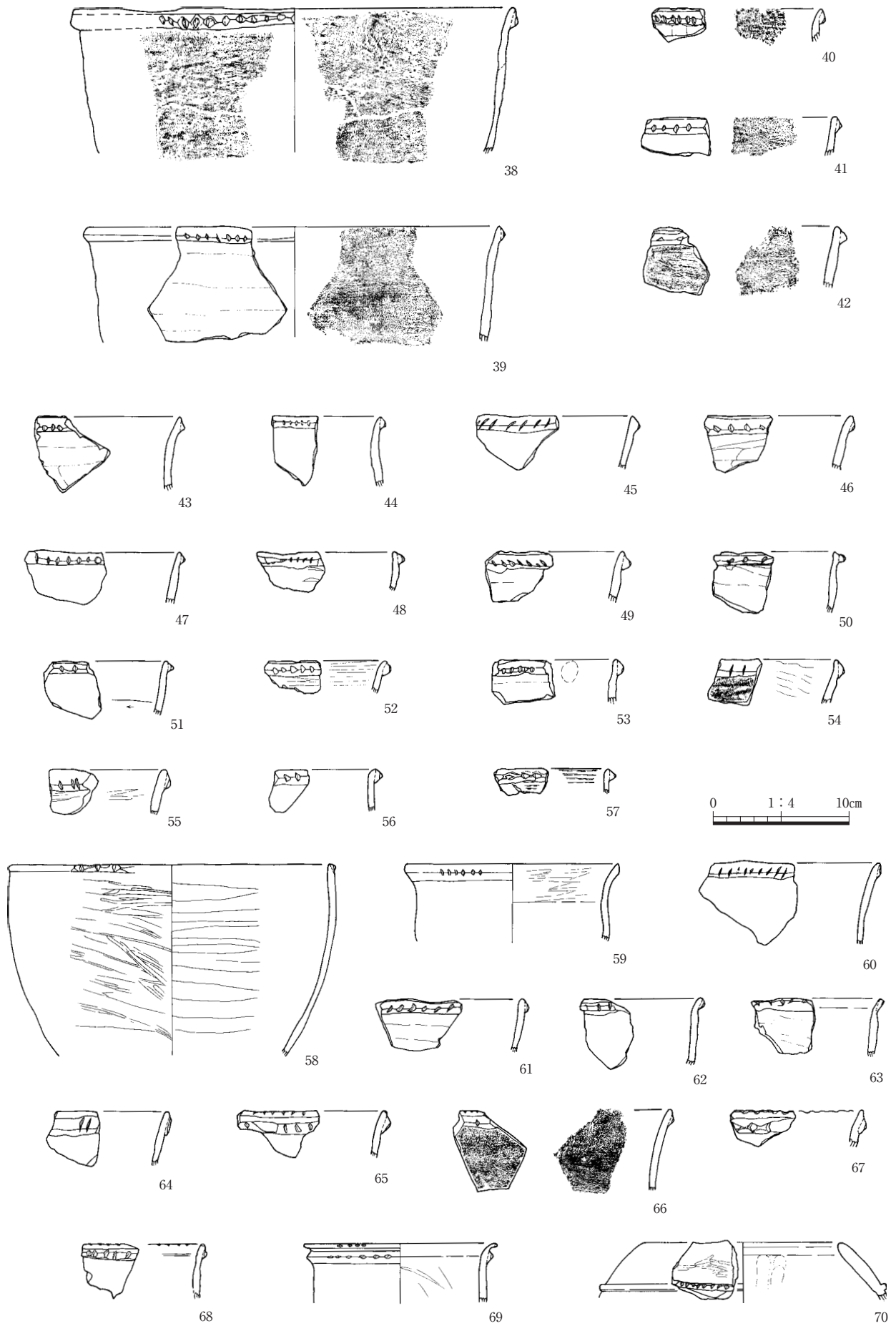
2c類（110～129）：無刻目の突帯が口縁とほぼ一体になったもの。111は突帯の上半にミガキのような細かなナデを施す点で特殊である。

この他に、無刻目の突帯が口縁の直下にまわり、そこからさらに縦方向に突帯が下がるものがある（130・131）。130では、縦の突帯は2条である。これらは突帯文土器の中に含めるべきではないかもしれない。また、横方向に2条の突帯が巡る破片が1点だけあるが（132）、弥生土器の可能性もある。

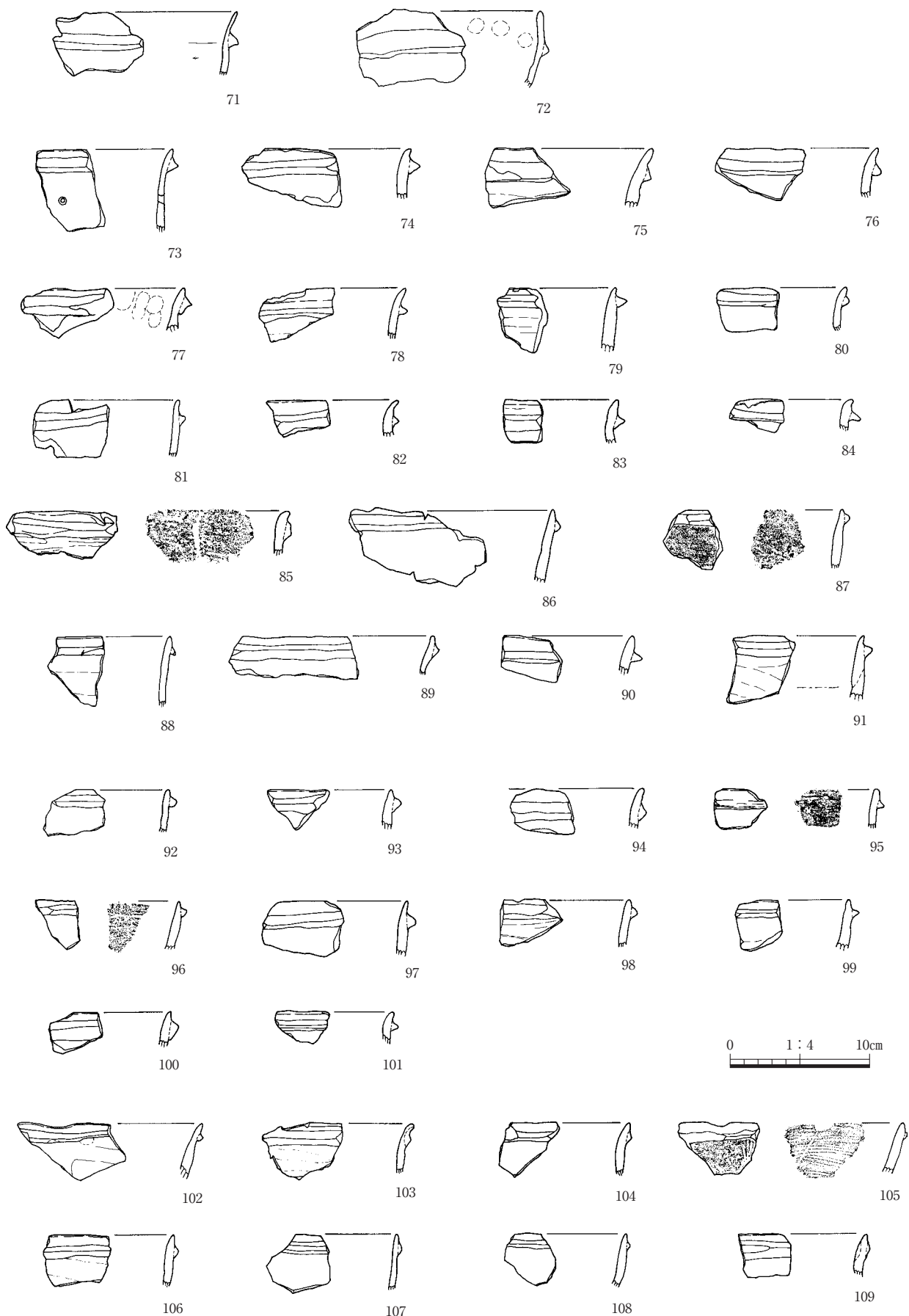
粗製土器（第20図）には、深鉢（138・141・142など）と浅鉢（156～161）がある。口縁部の破片の数は、突帯文土器よりもかなり少ない。ある程度全形が分かる資料から知られるところでは、大き



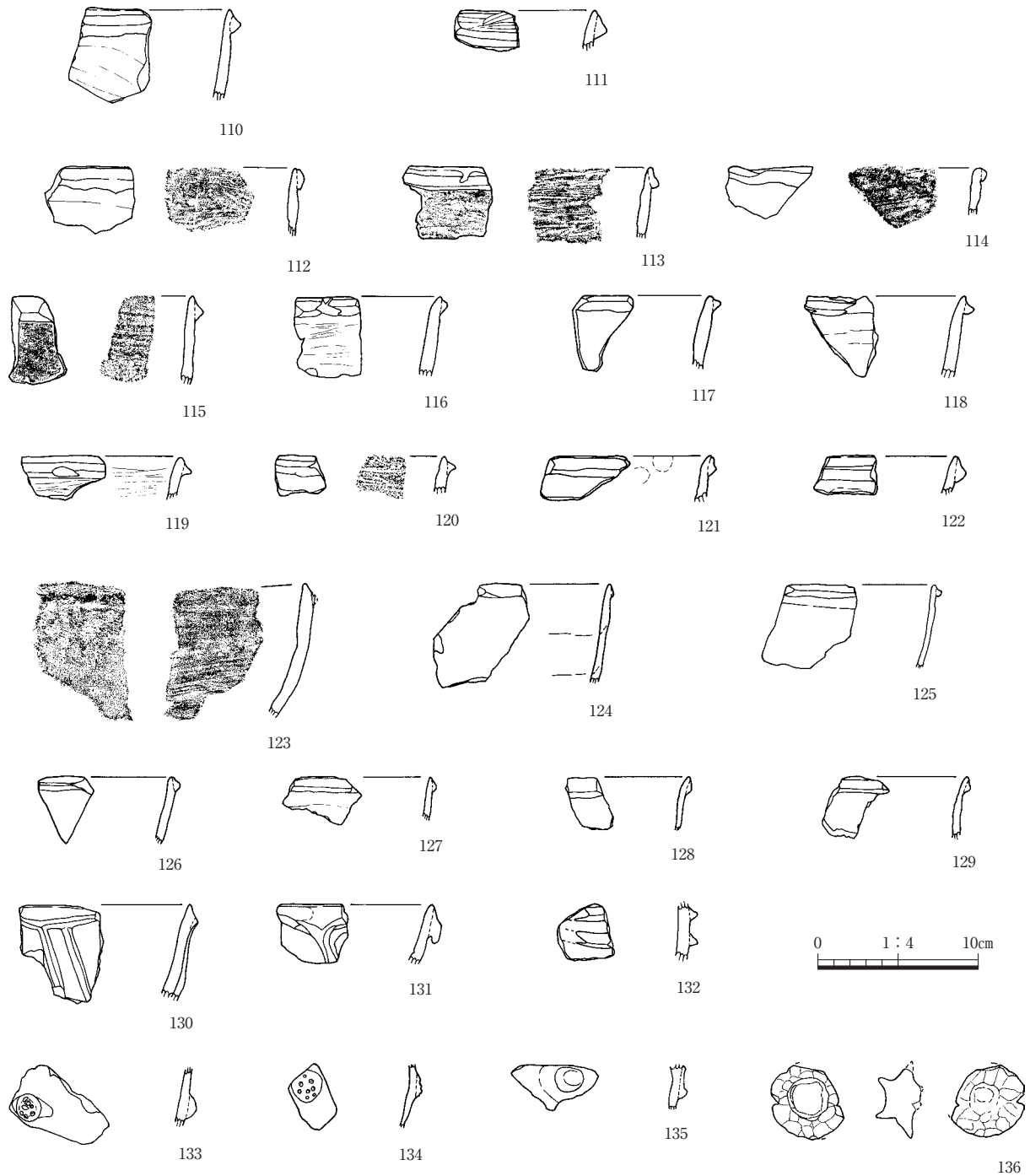
第16図 縄文土器 (1)



第17図 縄文土器 (2)



第18図 縄文土器 (3)



第19図 縄文土器（4）

さや形態に多様性がありそうである。141は底部付近の破片で丸底と思われる。深鉢は多くが内外面に条痕をもつ。

浅鉢は椀に近い形態の小さなものが6個体分出土している。156は粗いミガキで、157は条痕で、158はナデで調整する。注目されるのは、手捏ねで成形された一群（159～161）で、一見古墳時代の手捏土器のようであるが胎土が異なり、うち2点は3層からの出土なので、下層のものであろう。

縄文土器と考えられる資料にはこの他に、刺突を入れた半球状の飾りを付ける破片(133・134)や、ドーナツ状の飾りのある破片(135)がある。136は、両面につまみ状の突起をもつ円盤形の小さな土製品で、指頭で粗く仕上げられている。剥離した痕跡がないので土器の装飾ではないだろう。



第20図 縄文土器 (5)

第16~17図 遺物観察表

*復元値 △現存値

遺物 番号	挿図 番号	遺構 層位	種別 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎 焼	土 成	色調	備考
1	16	N76 3層	縄文土器 深鉢		△ 3.9	外面:条痕? 内面:ナデ	密 良好		内外面:鈍い褐色	
2	16	O77 3層	縄文土器 深鉢		△ 4.1	内外面:不明	密 良好		内外面:鈍い黄褐色	
3	16	O78・P78 2層・3層	縄文土器 深鉢		△ 5.1	外面:条痕 内面:ナデ	密 良好		外面:鈍い褐色 内面:鈍い黄褐色	外面:スス付着
4	16	2Tr 3層	縄文土器 深鉢		△ 2.7	外面:条痕 内面:ナデ	密 良好		外面:鈍い黄褐色 内面:褐色	
5	16	R80 2層	縄文土器? 深鉢?		△ 2.9	内外面:ナデ	密 良好		内外面:黒褐色	
6	16	P78	縄文土器 深鉢		△ 3.0	内外面:不明	密 良好		内外面:褐色	
7	16	S81 3層	縄文土器 深鉢		△ 3.9	内外面:不明	密 良好		外面:鈍い褐色 内面:褐色	
8	16	O79 3層	縄文土器 深鉢		△ 3.2	内外面:不明	密 良好		内外面:鈍い褐色	
9	16	P78 3—2層	縄文土器 深鉢		△ 4.5	内外面:条痕	密 良好		内外面:黄褐色	
10	16	P78 3—1層	縄文土器 深鉢		△ 4.0	内外面:条痕 口縁内面:ヨコナデ	密 良好		内外面:淡褐色	
11	16	R80 3層	縄文土器 深鉢		△ 5.2	内外面:ナデ	密 良好		内外面:鈍い黄褐色	
12	16	P78 3層	縄文土器 深鉢		△ 4.2	内外面:ナデ	密 良好		内外面:褐色	
13	16	R79 3層	縄文土器 深鉢		△ 3.7	内外面:条痕	やや密 やや良好		内外面:鈍い黄褐色	
14	16	R80 3層	縄文土器 深鉢		△ 3.0	内外面:不明	密 良好		内外面:鈍い褐色	
15	16	O77 3層	縄文土器 深鉢		△ 2.3	内外面:不明	密 良好		内外面:鈍い褐色	
16	16	O80 3層	縄文土器 深鉢		△ 3.0	外面:条痕 内面:ナデ	密 良好		内外面:灰褐色	
17	16	P78 3—1層	縄文土器 深鉢		△ 6.3	内外面:条痕	密 良好		内外面:鈍い褐色	
18	16	O80 3層	縄文土器 深鉢		△ 5.8	内外面:ナデ	密 良好		内外面:褐色	
19	16	南Tr・S81 3層	縄文土器 深鉢		△ 6.0	内外面:条痕後ナデ	密 良好		内外面:鈍い褐色	
20	16	3—1層	縄文土器 深鉢		△ 3.9	外面:条痕 内面:ナデ	密 良好		内外面:鈍い褐色	
21	16	P78 3—1層	縄文土器 深鉢		△ 3.3	内外面:条痕	密 良好		内外面:褐色	
22	16	O77 3層	縄文土器 深鉢		△ 4.3	内外面:不明	密 良好		内外面:褐色	
23	16	1Tr 3層	縄文土器 深鉢		△ 4.6	外面:条痕 内面:ナデ	密 良好		内外面:褐色~鈍い褐色	
24	16	P79	縄文土器 深鉢		△ 4.2	内外面:不明	密 良好		内外面:褐色	
25	16	N77 2層	縄文土器 深鉢		△ 3.8	内外面:不明	密 良好		外面:褐色 内面:黒褐色	
26	16	P78 2層	縄文土器 深鉢		△ 3.1	内外面:不明	密 良好		内外面:鈍い黄褐色	
27	16	O79 3層	縄文土器 深鉢		△ 2.0	内外面:不明	密 良好		内外面:褐色	
28	16	P78 3—1層	縄文土器 深鉢		△ 4.0	内外面:不明	密 良好		外面:灰黄色 内面:鈍い黄色	
29	16	R80 3層	縄文土器 深鉢		△ 4.5	外面:条痕 内面:不明	密 良好		内外面:鈍い黄褐色	
30	16	P78 3—1層	縄文土器 深鉢		△ 2.7	外面:条痕 内面:不明	密 良好		内外面:褐色	
31	16	N76 3層	縄文土器 深鉢		△ 4.3	内外面:不明	密 良好		外面:灰黄褐色 内面:黒褐色	
32	16	O78・O79 3層	縄文土器 深鉢		△ 4.9	外面:不明 内面:条痕	密 良好		内外面:褐色	
33	16	O79 3層	縄文土器 深鉢		△ 5.0	内外面:条痕	密 良好		内外面:淡褐色	
34	16	P78 3—1層	縄文土器 深鉢		△ 4.0	外面:不明 内面:条痕?	密 良好		内外面:黄褐色	
35	16	O77 3層	縄文土器 深鉢		△ 4.1	外面:不明 内面:条痕	密 良好		内外面:褐色	
36	16	S80 2層	縄文土器 深鉢		△ 4.5	内外面:不明	密 良好		外面:鈍い褐色 内面:浅黄色	
37	16	S11	縄文土器 深鉢		△ 3.0	内外面:不明	密 良好		内外面:褐色	
38	17	P78 3—1層	縄文土器 深鉢	*32.2	△10.5	内外面:条痕後ナデ	密 良好		外面:鈍い黄褐色~鈍い黄褐色 内面:鈍い黄褐色	
39	17	O77 3層	縄文土器 深鉢	*30.4	△ 8.5	内外面:条痕	密 良好		外面:鈍い褐色~鈍い黄褐色 内面:鈍い黄褐色	
40	17	S11 1層	縄文土器 深鉢		△ 2.4	内外面:不明 内面:条痕	密 良好		外面:鈍い黄褐色 内面:灰黄褐色	

第17～18図 遺物観察表

*復元値 △現存値

遺物番号	挿回番号	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎焼	土成	色調	備考
41	17	Q79 3層	縄文土器 深鉢		△ 2.8	外面：不明 内面：条痕	密 良好		内外面：鈍い黄橙色	
42	17	1 Tr	縄文土器 深鉢		△ 4.6	内外面：条痕	密 良好		外面：灰色 内面：橙色	
43	17	Q79 3層	縄文土器 深鉢		△ 5.6	外面：条痕 内面：不明	密 良好		外面：鈍い橙色 内面：浅黄橙色	
44	17	Q78 3層	縄文土器 深鉢		△ 5.0	内外面：不明	密 良好		外面：浅黄橙色～鈍い橙色 内面：浅黄橙色	
45	17	O77 3層	縄文土器 深鉢		△ 4.0	内外面：不明	密 良好		内外面：橙色	
46	17	Q79 3—1層	縄文土器 深鉢		△ 4.0	外面：条痕後ナデ 内面：不明	密 良好		内外面：鈍い橙色	
47	17	O77 3層	縄文土器 深鉢		△ 3.8	内外面：不明	密 良好		内外面：橙色	
48	17	S 11 1層	縄文土器 深鉢		△ 2.8	内外面：不明	密 良好		外面：灰色 内面：橙色	
49	17	R81 3層	縄文土器 深鉢		△ 3.7	内外面：不明	密 良好		内外面：鈍い黄橙色～灰色	
50	17	1 Tr 3層	縄文土器 深鉢		△ 4.5	内外面：不明	密 良好		外面：鈍い黄橙色 内面：鈍い黄褐色	
51	17	O78 3—1層	縄文土器 深鉢		△ 4.0	内外面：不明	密 良好		内外面：鈍い橙色	
52	17	P79 3層	縄文土器 深鉢		△ 2.4	内外面：条痕	密 良好		内外面：橙色	
53	17	Q79 3層	縄文土器 深鉢		△ 3.1	内外面：ナデ	密 良好		外面：鈍い橙色 内面：鈍い黄褐色	
54	17	Q79 3層	縄文土器 深鉢		△ 4.2	内外面：条痕	密 良好		内外面：黒褐色	
55	17	Q79 3層	縄文土器 深鉢		△ 3.3	内外面：条痕	密 良好		外面：褐色 内面：褐色	
56	17	Q79 3層	縄文土器 深鉢		△ 3.0	内外面：不明	密 良好		内外面：褐色	
57	17	O80 3—2層	縄文土器 深鉢		△ 1.8	内外面：条痕	密 良好		外面：褐色 内面：褐色～浅黄褐色	
58	17	P78 3—1層	縄文土器 深鉢	*23.4	△14.2	外面：条痕後ナデ 内面：ナデ	密 良好		外面：褐色～黄褐色 内面：褐色	外面：スス付着
59	17	P78 3—1層	縄文土器 深鉢	*15.7	△ 5.7	外面：不明 内面：条痕	密 良好		内外面：淡褐色	
60	17	N77 3層	縄文土器 深鉢		△ 6.0	内外面：不明	密 良好		内外面：褐色	
61	17	Q79 3層	縄文土器 深鉢		△ 3.8	内外面：不明	密 良好		外面：鈍い黄褐色～灰黄色 内面：灰黄色	
62	17	P78 3—1層	縄文土器 深鉢		△ 4.8	内外面：ナデ	密 良好		内外面：明褐色	
63	17	Q79 3層	縄文土器 深鉢		△ 4.1	内外面：条痕	密 良好		内外面：灰黄色～鈍い黄褐色	
64	17	R80 3層	縄文土器 深鉢		△ 3.8	外面：条痕後ナデ 内面：ナデ	密 良好		内外面：鈍い褐色	
65	17	N76 2層	縄文土器 深鉢		△ 3.4	内外面：不明	密 良好		内外面：褐色	
66	17	O77 3層	縄文土器 深鉢		△ 6.0	外面：不明 内面：条痕	密 良好		内外面：鈍い褐色	
67	17	P78 3—1層	縄文土器 深鉢		△ 2.7	内外面：不明	密 良好		外面：鈍い褐色 内面：鈍い黄褐色	
68	17	P78 3—1層	縄文土器 深鉢		△ 4.0	外面：ナデ 内面：不明	密 良好		外面：黒色 内面：黒褐色	
69	17	P78 3—2層	縄文土器 深鉢	*14.0	△ 4.0	内外面：ナデ	密 やや軟質		外面：黄灰褐色 内面：灰褐色	
70	17	R80 3層	縄文土器 深鉢	*14.6	△ 4.2	内外面：ナデ	密 良好		内外面：鈍い褐色	
71	18	P78 3層	縄文土器 深鉢		△ 4.5	内外面：不明	密 良好		内外面：褐色	
72	18	Q77 3層	縄文土器 深鉢		△ 5.5	内外面：不明	密 良好		内外面：褐色～黄褐色	
73	18	O77 3層	縄文土器 深鉢		△ 5.8	内外面：不明	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	補修孔あり
74	18	S81 3層	縄文土器 深鉢		△ 3.8	外面：ナデ 内面：不明	密 良好		内外面：鈍い黄褐色～褐色	
75	18	O77 2層	縄文土器 深鉢		△ 3.6	内外面：不明	密 良好		内外面：鈍い褐色～鈍い黄褐色	
76	18	S 12 3層	縄文土器 深鉢		△ 3.4	内外面：不明	密 良好		外面：暗灰黄色 内面：黄褐色	
77	18	P79 埋土	縄文土器 深鉢		△ 3.0	内外面：ナデ	密 良好		外面：褐色～鈍い褐色 内面：褐色	
78	18	S81 3層	縄文土器 深鉢		△ 3.7	内外面：ナデ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色～褐色	
79	18	P78 3—2層	縄文土器 深鉢		△ 4.4	内外面：ナデ	密 良好		外面：鈍い褐色～褐灰色 内面：鈍い黄褐色～褐灰色	
80	18	O77 3層	縄文土器 深鉢		△ 3.0	内外面：不明	密 やや良好		内外面：鈍い黄褐色～褐灰色	

第18～19図 遺物観察表

*復元値 △現存値

遺物 番号	挿図 番号	遺 構 層 位	種 別 器 種	口径(cm) 底径(cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎 焼	土 成	色 調	備 考
81	18	O77 2層	縄文土器 深鉢		△4.1	内外面：ナデ	密 良好		内外面：橙色	
82	18	P78 3—1層	縄文土器 深鉢		△2.5	内外面：不明	密 良好		内外面：鈍い橙色	
83	18	O79 3層	縄文土器 深鉢		△3.1	内外面：ナデ	密 良好		内外面：橙色	
84	18	O77 2層	縄文土器 深鉢		△2.2	内外面：ナデ	密 良好		外面：鈍い褐色 内面：鈍い黄褐色～鈍い橙色	
85	18	O77 3層	縄文土器 深鉢		△3.0	内外面：条痕	密 良好		外面：鈍い黄褐色～灰褐色 内面：鈍い黄褐色	
86	18	P78・P79 3—1層	縄文土器 深鉢		△5.2	内外面：ナデ	密 良好		内外面：橙色	
87	18	O79 3層	縄文土器 深鉢		△4.2	内外面：ナデ	密 良好		内外面：黒褐色	
88	18	N77 3層	縄文土器 深鉢		△4.9	内外面：ナデ	密 良好		外面：灰黄褐色～褐灰色 内面：鈍い黄褐色	
89	18	O77 3層	縄文土器 深鉢		△2.8	内外面：ナデ	密 良好		内外面：灰黄褐色	
90	18	O79 3層	縄文土器 深鉢		△3.0	内外面：不明	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	
91	18	P78 3—1層	縄文土器 深鉢		△4.5	内外面：ナデ	密 良好		外面：鈍い橙～橙色 内面：橙色	
92	18	O79 3層	縄文土器 深鉢		△3.1	内外面：不明	密 良好		内外面：橙色	
93	18	N77 3層	縄文土器 深鉢		△2.8	内外面：不明	密 やや良好		内外面：橙色	
94	18	P79 3層	縄文土器 深鉢		△3.0	内外面：不明	密 良好		内外面：鈍い橙色	
95	18	P79 3層	縄文土器 深鉢		△2.8	内外面：条痕後ナデ	密 良好		内外面：橙色	
96	18	O80 3—2層	縄文土器 深鉢		△3.4	外面：条痕 内面：ナデ	密 良好		内外面：橙色	
97	18	P78 3—1層	縄文土器 深鉢		△4.0	内外面：不明	密 良好		外面：橙色～灰色 内面：橙色	
98	18	O79 3層	縄文土器 深鉢		△3.2	外面：条痕後ナデ 内面：ナデ	密 良好		内外面：鈍い橙色	
99	18	N77 3層	縄文土器 深鉢		△3.5	内外面：ナデ	密 良好		内外面：橙色～鈍い黄褐色	
100	18	P78 3—1層	縄文土器 深鉢		△2.4	内外面：ナデ	密 良好		外面：浅黄褐色～褐灰色 内面：浅黄褐色	
101	18	N77 3層	縄文土器 深鉢		△2.3	内外面：ナデ	密 良好		外面：鈍い橙色 内面：橙色	
102	18	N77 3層	縄文土器 深鉢		△4.1	内外面：ナデ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色～灰黄褐色	
103	18	O77 3層	縄文土器 深鉢		△3.5	内外面：ナデ	密 良好		外面：灰黄褐色～褐灰色 内面：鈍い黄褐色	
104	18	N76 3層	縄文土器 深鉢		△3.7	内外面：不明	密 良好		内外面：鈍い黄褐色～褐灰色	
105	18	O79 3層	縄文土器 深鉢		△3.6	外面：条痕 内面：ナデ	密 良好		内外面：鈍い褐色	
106	18	O79 3層	縄文土器 深鉢		△3.7	内外面：不明	密 良好		外面：暗灰黄色～鈍い黄褐色 内面：灰黄褐色～鈍い黄褐色	
107	18	O77 3層	縄文土器 深鉢		△3.9	内外面：ナデ	密 良好		内外面：鈍い橙色	
108	18	N76 2層・3層	縄文土器 深鉢		△3.8	内外面：不明	密 良好		内外面：橙色	
109	18	O77 3層	縄文土器 深鉢		△3.1	内外面：ナデ	密 良好		外面：橙色 内面：黒褐色	
110	19	R80 3層	縄文土器 深鉢		△5.8	内外面：不明	密 良好		内外面：橙色～鈍い黄褐色	
111	19	O77 2層	縄文土器 深鉢		△2.4	内外面：ナデ	密 良好		内外面：明赤褐色	
112	19	N77 3層	縄文土器 深鉢		△4.2	外面：不明 内面：条痕後ナデ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	
113	19	西Tr 3層	縄文土器 深鉢		△4.5	外面：条痕後ナデ 内面：条痕	密 良好		内外面：橙色	
114	19	O77 2層	縄文土器 深鉢		△2.9	外面：不明 内面：条痕後ナデ?	密 良好		内外面：淡褐色	
115	19	O80 2層	縄文土器 深鉢		△5.5	内外面：ナデ	密 良好		内外面：灰黄褐色	
116	19	P78 3—1層	縄文土器 深鉢		△5.0	内外面：ナデ	密 良好		外面：橙色～灰褐色 内面：橙色	
117	19	P78 3—1層	縄文土器 深鉢		△4.6	内外面：ナデ	密 良好		内外面：橙色	
118	19	S12 床面下	縄文土器 深鉢		△5.0	内外面：ナデ	密 良好		外面：鈍い橙色～鈍い褐色 内面：鈍い黄褐色～褐灰色	胎土にモミ?含む
119	19	P78 3—1層	縄文土器 深鉢		△2.4	内外面：条痕	密 良好		内外面：橙色	
120	19	S12裏面 1—2層	縄文土器 深鉢		△2.2	外面：不明 内面：条痕	密 良好		外面：鈍い褐色 内面：鈍い黄褐色～灰黄褐色	

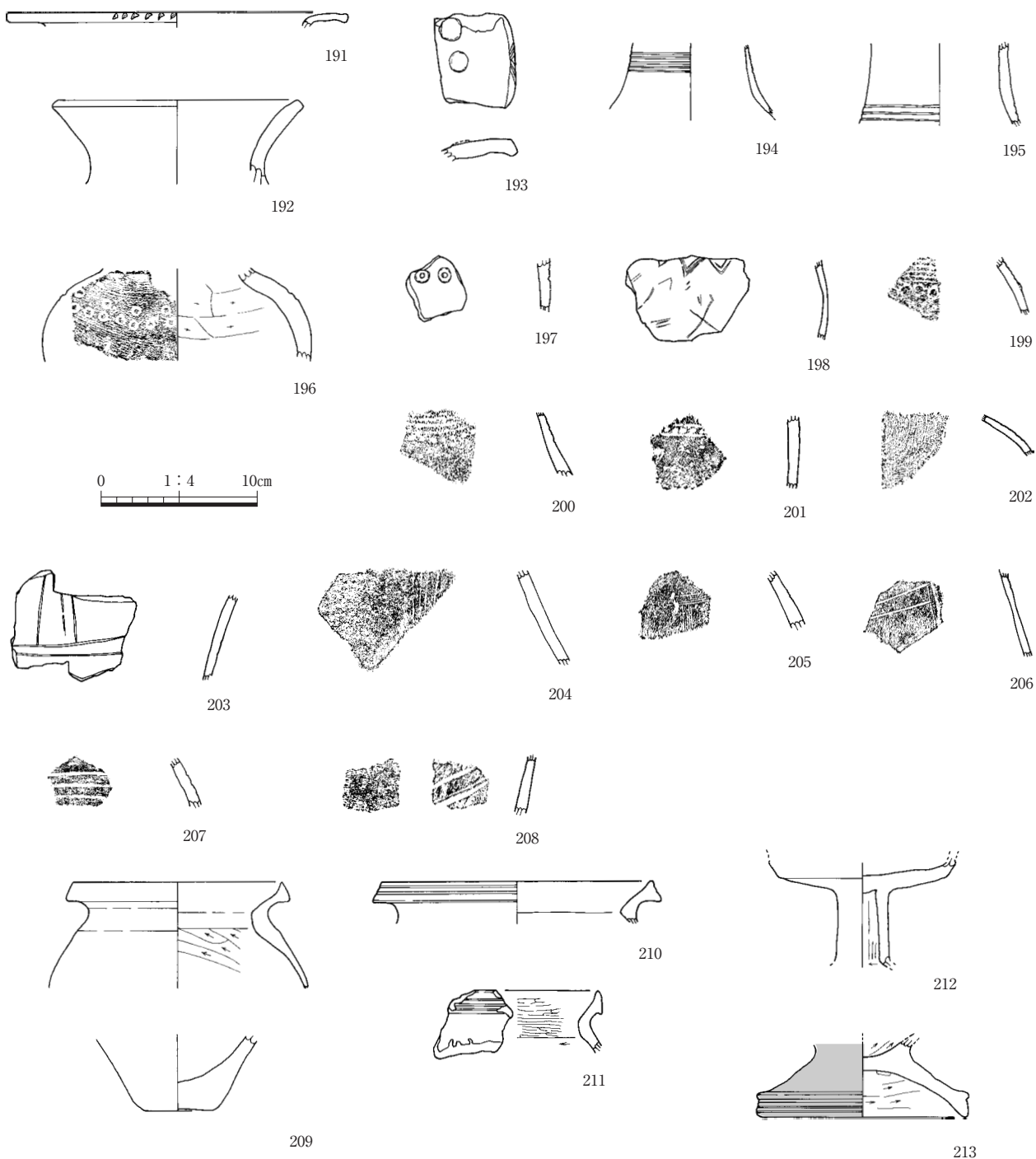
第19~20図 遺物観察表

*復元値 △現存値

遺物番号	挿回番号	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎焼	土成	色調	備考
121	19	P 78 3—1層	縄文土器 深鉢		△ 2.8	内外面：ナデ	密 良好		内外面：浅黄色	
122	19	S 1 1 2層	縄文土器 深鉢		△ 2.3	内外面：ナデ	密 良好		外面：鈍い黄褐色 内面：灰黄褐色	
123	19	O 77 3層	縄文土器 深鉢		△ 8.4	外面：不明 内面：条痕	密 良好		外面：橙色 内面：灰黄褐色	
124	19	O 79 3層	縄文土器 深鉢		△ 6.1	内外面：ナデ	密 良好		内外面：鈍い橙色	
125	19	P 78 3—1層	縄文土器 深鉢		△ 5.1	内外面：ナデ	密 良好		外面：鈍い黄色 内面：浅黄色	
126	19	O 78 2層	縄文土器 深鉢		△ 4.3	内外面：ナデ	密 良好		内外面：橙褐色	
127	19	N 77 3層	縄文土器 深鉢		△ 2.8	内外面：ナデ	密 良好		外面：明赤褐色 内面：明褐色	
128	19	O 77 3層	縄文土器 深鉢		△ 3.3	内外面：不明	密 良好		内外面：黄褐色	
129	19	O 78 2層	縄文土器 深鉢		△ 3.2	内外面：ナデ	やや密 やや良好		内外面：鈍い橙色	
130	19	P 78 3—1層	縄文土器 深鉢		△ 6.0	内外面：ナデ	密 良好		外面：鈍い黄褐色～褐灰色 内面：鈍い橙色～灰黄褐色	
131	19	R 80 2層	縄文土器 深鉢		△ 3.7	内外面：ナデ	密 良好		内外面：橙色	
132	19	R 80 3層	縄文土器 深鉢		△ 3.7	内外面：ナデ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	
133	19		縄文土器 深鉢		△ 4.0	内外面：不明	やや密 やや良好		外面：鈍い黄褐色 内面：鈍い黄褐色	
134	19	1 Tr 3層	縄文土器 深鉢		△ 4.0	内外面：ナデ	密 良好		内外面：鈍い橙色	
135	19	N 77 3層	縄文土器 深鉢		△ 2.7	内外面：ナデ	密 良好		外面：黒褐色 内面：橙色	
136	19	S 82 2層	土製品	長さ：4.3 幅：4.3 厚さ：2.2		手捏ね	密 良好		外面：黒褐色～褐色 内面：黒褐色	古墳時代のものの可能性有
137	20	P 78 3—1層	縄文土器 深鉢	*36.2	△ 8.4	内外面：ナデ	やや密 やや良好		外面：橙色 内面：橙色～褐灰色	
138	20	N 77 3層	縄文土器 深鉢	*21.2	△12.5	内外面：ナデ	密 良好		内外面：鈍い橙色	
139	20	S 1 2 3層	縄文土器 深鉢	*20.8	△ 4.3	外面：ナデ 内面：条痕	密 良好		外面：鈍い褐色 内面：鈍い橙色～灰色	
140	20	O 77 3層	縄文土器 深鉢		△ 5.0	外面：不明 内面：条痕後ナデ	密 良好		外面：鈍い黄褐色 内面：鈍い黄褐色～褐灰色	
141	20	P 78 3—1層	縄文土器 深鉢		△ 7.5	外面：条痕後ナデ 内面：条痕	密 良好		内外面：鈍い橙色	
142	20	S 81 3層	縄文土器 深鉢		△10.0	内外面：ナデ	密 良好		内外面：鈍い橙色	
143	20	O 79 3—1層	縄文土器 深鉢		△ 6.2	内外面：条痕	密 良好		外面：鈍い黄褐色～褐灰色 内面：鈍い黄褐色	
144	20	P 78 3—1層	縄文土器 深鉢		△ 5.5	内外面：条痕	密 良好		内外面：灰褐色	
145	20	1 Tr 3層	縄文土器 深鉢		△ 4.4	内外面：ナデ	密 良好		内外面：鈍い褐色	
146	20	S 1 2 3層	縄文土器 深鉢		△ 3.9	外面：ナデ 内面：条痕	密 良好		内外面：橙色	
147	20	P 78 3—1層	縄文土器 深鉢		△ 3.9	外面：条痕後ナデ 内面：ナデ	密 良好		外面：灰褐色 内面：橙色	
148	20	N 77 2層	縄文土器 深鉢		△ 3.2	外面：条痕後ナデ 内面：条痕	密 軟質		内外面：褐色	
149	20	S 1 1 1層	縄文土器 深鉢		△ 2.7	内外面：ナデ	密 良好		外面：橙色～鈍い褐色 内面：橙色	
150	20	N 77 3層	縄文土器 深鉢		△ 2.5	内外面：条痕	密 良好		外面：黒褐色 内面：橙色	
151	20	P 79 3層	縄文土器 深鉢		△ 4.6	内外面：条痕	密 良好		内外面：鈍い黄褐色～褐灰色	
152	20	S 1 2 3層	縄文土器 深鉢		△ 3.3	外面：ナデ 内面：条痕	密 良好		外面：橙色 内面：灰黄褐色	
153	20	R 80 3層	縄文土器 深鉢		△ 3.6	外面：不明 内面：条痕	密 良好		内外面：鈍い橙色～灰褐色	
154	20	N 76 3層	縄文土器 深鉢		△ 5.3	内外面：ナデ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色～灰褐色	
155	20	O 77 3層	縄文土器 深鉢		△ 5.1	内外面：ナデ	密 良好		外面：鈍い黄褐色～褐灰色 内面：鈍い黄褐色	
156	20	N 77 2層	縄文土器 浅鉢		14	5.5	内外面：ミガキのような細かなナデ	密 良好	外面：黒褐色 内面：明褐色	
157	20	R 80 2層	縄文土器 浅鉢	*10.3	5.9	内外面：条痕	密 良好		内外面：鈍い黄褐色～褐灰色	
158	20	S 82 3層	縄文土器 浅鉢	*12.5	△ 5.5	外面：不明 内面：ナデ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	
159	20	O 78 3—1層	縄文土器 浅鉢	*14.0 * 4.0	△ 4.7	外面：手捏ね後強いナデ 内面：ナデ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色～褐灰色	
160	20	O 79 2層	縄文土器 浅鉢	*12.9	△ 4.1	内外面：手捏ね	密 良好		内外面：浅黄褐色	
161	20	P 79 3層	縄文土器 浅鉢	*10.3	△ 3.0	内外面：手捏ね	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	



第21図 弥生土器（1）



第22図 弥生土器(2)

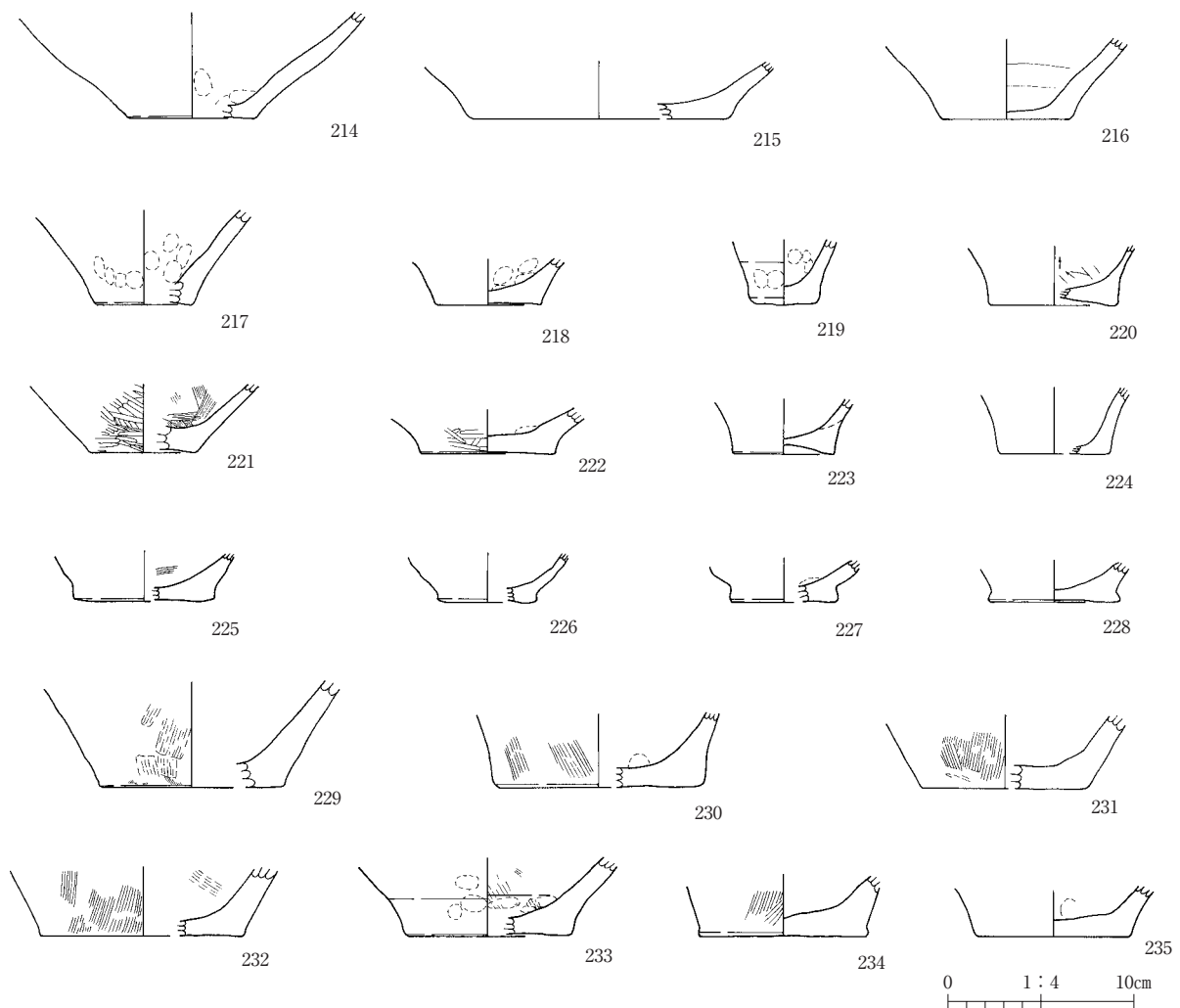
弥生土器（第21～23図、図版26、27）

前期の土器を中心に、中期と後期の土器が若干出土している。

第21図は前期の土器。162から169は壺の口縁部および頸部の破片。段をもち、丁寧なミガキを施すものが多い。170から181は木葉文や弧状文をもつ破片で、壺の肩部と考えられる。182から190は甕の口縁部で、内外面はハケメで調整し、口縁端部に刻目を入れ、頸部には段や数条の沈線を施す。多くはI-3期に属するが、166や186はI-2期のものの可能性がある。

第22図は中期から後期の土器。191から193は壺の口縁部。194と195は平行沈線をもつ破片で壺の頸部か器台であろうか。196から208は装飾のある破片。竹管文（196・197）、円形浮文（199）、列点文（200・201）などがあり、多くは壺の破片であろう。209から211は甕で、210と211は擬凹線を施す。213は脚部の破片で、台付壺であろうか。

底部の破片は195個体分が出土した。第23図に代表的なものを図示する。215のような底径の大きなものは少ない。形態的には平底がほとんどで、上げ底（220・223）や円盤状（226～228）のものが含まれる。ミガキを施すもの（221・222）は壺に、ハケメを施すもの（229～234）は甕に対応するであろう。弥生土器口縁部の量に対して多すぎるので、突帯文土器の底部が含まれている可能性がある。



第23図 弥生土器（3）

第21～22図 遺物観察表

*復元値 △現存値

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎焼	土成	色調	備考
162	21	P 78 3層	弥生土器 壺	*16.0	△4.1	内外面：ミガキ	密 良好		内外面：橙色	
163	21	Q 80 3層	弥生土器 壺	*14.7	△3.3	内外面：ミガキ	密 良好		外面：明橙色～黒褐色 内面：明橙色	
164	21	O 77 3層	弥生土器 壺	*15.8	△3.0	内外面：ミガキ	密 良好		外面：鈍い褐色 内面：鈍い赤褐色	
165	21	Q 78 3層	弥生土器 壺	*15.2	△4.8	内外面：不明	密 良好		内外面：褐色～橙色	
166	21	R 80 3層	弥生土器 壺頸部		△4.8	外面：ミガキ 内面：上部ミガキ、下部ナデ	密 良好		内外面：橙色	
167	21	S 81 3層	弥生土器 壺	* 8.6	△2.1	外面：ナデ 内面：ミガキ	密 良好		内外面：橙色	
168	21	N 77 3層	弥生土器 壺		△5.8	内外面：ナデ	密 良好		内外面：橙色	
169	21	N 77 3層	弥生土器 壺		△4.4	外面：ナデ 内面：不明	密 良好		内外面：明橙色	
170	21	O 80 2層	弥生土器 壺		△3.7	外面：木葉文 内面：不明	密 良好		内外面：鈍い黄褐色～鈍い黄褐色	
171	21	R 80 3層	弥生土器 壺		△2.5	外面：木葉文 内面：不明	密 良好		外面：鈍い黄褐色～褐色 内面：黒褐色	
172	21	O 80 2層	弥生土器 壺		△2.5	外面：木葉文 内面：不明	密 良好		内外面：浅黄褐色	
173	21	Q 79 3層	弥生土器 壺		△2.4	外面：木葉文？ 内面：ナデ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色～灰黄褐色	
174	21	P 78 3—1層	弥生土器 壺		△3.6	外面：木葉文？ 内面：ナデ	密 良好		外面：橙色 内面：鈍い黄褐色	
175	21	東側Tr	弥生土器 壺		△4.0	外面：ミガキ、木葉文？ 内面：ナデ	密 良好		内外面：橙色	
176	21	O 77 G 3層	弥生土器 壺		△2.2	外面：木葉文？ 内面：不明	密 良好		内外面：橙色	
177	21	O 80 1層	弥生土器 壺		△2.7	外面：木葉文？ 内面：ナデ	密 良好		内外面：橙色	
178	21	N 76 3層	弥生土器 壺		△2.1	外面：木葉文？ 内面：不明	密 良好		内外面：黒褐色	
179	21	R 80 3層	弥生土器 壺		△1.7	外面：木葉文？ 内面：不明	密 良好		内外面：橙色	
180	21	O 77 3層	弥生土器 壺		△1.7	外面：木葉文？ 内面：不明	密 良好		外面：鈍い黄褐色～褐色 内面：橙色	
181	21	N 76 3層	弥生土器 壺		△2.7	外面：木葉文？ 内面：不明	密 良好		内外面：黒褐色	
182	21	R 80 3—2層	弥生土器 甕	*27.8	△7.9	外面：口縁端部刻目、4条の沈線、ナデ 内面：ヨコナデ	密 良好		外面：鈍い褐色 内面：明褐色	
183	21	S 11 埋土上層	弥生土器 甕		△4.4	外面：口縁端部刻目、3条の沈線、ハケメ 内面：ヨコナデ	密 良好		内外面：黄褐色	
184	21	O 80 3層	弥生土器 甕		△3.8	外面：口縁端部刻目、3条以上の沈線 内面：不明	密 やや軟質		内外面：橙色	
185	21	O 77 3層	弥生土器 甕		△1.9	外面：2条以上の沈線 内面：ヨコナデ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色～灰黄褐色	
186	21	O 77 3層	弥生土器 甕		△7.0	外面：口縁端部刻目、1条の沈線 内面：口縁部ヨコナデ、ハケメ	密 良好		内外面：明褐色	
187	21	O 80 3層	弥生土器 甕		△2.3	外面：口縁端部刻目、ナデ 内面：ハケメ	密 良好		内外面：鈍い褐色	
188	21	R 79 3—2層	弥生土器 甕		△3.5	外面：口縁端部刻目、ハケメ 内面：ヨコナデ	密 良好		内外面：鈍い褐色	
189	21	O 79 3層	弥生土器 甕		△2.2	外面：口縁端部刻目、ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密 良好		内外面：鈍い褐色	
190	21	R 80 3層	弥生土器 甕		△3.3	外面：ハケメ後ナデ 内面：ヨコナデ	密 良好		内外面：淡褐色	
191	22	S 81 3層	弥生土器 壺	*22.0	△0.9	外面：口縁端部刻目、ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密 良好		内外面：灰褐色	
192	22	O 78 3層	弥生土器 壺	*16.2	△5.3	内外面：ヨコナデ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	
193	22	O 77 2層	弥生土器 壺		△1.1	外面：ハケメ、口縁端部に鋸歯文 内面：ハケメ後ナデ、円形浮文	密 良好		内外面：鈍い褐色	
194	22	S 82	弥生土器 壺？		△4.8	外面：ナデ、平行沈線 内面：ナデ	密 良好		内外面：褐色	
195	22	R 80 3層	弥生土器 壺？		△5.1	外面：ミガキ、平行沈線 内面：不明	密 良好		外面：鈍い黄褐色 内面：鈍い黄褐色～褐灰色	
196	22	Q 79 2層	弥生土器 壺		△5.9	外面：竹管文、ハケメ 内面：ケズリ	密 良好		外面：明褐色 一部黒斑 内面：明褐色	
197	22	S 11 埋土下層	弥生土器 不明		△3.5	外面：竹管文、ナデ 内面：ケズリ	密 良好		外面：暗褐色 内面：褐色	
198	22	S 11 1層	弥生土器 不明		△5.0	外面：鋸歯文 内面：ケズリ	密 良好		内外面：淡褐色	
199	22	R 81 2層	弥生土器 不明		△3.5	外面：円形浮文、平行沈線 内面：不明	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	
200	22	N 77 2層	弥生土器 不明		△4.0	外面：列点文、平行沈線 内面：ナデ	密 良好		外面：褐色 内面：明褐色	
201	22	O 80 2層	弥生土器 不明		△4.5	外面：沈線の間に列点文 内面：不明	密 良好		内外面：鈍い褐色	

第22～23図 遺物観察表

*復元値 △現存値

遺物 番号	挿回 番号	遺構 層位	種別 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎 焼	土 成	色調	備考
202	22	R81 3層	弥生土器 不明		△2.3	外面：5条の沈線 内面：ナデ	密 良好		内外面：橙色	木葉文？
203	22	S81・Q80 3層・1層	弥生土器 不明		△5.4	外面：T形の平行沈線 内面：ナデ	密 良好		内外面：明橙色	
204	22	S11 埋土下層	弥生土器 不明		△6.0	外面：4条の平行沈線 内面：ナデ	密 良好		内外面：橙色～鈍い黄橙色	
205	22	P78 2層	弥生土器 不明		△3.3	外面：T形の平行沈線 内面：縦方向ハケメ後ナデ	密 良好		内外面：鈍い黄橙色	
206	22	O77 1層	弥生土器 不明		△5.3	外面：ミガキ、2条の沈線 内面：ナデ	密 良好		内外面：橙色	
207	22	N77 3層	弥生土器 不明		△3.0	外面：3条の沈線 内面：不明	密 良好		内外面：鈍い黄橙色	
208	22	N78 3層	弥生土器 不明		△3.5	外面：2条の沈線 内面：不明	密 良好		外面：灰褐色 内面：橙色～明褐色	
209	22	S81	弥生土器 甕	13.2 4.3	△6.7 △4.8	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ 頸部以下ケズリ 底部ナデ	密 良好		外面：鈍い橙色 内面：浅黄褐色	
210	22	S81 2層	弥生土器 甕	*17.3	△2.7	外面：ヨコナデ、口縁部擬凹線 内面：ナデ、頸部以下ケズリ	密 良好		内外面：鈍い橙色～鈍い褐色	
211	22	S81 2層	弥生土器 甕		△4.0	外面：ヨコナデ、口縁部擬凹線 内面：ミガキ、頸部以下ケズリ	密 良好		外面：鈍い橙色～鈍い黄褐色 内面：鈍い橙色	
212	22	R80 2層	弥生土器 高杯		△6.8	内外面：不明 脚内：ケズリ	密 やや軟質		内外面：橙色	
213	22	O80 2層	弥生土器 脚付壺？	*13.0	△4.8	外面：ナデ、端部擬凹線、赤色塗彩 内面：ケズリ後ナデ	密 良好		外面：明褐色～灰黄褐色 内面：灰黄褐色	
214	23	S D1 2層	弥生土器 底部	*6.8	△6.7	内外面：ナデ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	外面：黒斑
215	23	Q79・Q78 2層・埋土	弥生土器 底部	*13.6	△3.1	外面：ヨコナデ 内面：不明	密 良好		外面：鈍い黄褐色 内面：鈍い黄褐色～灰黄褐色	
216	23	P78・Q79・Q80 3層・3層・2層	弥生土器 底部	7	△4.0	外面：ナデ 内面：ケズリ後ナデ	密 良好		外面：鈍い橙色 内面：黒色～鈍い褐色	
217	23	O80 2層	弥生土器 底部	*5.2	△5.1	内外面：ナデ	密 良好		内外面：灰赤色	
218	23	Q79 3層	弥生土器 壺	*5.8	△2.5	外面：ミガキ 内面：不明	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	
219	23	N77 3層	弥生土器 底部	3.6	△3.5	外面：ナデ 内面：不明	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	
220	23	R79・Q79 3層	弥生土器 底部	7	△3.2	外面：ナデ 内面：不明	密 良好		外面：鈍い黄褐色～黒色 内面：鈍い黄褐色	
221	23	P77 2層	弥生土器 壺	*5.8	△3.7	外面：ミガキ 内面：ナデ	密 良好		内外面：灰黄褐色	
222	23	S80 2層	弥生土器 壺	*7.2	△2.4	外面：ミガキ 内面：不明 底部ミガキ	密 良好		外面：鈍い黄褐色	外面：黒斑 内面：褐灰色
223	23	O80 2層	弥生土器 底部	*5.6	△3.0	内外面：ナデ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	
224	23	Q80・Q79G 2層・3—1層	弥生土器 底部	*5.9	△3.5	内外面：ナデ	密 良好		外面：鈍い黄褐色～鈍い黄褐色 内面：灰黄褐色	
225	23	R80 3層	弥生土器 底部	*7.7	△2.6	内外面：ナデ	密 良好		外面：鈍い黄褐色～灰黄褐色 内面：鈍い黄褐色	
226	23	S12兼西ベルト 1—2層	弥生土器 底部	5.2	△2.7	内外面：ナデ	密 良好		外面：鈍い黄褐色～褐灰色 内面：褐灰色	
227	23	O77 3層	弥生土器 底部	*5.8	△2.3	外面：ナデ 内面：ナデ 指頭圧痕	密 良好		外面：鈍い黄褐色～褐灰色 内面：鈍い黄褐色	
228	23	Q79 3層	弥生土器 底部	*7.2	△2.3	内外面：ナデ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	
229	23	O77 3層	弥生土器 甕	*10.0	△5.7	外面：ハケメ後ナデ 内面：ナデ	密 良好		内外面：鈍い褐色	
230	23	2 Tr・P78 3—1層	弥生土器 甕	11.3	△4.0	外面：ハケメ 内面：ナデ	密 良好		内外面：橙色	
231	23	N76 3層	弥生土器 甕	*8.8	△3.9	外面：ハケメ 内面：ナデ	密 良好		外面：橙色～灰褐色 内面：褐色	
232	23	S80 3層	弥生土器 甕	*11.0	△3.5	外面：ハケメ 内面：ナデ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色～灰褐色	
233	23	P78 3層	弥生土器 甕	*9.0	△4.2	外面：ナデ 内面：ハケメ	密 良好		外面：褐色 内面：鈍い黄褐色	
234	23	R81 3層	弥生土器 甕	*8.9	△3.2	外面：ハケメ 内面：ケズリ後ナデ	密 良好		外面：鈍い黄褐色 内面：鈍い黄褐色～灰黄褐色	
235	23	O77 2層・3層	弥生土器 底部	8.2	△2.5	内外面：ナデ	密 良好		内外面：褐色	

第3節 古墳時代以降の調査

1. 概要

坂長第8遺跡上層からは、古墳時代中期を中心とした遺構と、多くの遺物が出土した。調査区全体の遺構密度は高くないが、遺構は調査区中央東端のごく狭い範囲に集中するので、調査区の東側にあると思われる遺跡本体には、多くの遺構が存在していると推定される。調査した3棟の竪穴住居跡はいずれも保存状態がよく、特に竪穴住居S I 1は、住居の構造を細部まで理解できる例であった。また、S I 3からS I 1への建て替えの様子も詳細に分かった。住居跡だけでなく遺構外からも、古墳時代中期を中心とする多くの遺物が出土している。その多くは2層中に包含され、少量が3—1層上部から出土する。したがって、3—1層上部に生活面が位置すると考えられる。

古墳時代の遺構と遺物のほかには、中世の土器と近世の溝跡が見つかっている。

出土遺物は、土師器・須恵器・土製品・石器・ガラス玉などである。古墳時代の鉄製品は出土しなかった。土器は土師器が大半で須恵器はごく少量のみであった。中でも、S I 1とS I 2から出土した大量の土師器は、この地域での土師器編年の空白を埋める良好な資料である。

2. 竪穴住居跡

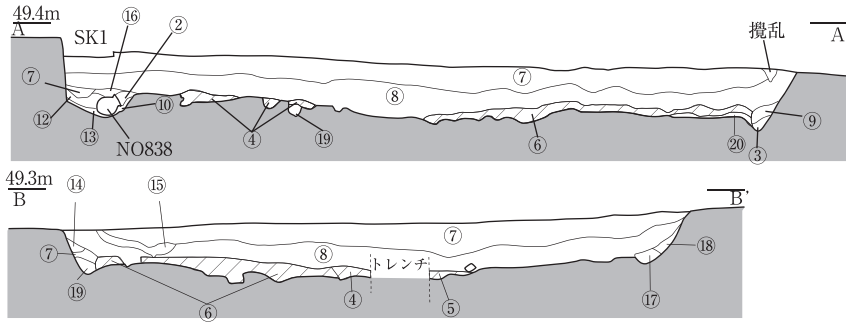
S I 1（第24図、図版3～9）

O78グリッドとP78グリッドを中心に位置し、住居跡北東角が調査区外にある。検出面での標高は49.0m、床面の標高は48.5mを測る。調査区の周囲にトレンチを入れた段階で遺構の存在が確認できたので、サブトレンチを3本設定しながら、黒色土（3層）中での検出を試みた。後述する白色粘土の存在により、おおよその輪郭をつかむことができ、住居が本来掘り込まれた面に近い層準で検出できた。住居跡は長辺7.4m、短辺6.1mの長方形を呈し、長軸は南北方向から約60度東にふれている。床面は、東側のおよそ3分の1が地山のソフトローム層を利用し、残りの部分はソフトローム7割と黒色土3割を混ぜて固めた貼床とする。壁際には、幅15～20cm深さ10cmの周壁溝が廻る。周壁溝は南辺中央で60cmほど途切れていて、このすぐ内側には火処と推定されるS K 2があるので、周壁溝の途切れはこれと関係があると思われる。床面の南西隅1.2×0.5mの範囲には、貼床が約20cmの高さに盛り上げられたベッド状遺構がある。

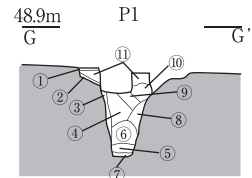
主柱穴はP 1の1つだけである（図版8）。P 1は床面中央に位置し、二段掘りになっている。上部は120×65cmの楕円形で深さ13cm、下部は60×70cm、底径20cmの円形で深さ80cmを測る。柱根は確認できなかったが、埋土や貼床の状況から直径20～30cm程度の柱が立てられていたものと考えられる。周壁溝のすぐ内側には、複数のピットが0.8m～2.0mの間隔をおいて配置されている。いずれのピットも床面からの深さが約20cmと浅く、対称的に配置されているわけではないので、屋根ではなく壁を支えるための副え柱に関係する可能性が高い。したがって、本住居は中央に1本の柱をもつほぼ壁立ちの住居と推定される。南辺でピットの配列が不規則なのは、火処やベッド状遺構の存在に関係があるであろう。なお、北東隅のP 15やP 16は、この部分に床面より20cmほど高い硬化面があり、より新しい別の住居跡（S I 4）の一部が重複しているようなので、それに属するものかもしれない。

東辺の中央北寄りには、S K 1がある。径63×46cm深さ35cmを測る土坑の底に、完形の甕236が口を住居内側に向けて横たえられ、ローム塊を多く含んだ貼床に近い構成の土で埋め込まれていた（巻

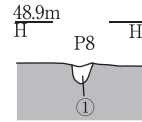
第3節 古墳時代以降の調査



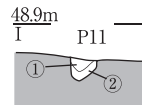
- ① 黒褐色土7.5YR2/2炭粒・ローム粒わずかに含む
- ② 暗褐色土7.5YR3/3ローム粒(大)炭粒(大)多く含む
- ③ 黒色土7.5YR2/1やや粘質
- ④ 橙色ローム：黒色土7.5YR2/1ややローム粒少ない
- ⑤ 貼床 ローム(7)：漸移層(3)
- ⑥ 貼床 橙色ローム(8)：黒色土7.5YR2/1(2)で混
- ⑦ 黒褐色土7.5YR2/2
- ⑧ 黒褐色土7.5YR2/2土器・炭粒多く含む
- ⑨ 黒褐色土7.5YR2/2橙粒(貼床片)混
- ⑩ 暗褐色土7.5YR3/3やや粘質ローム粒(大)炭粒(大)多く含む
- ⑪ 暗褐色土7.5YR3/3やや粘質
- ⑫ 暗褐色土7.5YR3/3やや粘質ローム粒小粒含む
- ⑬ ローム7.5YR3/3橙色
- ⑭ 黒褐色土7.5YR3/1
- ⑮ 暗褐色土7.5YR2/2(3)：淡黄色粘土5Y8/4(7)混
- ⑯ 黒褐色土7.5YR2/2ローム塊混
- ⑰ 黒褐色土7.5YR3/1
- ⑱ 黒褐色土7.5YR2/2貼床粒混
- ⑲ 黒褐色粘質土7.5YR2/2ローム片混
- ⑳ 黒色土7.5YR2/1やや粘質橙粒わずかに混



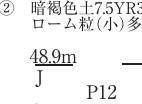
- ① 暗褐色土7.5YR3/3炭粒混
- ② 黒褐色土7.5YR2/2
- ③ 黒色土7.5YR2/1やや粘質
- ④ 黒色粘質土7.5YR2/1
- ⑤ 黒色粘質土7.5YR2/1ローム塊多混
- ⑥ 黒色粘質土7.5YR2/1ローム粒少混
- ⑦ 暗褐色粘質土7.5YR3/3炭(大)多混
- ⑧ 黒色粘質土7.5YR2/1ローム塊少混
- ⑨ 黒褐色土7.5YR3/1ローム粒少混
- ⑩ 暗褐色土7.5YR3/1やや粘質
- ⑪ 暗褐色土7.5YR3/4ローム塊混固くしめる(貼床)



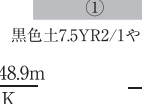
- ① 黒色土7.5YR2/1やや粘質



- ① 暗褐色土7.5YR3/3炭・ローム粒(小)混
- ② 暗褐色土7.5YR3/3ローム粒(小)多混



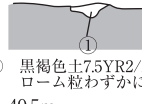
- ① 黒色土7.5YR2/1やや粘質



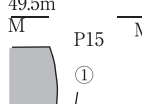
- ① 暗褐色土7.5YR3/3



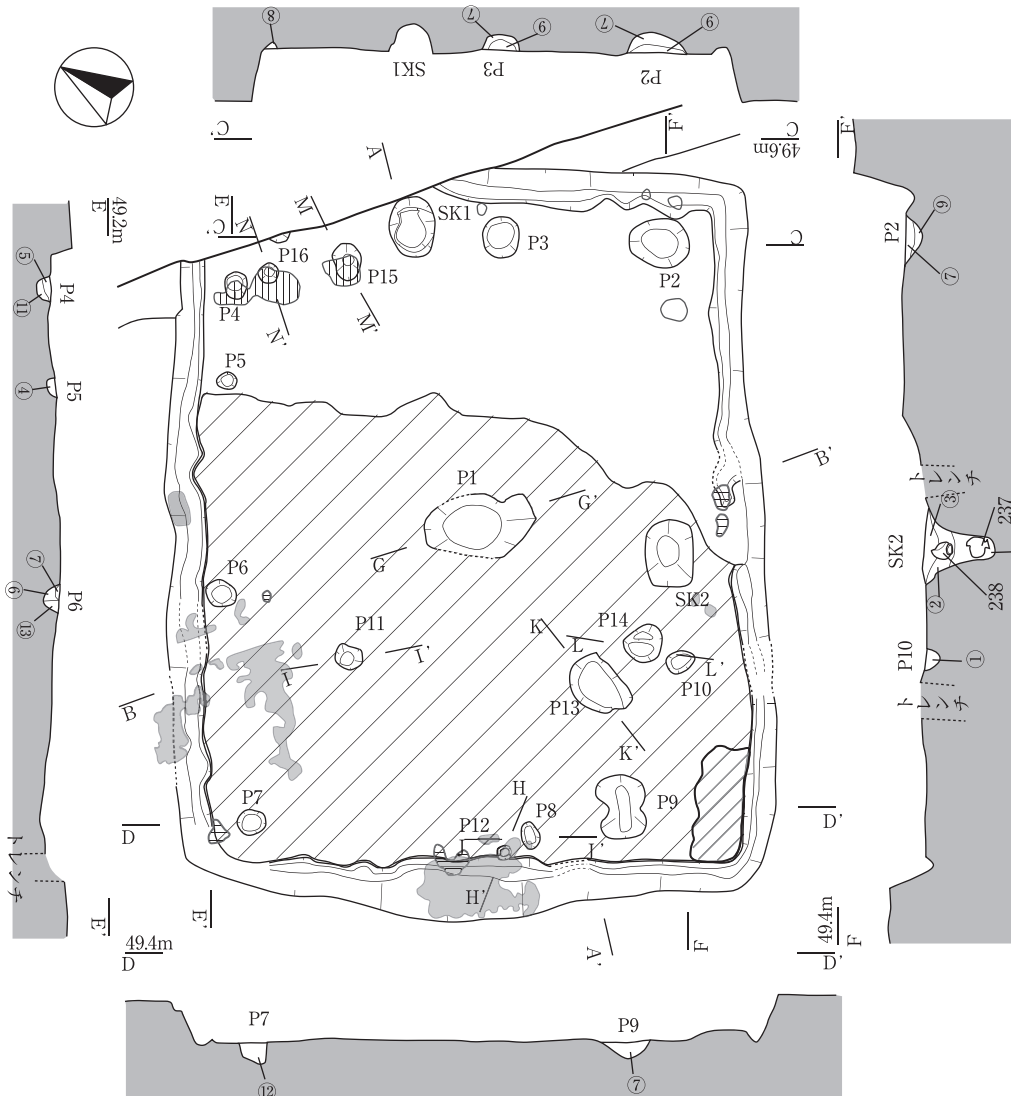
- ① 黒褐色土7.5YR2/2炭粒・ローム粒わずかに混



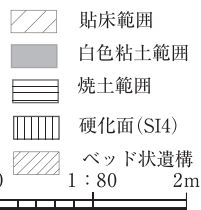
- ① 暗褐色土7.5YR3/3ローム粒(小)含む
- ② 黒褐色土7.5YR3/2ローム粒(小)混
- ③ 黒褐色土7.5YR3/2やや粘質



- ① 黒色土7.5YR2/1やや粘質



- ① 黒褐色土7.5YR2/1
- ② 暗褐色土7.5YR3/3ローム粒多混
- ③ 黒褐色土7.5YR2/2炭粒・ローム粒わずかに含む
- ④ 暗褐色土7.5YR3/3
- ⑤ 黒褐色土7.5YR3/2貼床粒大多
- ⑥ 黒褐色土7.5YR3/2ローム粒多混
- ⑦ 黒褐色土7.5YR2/2
- ⑧ 暗褐色土7.5YR3/3ローム粒(小)含む
- ⑨ 黒褐色土7.5YR2/2ローム粒多
- ⑩ 黒褐色土7.5YR2/2ローム塊混
- ⑪ 黒褐色土7.5YR2/2貼床粒少
- ⑫ 黒褐色土7.5YR2/2貼床粒混
- ⑬ 黒褐色土7.5YR2/2ローム粒少混



第24図 S I 1

第1表 S I 1内の遺構

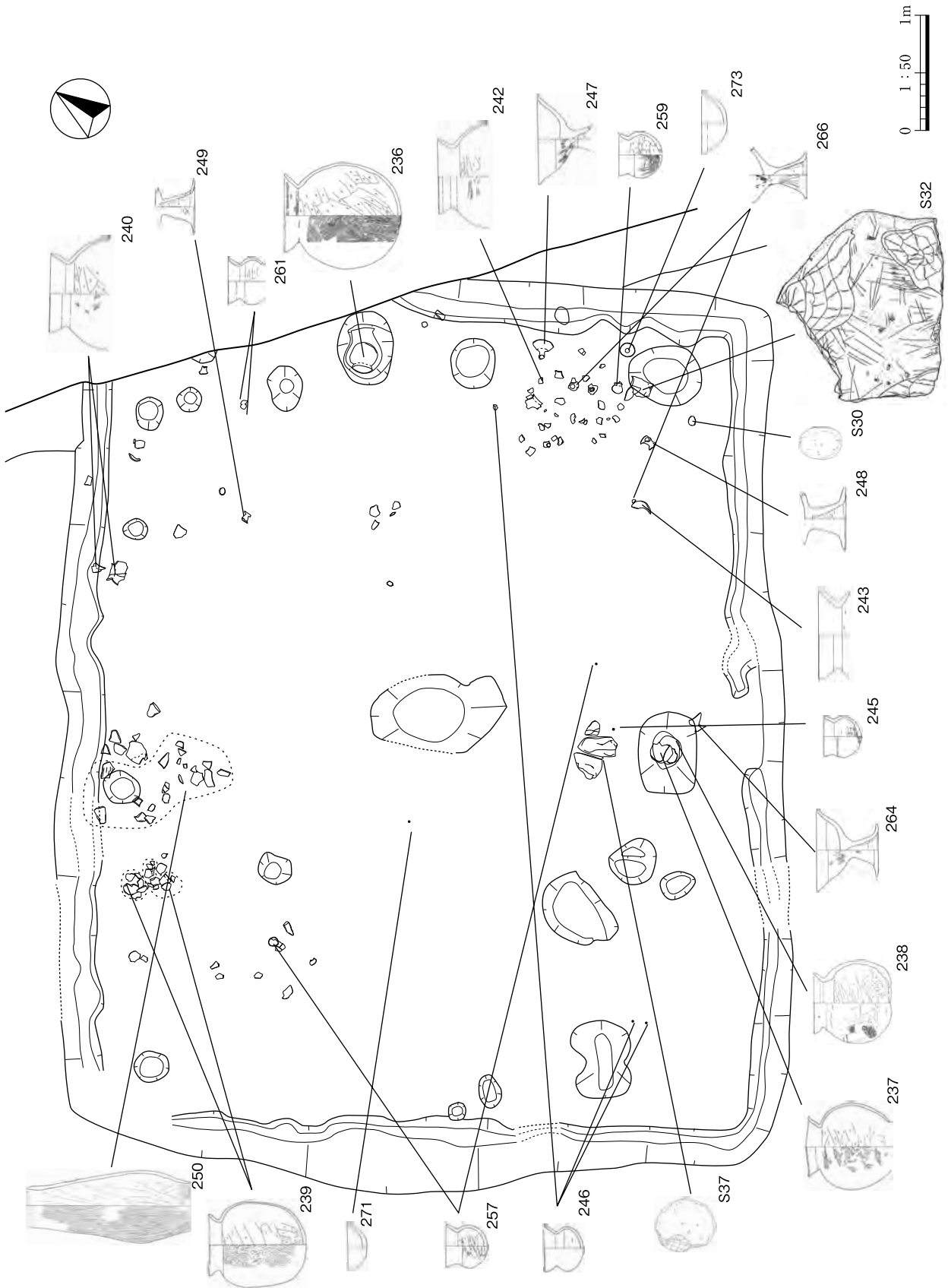
	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
P 1	120×65	93	主柱穴
P 2	63×52	15	
P 3	37×37	15	
P 4	30×22	12	
P 5	17×17	8	
P 6	31×26	17	
P 7	30×27	23	
P 8	29×18	20	
P 9	70×38	13	
P 10	25×25	15	
P 11	30×25	22	S I 3—P 3
P 12	15×15	10	
P 13	65×49	7	
P 14	40×40	13	
P 15	38×28	27	S I 4 ?
P 16	20×20	16	S I 4 ?
S K 1	63×46	35	埋甕
S K 2	72×50	71	火処

る。底面には、甕237が口を下に向けて置かれていた。底部が平らで器壁が厚く、焼成が悪い粗雑なつくりの甕で、煮炊きには不向きと思われる。また、内部に土砂は流入しておらず空洞であった。以上から、防湿などの目的で特別に作られて意図的に埋められたものと思われる。甕237を埋め込んだ土までの深さは約30cmで、これが使用時の土坑の深さであろう。S K 2の埋土には大きめの炭粒が多く含まれ、壁との間には焼土面がある。また、S K 2の北辺には石が並べられ、一部は受熱しているので、火処であると判断される。埋土の上部からは甕238が、石列との間からは壺245が出土した。これらの土器は本住居で使用されたものと判断して差し支えないであろう。

住居の北西部分を中心に、白色粘土が分布する(図版5)。この粘土は調査地内には存在しないもので、人為的に搬入されたことが明らかである。坂長第7遺跡では、ほぼ同質の白色粘土層が確認されているので、第8遺跡北方を東西に走る大きな谷のどこかで採取された可能性が高い。住居の北辺と西辺に2箇所の顕著な塊があり、北辺では1.5m四方の範囲に厚さ10cmの粘土層が、あたかも検出面から床面に倒れこむように堆積している。この粘土層は、一部で床面と接し、甕239と甕形土器250が床面との間に挟まれている。なお、壁面側では、遺構検出面よりも15cmほど深い位置に粘土層は食い込んでいる。一方、西辺では1.5×0.8mの範囲に厚さ20cmの塊がある。こちらではほぼ水平に堆積し床面には接していないが、やはり壁側では遺構検出面から15cmほどの深さまで入っている。住居跡全体の埋土の堆積状況から考えて、遺構検出面よりも15cm下に本来の掘り込み開始面が位置するとは考えられないので、地面を掘り込んだ上で白色粘土が設置されていると思われる。検出状況からすると、壁の外側に塗られていたものであろう。その役割は不明であるが、住居の入り口に関係する可能性が考えられる。白色粘土塊に挟まれた住居西辺北側が地形的に最も低いため雨水が流入しにくいことや、住居壁面の高さが最も低いため床面との段差があまりないことから、入り口を設けるのに最適な場所と考えられる。地面を掘り込んで粘土の壁を設置したのは、入り口付近での雨水の染み込み防止を強化しようとしたのであろうか。ところで、この位置に入り口を想定すると、S K 1の埋甕を入

頭図版5、図版6—3)。この甕は上に向けられていた部分がわずかにひびを生じて歪んでいたもので、足で踏むなどの圧力を繰り返し受けていたと推定される。民俗例では、近年まで、住居の入り口に胎盤を埋めて出入りの度に踏み、子供が強く育つことを願ったことが知られている。本例も胞衣容器の可能性が高いと考え、甕内部の土についてリン・カルシウム分析を行ったが(第4章参照)、周囲の住居埋土と比較して顕著な差は認められなかった。

南辺中央の壁際には、S K 2が設けられている(図版7)。72×50cmの長方形の土坑で、深さは71cmを測



第25図 S I 1 遺物出土状況

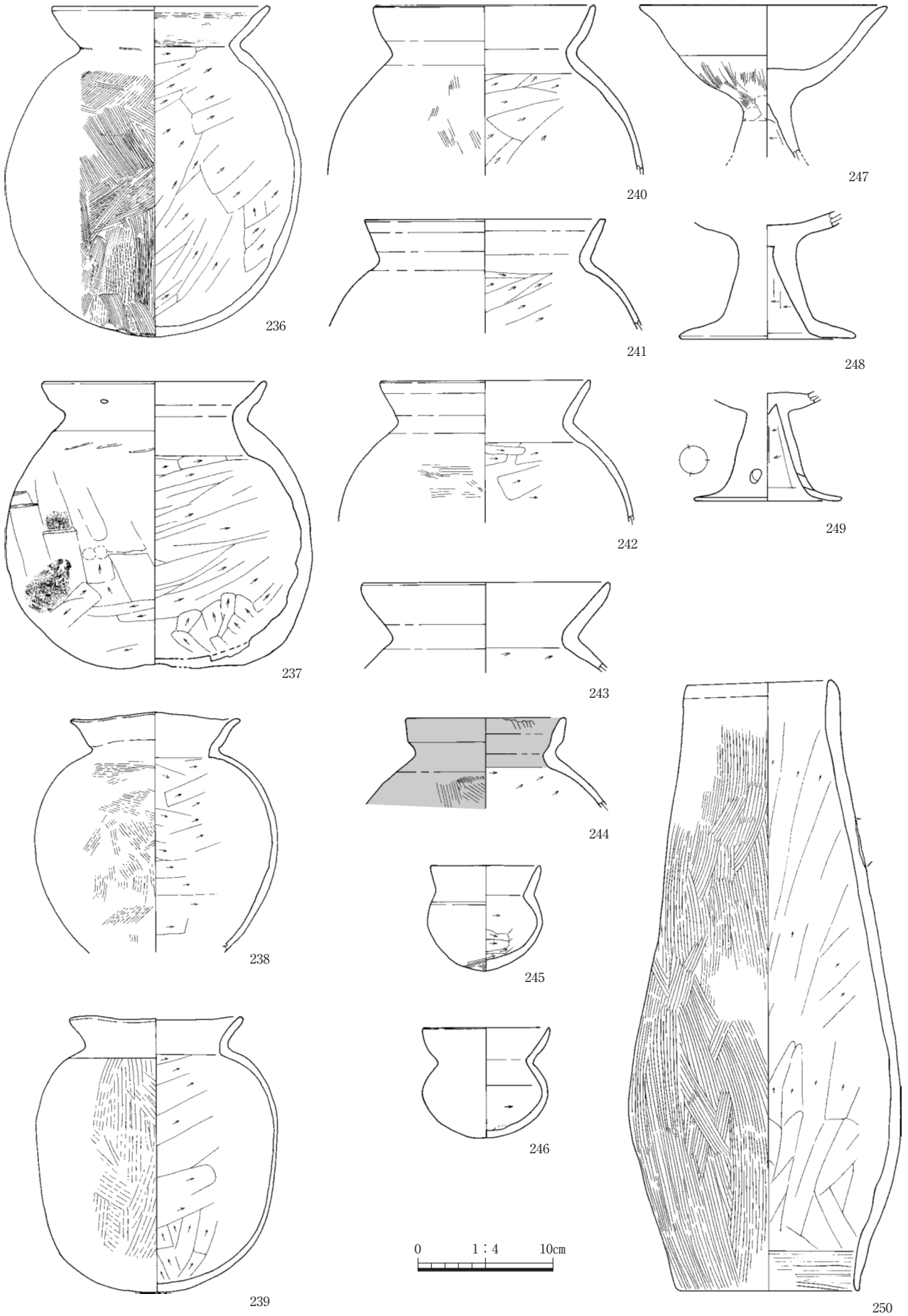
り口と関連付けることが難しくなるかもしれない。

おそらく床面を広く使うために、本住居跡では火処やベッド状遺構の周囲を除いて、ピットを設けることが極力避けられているようである。唯一の例外はP11で、小さな柱が立てられていたと考えられる。興味深いことに、貼床を除去すると、このP11は先行するS I 3の支柱穴の1つと共通することが分かった(図版9—3)。S I 3の柱を抜き取った後で全ての支柱穴をS I 1の貼床に類似した土で埋め、床が沈み込まないようにしつつ、そのうちの1つだけには新たに小柱を立てたものと考えられる。それは、あたかも前の住居を記念するかのようであり、住居の廃絶あるいは建て直しに関する、儀礼や習慣の存在が示唆される。あるいは、先行する堅穴の位置をおおよそ示しておくことで新しい住居での造作に支障が出ないようにしたのかもしれない。いずれにせよ、この例はS I 3からS I 1が直接建て直されたことの重要な証拠の一つになる。

S I 1からは大量の遺物が出土している(第26~31図、図版14~17)。これらのうちで、床面および住居内遺構から出土した土師器(第26図)は、この地域の土師器編年の空白部分を埋める一括資料として重要な意味をもつ。第25図に主な遺物の出土状況を示す。出土状況を厳密に検討すると、確実に本住居で使われたと考えられる土器は、236~239、245、250の6点である。他の土器には、遺構が埋没するごく初期の段階で混入した可能性が残っている。中でも、住居南東隅のグループ(図版8—1)に属するものは、まとめて廃棄されたものであろう。逆に、埋土出土の土器(第28・29図)の、埋土下層から出土したものには、本住居に属していた可能性がある。中でも、SK2の近くで床面からあまり離れていなかった高杯264は床面出土としてもよいかもしれない。

236から244は床面出土の甕である。口縁部は単純口縁のものが大半で、244のようにわずかに複合口縁の名残を示すものがある。調整は、内面は頸部までケズリ、外面はハケメを施すのが基本である。237は上述のとおり燃焼施設の防湿の目的で作られたと考えられる特殊な例である。外面にはハケメの代わりに、細長礫のような工具によるタタキと見られる痕跡や局所的な布目痕がある。また、内面のケズリが非常に粗いので器壁は厚く不均等である。土器作りの中間的な工程を示す貴重な例であろう。245と246は小型壺で、247から249は高杯である。ともに本遺跡ではかなりの個数が出土した。高杯で脚部に透かし穴をあけるものはほとんどない。250は甑形土器である。下膨れの細長い筒状を呈し、外面はハケメで内面はケズリで調整する。上部に一箇所、円形の剥落があるので、棒状か角状の把手が1つ付けられていた可能性はあるが、甑形土器に一般的に見られるような形態の把手や鏝はない。したがって複数を積み重ねて使用することは不可能であり、おそらく甑形土器としては最末期の形態のものであろう。火処の反対の住居北辺中央、床面の白色粘土下から出土した。完形品として遺棄されたのではなく、白色粘土に覆われる前には破碎されていたようである。火ハネや煤などは認められないので、使用法を推定することは困難であるが、すぐ近くで同様の状況で出土した甕239とセットで使われた可能性がある。これら床面出土の土器は5世紀第2四半期頃のものと考えられる。B1は濃青色のガラス玉で、北東部分の床面から出土した(第27図、巻頭図版1—3)。

251から285は埋土出土の土器である。甕(251~256)には複合口縁のものが含まれる他に、256のように6世紀代のものもある。小型壺(257~263)と高杯(264~269)には、263や265のように若干新しそうな形態のものが含まれるが、多くは床面の土器と同時期と考えられる。低脚杯(270)や杯(271~275)は、床面には良好な資料はない。274と275は6世紀代のものであろう。276と277は器形不明の破片である。大きく開く大型の土器口縁部で、外面はハケメで、内面はケズリかハケメで仕上



第26図 S I 1 床面出土土器

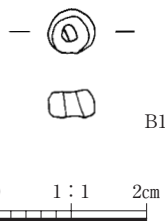
第26図 遺物観察表

*復元値 △現存値

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎焼	土成	色調	備考
236	26	S11-SK1 埋土	土師器 甕	16.0	24.5	外部：頸部以上ヨコナデ 以下ハケメ 内面：口縁部ハケメ後ナデ 頸部以下ケズリ	密 良好		外面：鈍い黄橙色～褐灰色 内面：鈍い黄橙色～灰黄褐色	外面：黒斑 埋甕
237	26	S11-SK2 底面	土師器 甕	16.5	21.3	外面：頸部以上ヨコナデ 以下タタキ 内面：口縁部ヨコナデ 頸部以下ケズリ	密 やや不良		外面：鈍い黄褐色～黒褐色 内面：鈍い黄褐色～黒褐色	布目あり。製作粗雑。 炉の防湿目的で特製？
238	26	S11-SK2 埋土	土師器 甕	12.3	△17.9	外面：頸部以上ヨコナデ 以下ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ 頸部以下ケズリ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	外面：スス付着
239	26	S11 床直	土師器 甕	12.5	20.5	外面：頸部以上ヨコナデ 以下ハケメ 内面：口縁部ハケメ後ナデ 頸部以下ケズリ	密 良好		外面：鈍い黄褐色 内面：橙色	外面：黒斑 甕形土器とセット？
240	26	S11 床直	土師器 甕	16.6	△12.5	外面：頸部以上ヨコナデ 以下ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ 頸部以下ケズリ	密 良好		外面：鈍い黄褐色 内面：鈍い黄褐色	
241	26	S11-S11-SK2 埋土	土師器 甕	*18.0	△8.2	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ 頸部以下ケズリ	密 良好		外面：鈍い褐色 内面：鈍い褐色～暗褐色	
242	26	S11 床直	土師器 甕	*15.7	△10.5	外面：頸部以上ヨコナデ 以下ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ 頸部以下ケズリ	密 良好		内外面：鈍い橙色	
243	26	S11 床直	土師器 甕	*18.2	△5.6	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ 頸部以下ケズリ	密 良好		内外面：鈍い橙色	
244	26	S11 床直	土師器 甕	*12.0	△6.7	外面：頸部以上ヨコナデ 以下ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ 頸部以下ケズリ	密 良好		内外面：橙色	赤色塗彩
245	26	S11 床直SK2縁	土師器 壺	8.1	7.8	外面：頸部以上ヨコナデ 以下ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ 頸部以下ケズリ	やや密		内外面：明赤褐色	
246	26	S11 床直、埋土下層	土師器 壺	9.4	8.2	外面：不明 内面：口縁部ヨコナデ 頸部以下ケズリ	密 良好		外面：橙色 内面：鈍い黄褐色	
247	26	S11 床直	土師器 高杯	18.2	△11.3	外面：口縁部ヨコナデ 体部ハケメ 内面：ヨコハケ後ナデ 脚内面ケズリ	密 良好		内外面：橙色	黒斑
248	26	S11 床直	土師器 高杯	*13.2	△9.4	外面：不明 内面：ナデ 脚内面ケズリ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	
249	26	S11 床直、埋土	土師器 高杯	11.0	△8.1	内外面：不明 脚内面ケズリ	密 やや軟質		内外面：鈍い黄褐色	穿孔3
250	26	S11 床直	土師器 甕形土器	10.6 13.4	45.5	外面：ハケメ 狭端ヨコナデ 内面：狭端ヨコナデ 広端ヨコハケ 脚部ケズリ	密 良好		外面：黒色～橙色 内面：橙色	外面：黒斑 棒状つまみ剥落痕？1箇所

第27図 遺物観察表

遺物番号	挿図番号	遺構層位	型式	法量				備考
				長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	
B1	27	S11 床直	ガラス玉	0.6	0.6	0.39	0.2	濃青色



第27図 S I 1 出土ガラス玉

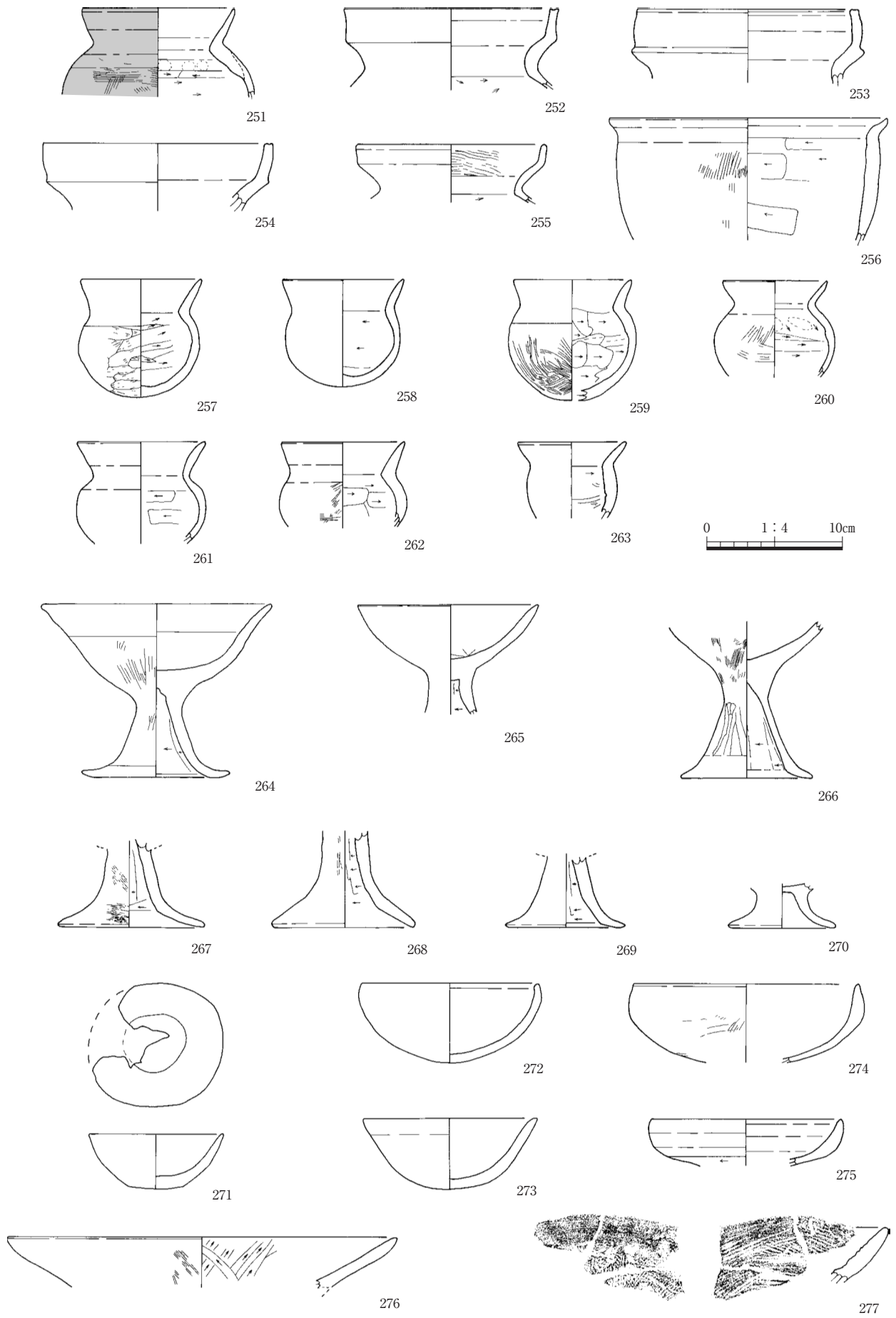
げる。278から281は手捏土器で、壺形と杯形がある。いずれも埋土上層からの出土なので、住居の年代よりは新しいであろう。一方、282と283の土製品はともに埋土下層からの出土で、住居とほぼ同時期の可能性がある。282は、両側面から8～9回の刺突を連続して加え、端のひとつだけが貫通する。鳥形であろうか。

須恵器は2個体分が出土している。284は埋土上層の検出面近くからの出土で、つまみをもつ高杯の蓋である。285はS I 1 東北隅の硬化面下から出土した蓋杯の

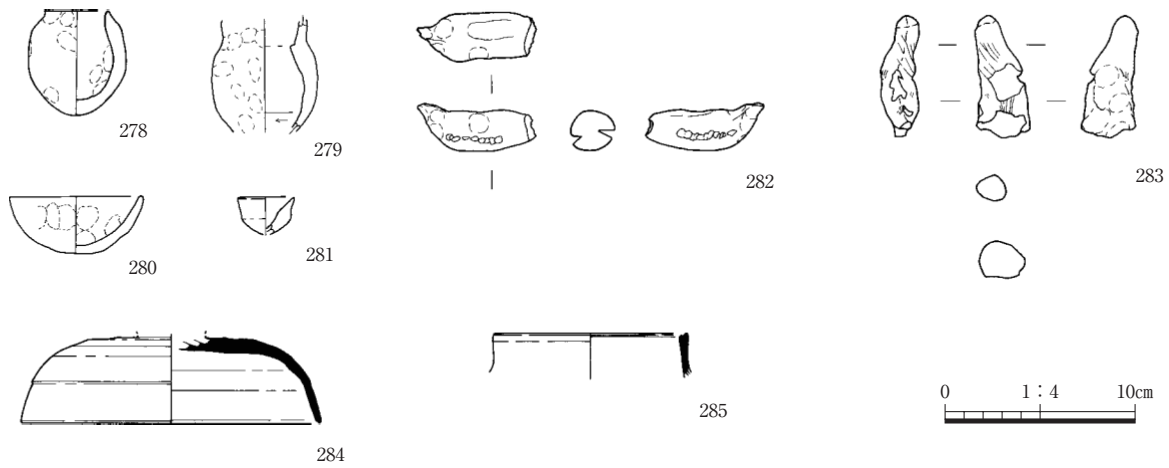
口縁部である。おそらくS I 4に属するものであろう。ともに5世紀後半から6世紀初頭のものである。

石器は7点が出土した。砥石（S31・S32）は住居と同時期の可能性がある。二次加工のある剥片（S33）、磨製石斧（S34）、石鋏（S35）は明らかに下層からの混入品である。その他の敲石や磨石類は、どちらに属するものか判断できない。

床面から出土した遺物から、本住居跡は5世紀第2四半期に作られたと考えられる。埋土下層の遺物がこの時期の遺物を中心として前後のものを若干含み、埋土上層に6世紀代の遺物が少量含まれることから、S I 1の存続期間はあまり長くなく、5世紀後半の比較的早い段階で廃絶しているであろう。床面や埋土下層に須恵器が全く含まれないことから、この地域で須恵器が広く使われるようにな



第28図 S I 1 出土土器 (1)



第29図 S I 1 出土土器 (2)

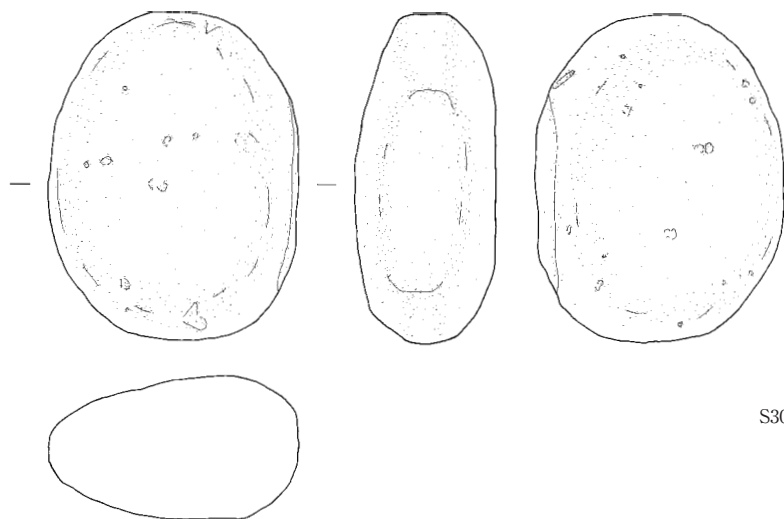
る時期には、S I 1 はすでに埋没が進行していたと考えられる。

なお、S K 2 埋土上層から出土した炭化材について放射性炭素年代測定を行ったところ、暦年較正年代でA D 139—378年という値が得られた (第4章参照)。最も新しい値を採用しても、現在の土器編年から推定される住居の年代とは約50年の開きがある。この結果をどう理解するかは難しい問題であり、今後のデータの蓄積を待つ他はない。

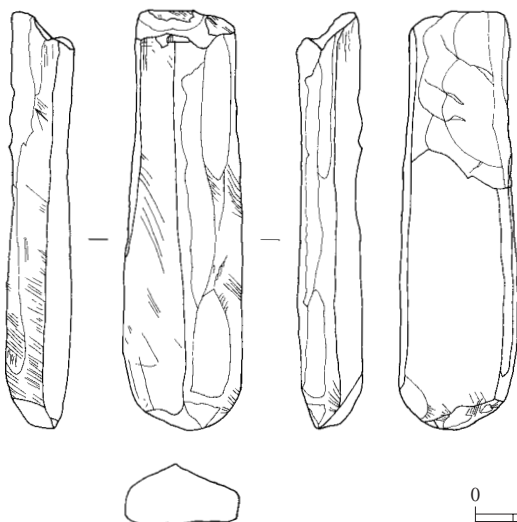
第28～29図 遺物観察表

*復元値 △現存値

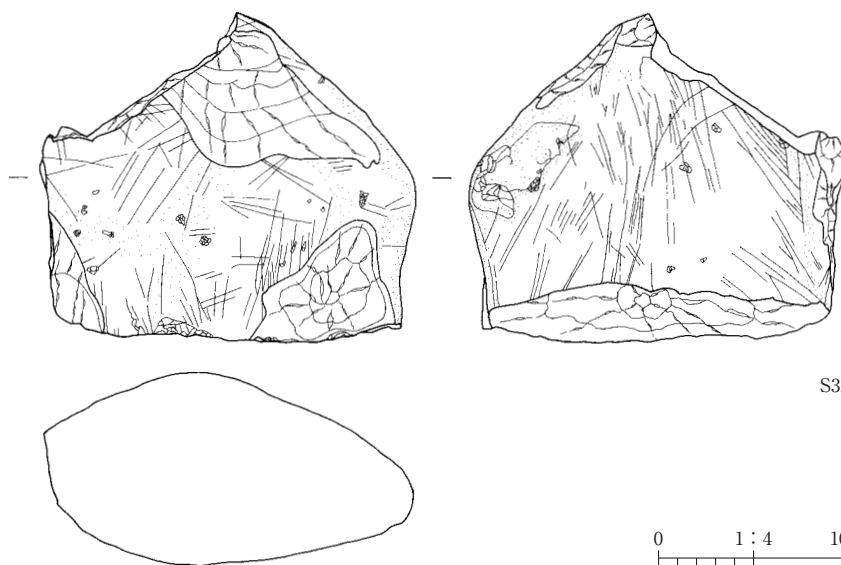
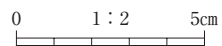
遺物 番号	挿回 番号	遺構 層位	種別 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎 焼	土 成	色 調	備 考
251	28	S11 埋土下層	土師器 甕	*11.2	△ 6.5	外面：頸部以上ヨコナデ 以下ハケメ 内面：頸部以上ヨコナデ 以下ケズリ	密 良好		外面：鈍い黄橙色 内面：橙色	外面：赤色塗彩
252	28	S11 埋土下層	土師器 甕	*15.9	△ 5.9	外面：ヨコナデ 内面：頸部以上ヨコナデ 以下ケズリ	密 良好		外面：橙色 内面：灰褐色	
253	28	S11 埋土上層	土師器 甕	*16.5	△ 5.4	内外面：ヨコナデ	密 良好		内外面：鈍い橙色	
254	28	S11 埋土上層	土師器 甕	*17.0	△ 5.0	内外面：ヨコナデ	密 良好		内外面：鈍い黄橙色	
255	28	S11 埋土上層	土師器 甕	*14.1	△ 4.3	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ナメハケ 以下ケズリ	密 良好		内外面：鈍い黄橙色	
256	28	S11 検出面	土師器 甕	*20.5	△ 9.0	外面：頸部以上ヨコナデ 以下ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ 以下ケズリ	密 やや軟質		外面：橙色 内面：鈍い橙色	
257	28	S11 埋土下層	土師器 壺	8.6	8.8	外面：頸部以上ヨコナデ 以下ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ 以下ケズリ	密 良好		外面：浅黄橙色 内面：灰黄色	外面：黒斑
258	28	S11・S12 埋土上層・検出面	土師器 壺	* 9.0	8.0	外面：不明 内面：口縁部ヨコナデ 胴部ケズリ後ナデ 底部ケズリ	やや粗 良好		内外面：鈍い橙色	遺構間接合
259	28	S11 埋土下層	土師器 壺	* 8.7	8.9	外面：頸部以上ヨコナデ 以下ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ 以下ケズリ	密 良好		内外面：橙色	
260	28	S11・S12 埋土上層	土師器 壺	* 7.6	△ 7.1	外面：頸部以上ヨコナデ 以下ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ 以下ケズリ	密 良好		内外面：灰白色	遺構間接合
261	28	S11 埋土上層・埋土下層	土師器 壺	* 9.6	△ 7.5	外面：口縁部ヨコナデ 以下不明 内面：口縁部ヨコナデ 以下ケズリ	密 良好		内外面：鈍い橙色	外面：一部黒斑
262	28	S11 埋土上層・埋土下層	土師器 壺	* 9.2	△ 6.3	外面：口縁部ヨコナデ 以下ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ 以下ケズリ	密 良好		内外面：鈍い黄橙色	
263	28	S11 埋土上層	土師器 壺	* 8.0	△ 5.6	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ 以下ケズリ	密 良好		内外面：鈍い橙色	
264	28	S11 埋土下層	土師器 高杯	16.7 9.5	12.8	外面：口縁部ヨコナデ 体部ハケメ 脚部ナデ 内面：ナデ 脚内面：ヘケズリ	やや密 やや軟質		内外面：赤橙色	
265	28	S11 検出面	土師器 高杯	*13.2	△ 8.1	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 脚内面：ケズリ	密 良好		外面：鈍い黄橙色～橙色 内面：褐色	
266	28	S11 埋土下層	土師器 高杯	* 9.6	△11.5	外面：ハケメ、ナデ 内面：ナデ 脚内面：ケズリ	密 良好		外面：鈍い橙色 内面：黒色	
267	28	S11 埋土下層	土師器 高杯	10.6	△ 6.5	外面：ハケメ後ナデ 内面：ケズリ、ヨコナデ	密 良好		内外面：褐色	
268	28	S11 埋土下層	土師器 高杯	10.2	△ 7.2	外面：ハケメ後ヨコナデ 内面：ケズリ、ヨコナデ	密 良好		内外面：鈍い橙色	
269	28	S11 検出面	土師器 高杯	8.2	△ 5.3	外面：ナデ 内面：ケズリ、ヨコナデ	密 良好		内外面：褐色	
270	28	S11 検出面	土師器 低脚杯	* 7.4	△ 3.3	内外面：ヨコナデ	密 良好		内外面：明黄褐色	
271	28	S11 埋土下層	土師器 杯	9.2×10.2 4.3	4.1	外面：ヨコナデ 内面：不整方向のナデ	密 良好		内外面：褐色	
272	28	S11 埋土上層	土師器 杯	*13.0	△ 5.9	外面：不明 内面：ヨコナデ	密 やや軟質		内外面：褐色	
273	28	S11 埋土下層	土師器 杯	12.7	5.2	外面：口縁部ヨコナデ 以下不整方向のナデ 内面：不整方向のナデ	やや粗 やや良好		内外面：黒褐色	
274	28	S11 検出面	土師器 杯	*16.8	△ 5.8	外面：口縁部ヨコナデ 以下ハケメ 内面：口縁部ヨコハケ 以下ナデ	密 良好		内外面：鈍い橙色	
275	28	S11 埋土上層・検出面	土師器 杯	*14.0	△ 3.5	外面：口縁部ナデ 以下ケズリ後ナデ 内面：ヨコナデ	密 良好		内外面：褐色	
276	28	S11 埋土下層	土師器 不明	*28.6	△ 3.7	外面：タテハケ 内面：ケズリ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	
277	28	S11 検出面	土師器 不明		△ 4.1	外面：ハケメ 口縁部ヨコナデ 内面：ハケメ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	
278	29	S11 埋土上層	土師器 手捏土器	*3.4	5.5	内外面：指頭圧痕	密 やや軟質		外面：鈍い黄褐色 内面：褐灰色	
279	29	S11 埋土	土師器 手捏土器		△ 5.9	外面：指頭圧痕、ナデ 内面：ヨコナデ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	
280	29	S11 埋土上層	土師器 手捏土器	6.8	3.0	外面：指頭圧痕 内面：指押さえ後不整方向ナデ	密 良好		内外面：褐色	
281	29	S11 埋土上層	土師器 手捏土器	* 3.0	△ 2.0	内外面：指押さえ後ナデ	密 良好		内外面：黄褐色	
282	29	S11 埋土下層	土師器 土製品	長さ：△6.3	幅：2.7 厚さ：2.2	指押さえ、刺突	密 良好		鈍い黄褐色	鳥形？
283	29	S11 埋土下層	土師器 土製品	長さ：△6.5	幅：2.9 厚さ：2.0	指押さえ	密 良好		表：鈍い褐色 裏：褐色	
284	29	S11 検出面	須恵器 高杯蓋	*16.0	△ 4.6	外面：口縁部回転ナデ 天井部ケズリ 内面：回転ナデ 天井部不整方向ナデ	密 良好		外面：暗灰色 内面：灰色	
285	29	S11 埋土下層	須恵器 杯身	*10.2	△ 2.3	内外面：回転ナデ	密 良好		内外面：灰色	S14の遺物？



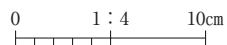
S30



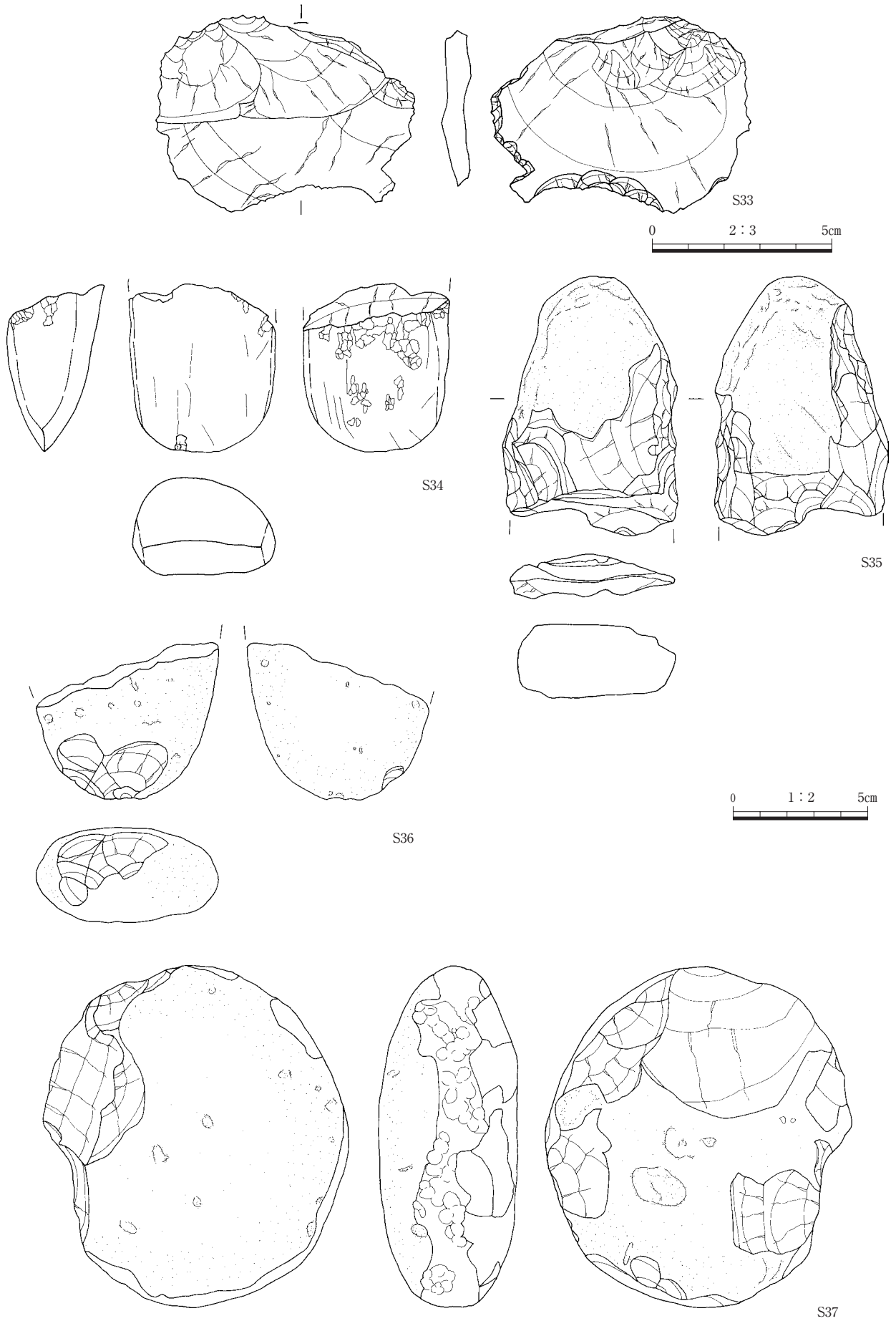
S31



S32



第30図 S I 1 出土石器 (1)



第31図 S I 1 出土石器 (2)

第30～31図 石器観察表

遺物 番号	挿図 番号	遺構 層位	型 式	長 (cm)	幅 (cm)	量 厚 (cm)	重量 (g)	石 材	備 考
S 30	30	S I 1 床直	磨石	8.6	6.3	3.8	263.0	角閃石安山岩	
S 31	30	S I 1	砥石	11.0	3.1	1.7	76.3	頁岩	
S 32	30	S I 1 床直	砥石	17.4	19.9	10.2	4,100.0	安山岩	ほぼ全面に砥面。線状痕あり。受熱。
S 33	31	S I 1 埋土上層	二次加工のある剥片	5.5	7.2	0.9	28.3	サヌカイト	
S 34	31	S I 1 埋土上層	磨製石斧	6.2	5.2	3.6	158.0	閃緑岩	
S 35	31	S I 1 埋土下層	石鍬	9.5	6.3	2.7	237.8	緑泥片岩	
S 36	31	S I 1 東西ベルト2層	敲石	5.7	6.7	3.5	131.5	角閃石安山岩	
S 37	31	S I 1 埋土下層	敲石	12.5	11.2	5.1	778.0	角閃石安山岩	

S I 3 (第32図、図版10)

S I 1 の西半部分にすっぽり収まる形で位置し、主軸は90度ずれる。南北4.2m、東西は北辺で2.9m南辺で3.3mの、ほぼ長方形を呈する。S I 3 の外周からS I 1 の床面の端までは、南・北・西の3辺では70cm、東辺では288cmを測る。S I 3 の床面は、S I 1 の床面から約20cm下に位置し、すべてがS I 1 の貼床の下にぴったり収まる。言い換えれば、S I 1 の貼床はS I 3 を覆うために設けられていることになる。S I 3 自身は、ソフトローム層が露出する東部分を除いて、床面の約半分に厚さ20cmの貼床を施す。幅15～20cm深さ15cmの周壁溝が床面を廻る。

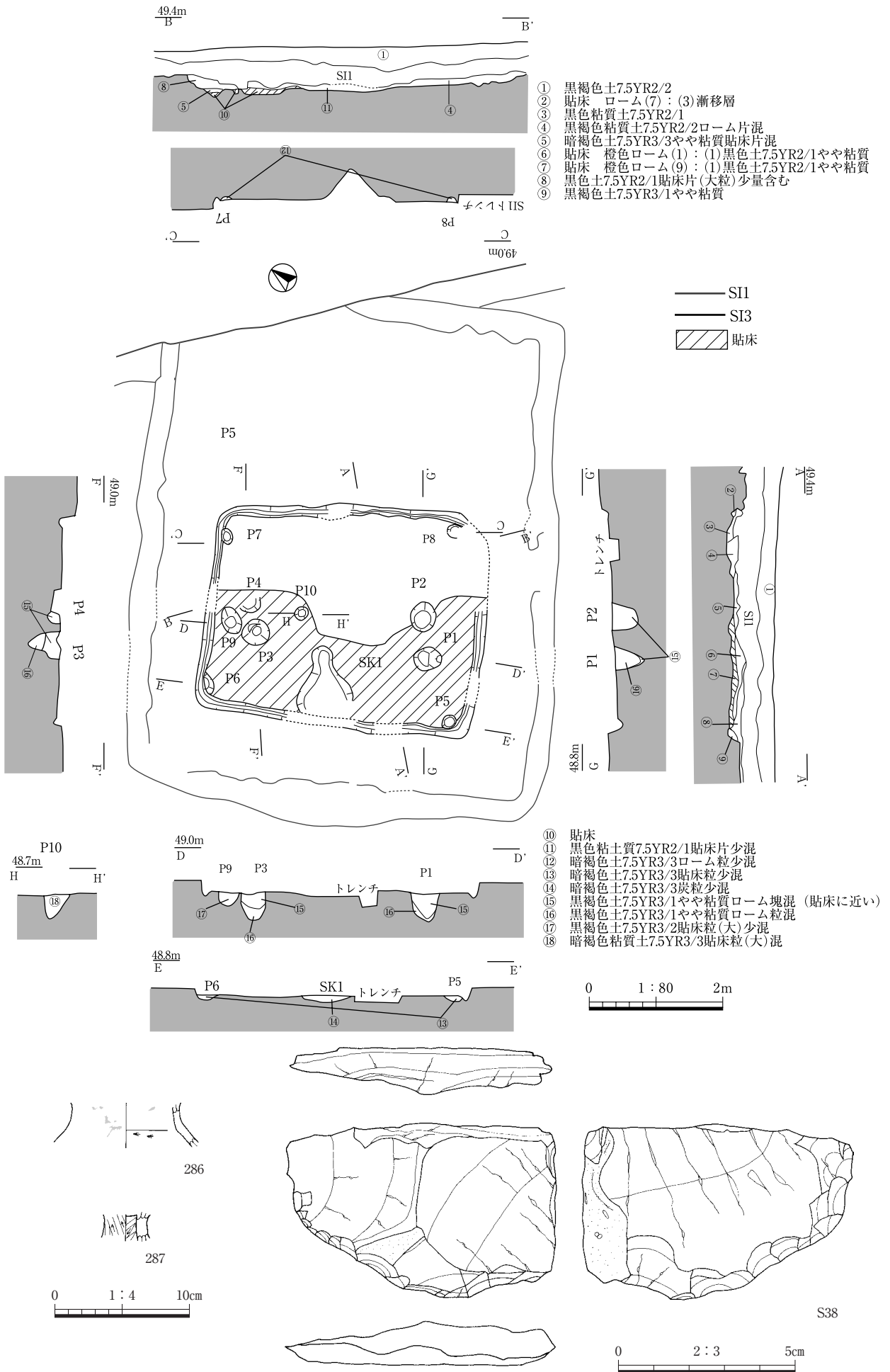
主柱穴はP 1 からP 4 の4基で、P 1 とP 2、P 3 とP 4 がそれぞれ対になる。P 1 とP 2 の間隔は柱穴中央で測ると60cm、P 3 とP 4 では50cmと非常に接近している。P 1 とP 3 はともに床面からの深さ42cmで、わずかに東側に傾く。P 2 とP 4 は垂直に掘られておりP 2 は深さ40cm、P 4 は深さ20cmである。柱穴の間隔が狭いことと、一方がわずかに傾くことから、対になる柱を上部で交差させるか組み合わせて棟を支えたものと考えられる。柱は全て抜き取られた上で貼床に近い構成の土で埋め立てられている。そのうちのP 3 がS I 1 でも利用されるのは先述のとおりである。

住居の四隅には、一部が周壁溝と重なる形で、P 5 ～P 8 の4つのピットが設けられる。いずれも深さ4～10cmと浅いので、壁を支える副え柱の穴であろう。P 10は深さ32cmで住居の中軸線上に位置するので、棟の支柱のためのものと考えられる。P 9は支柱の穴としては大きく中軸ともずれるので、柱穴ではないだろう。S I 1 のSK 1のような、何かを埋納する性格を持っていたかもしれない。

西辺中央に、瓢箪形の浅い土坑SK 1が掘られている。埋土に炭を含むことから、この住居の火処であると考えられる。一長辺の中央壁際に火処を設ける点は、S I 1 と共通している。

遺物は土師器の細片と石器がごく少量出土したのみである。286は小型壺の頸部、287は高杯脚部の破片である。いずれも細片のため、時期を推定するのは困難である。S 38は石鍬の破片で、混入品であろう。

S I 1 を、S I 3 から直接建て直されたものとするのは、次の点を根拠とする。1) 両者の平面的な配置がバランスよく整って一致していること。2) S I 3 の柱穴を固く埋め立てるなど、S I 1 への配慮がなされていること。3) S I 3 がほぼ無遺物なのは、建て直しの際の片付けと考えられること。4) 両者に共通する柱穴があること。S I 3 の床面積は約10.6㎡で、S I 1 は37.5㎡なので、



第32図 S13 および出土遺物

第32図 遺物観察表

*復元値 △現存値

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎底焼	土成	色調	備考
286	32	S I 3 貼床上黒色土	土師器 壺		△3.3	外面：ヨコナデ 内面：ナデ ケズリ	密 良好		内外面：鈍い黄橙色	内外面：赤色塗彩
287	32	S I 3-P 2 埋土中	土師器 高杯		△1.9	内外面：ケズリ	密 良好		外面：褐灰色 内面：鈍い黄橙色	
遺物番号	挿図番号	遺構層位	型式	長(cm)	幅(cm)	法厚(cm)	重量(g)	石材	備考	
S 38	32	S I 03 貼床上黒色土	石鍬	△4.8	7.5	1.2	53.8	泥質片岩		

第2表 S I 3内の遺構

	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
P 1	41×35	40	主柱穴
P 2	42×36	40	主柱穴
P 3	40×40	42	主柱穴
P 4	30×30	20	主柱穴
P 5	21×21	10	
P 6	40×40	7	
P 7	24×15	4	
P 8	20×20	7	
P 9	45×30	20	
P 10	20×20	32	棟支柱
S K 1	90×84	10	火処

3.5倍に増築されたことになる。
S I 3とS I 1の貼床の間に黒色土層があることや、3辺は均等に広げられていることを考慮すると、その手順は、まず東西南北に70cmずつS I 3の壁を掘り広げながらS I 3の柱穴と床を埋め立て、次に東辺のみを掘り広げてソフトローム層が露出しない部分に貼床を設けたものと考えられる。このようにした目的はおそらく、新しい住居の壁を支えうる新鮮で

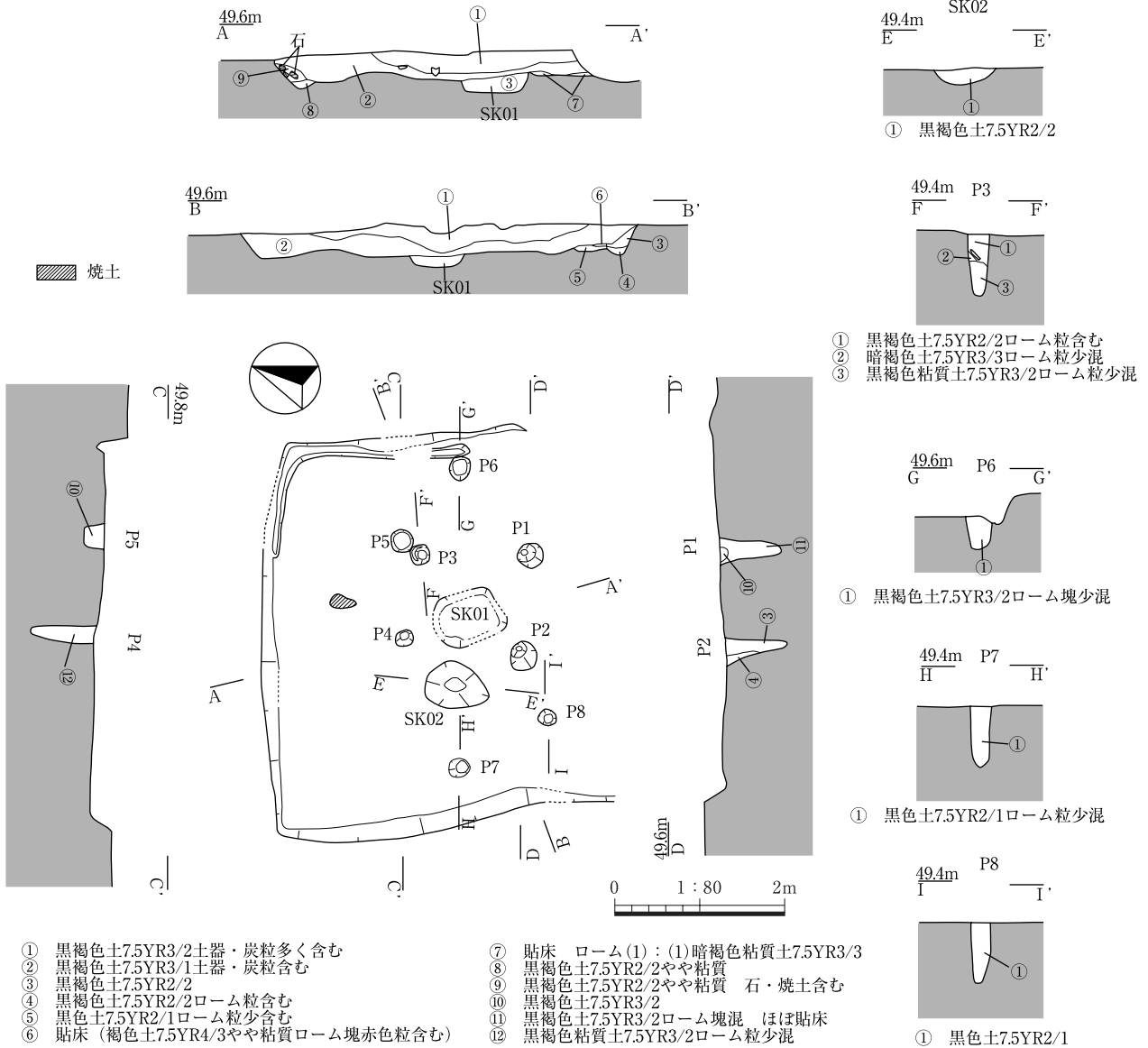
安定した床面を得ることにあったであろう。

S I 2 (第33図、図版11~13)

調査区中程の、P 78・P 79グリッドにまたがって位置し、検出面での標高は49.2m、床面の標高は48.9mを測る。近世に掘られた溝S D 1により南側を失っていることと、黒褐色土中に設けられた遺構であるため輪郭を捉え切れなかったため、正確な大きさは不明である。現存値では、東辺2.8m、北辺4.6m、西辺4.0mを測るが、北西角は、遺物の出土位置などから見ても掘り過ぎた可能性が高い。実際のところは、ローム層にかかっていたため認識できた主柱穴と東辺から復元すると、一辺約4.1mの、ほぼ正方形であったと考えられる。軸は北西方向に20度ふれている。他の住居跡との距離は最も狭い所で、S I 1とは1.5m、S I 3とは2.6mを測る。南東部分の床面に、厚さ5cmのロームを含んだ貼床状の層が認められるが、床面の大半は黒褐色土のままである。幅15cm深さ10cmの周壁溝が北東部分で検出されていて、本来は床面の全体を廻っていたと考えられる。

主柱穴はP 1からP 4で、いずれも70cmを超える深さをもち直立する。柱間距離は1.0~1.4mとばらつきがあり、ややいびつな四辺形の梁が組まれていたであろう。東西軸上の両辺から40cmの位置には、P 6とP 7がある。P 6はやや浅いが、ともに棟持柱と考えられる。したがって上屋は切妻であった可能性がある。

東西軸上には、浅い皿状の土坑S K 1とS K 2が掘られ、その間に台石S 42が置かれている。この石器は作業台として用いられたと考えられ、S K 1とは重ならないがS K 2にかぶるので、S K 1は

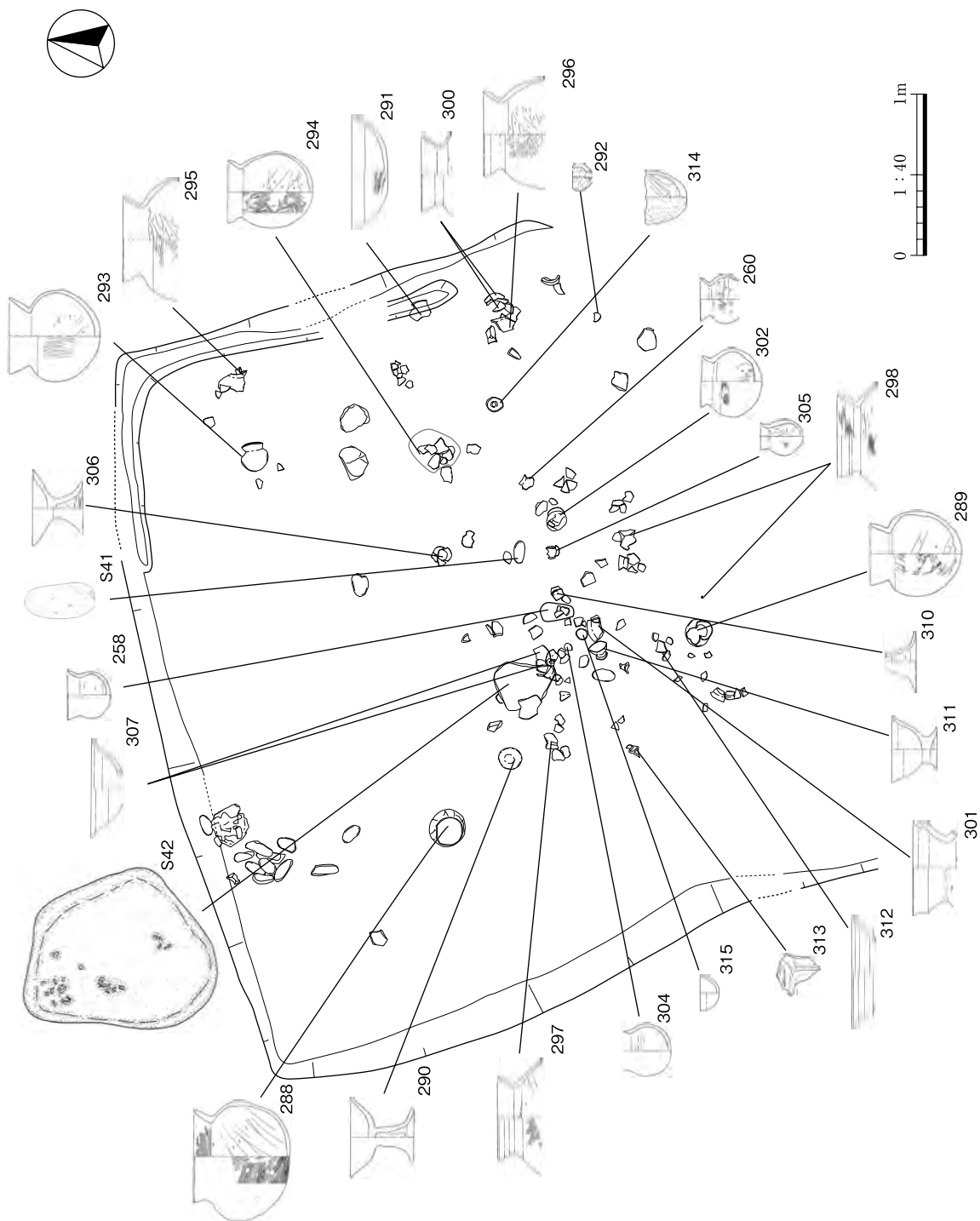


第3表 S I 2内の遺構

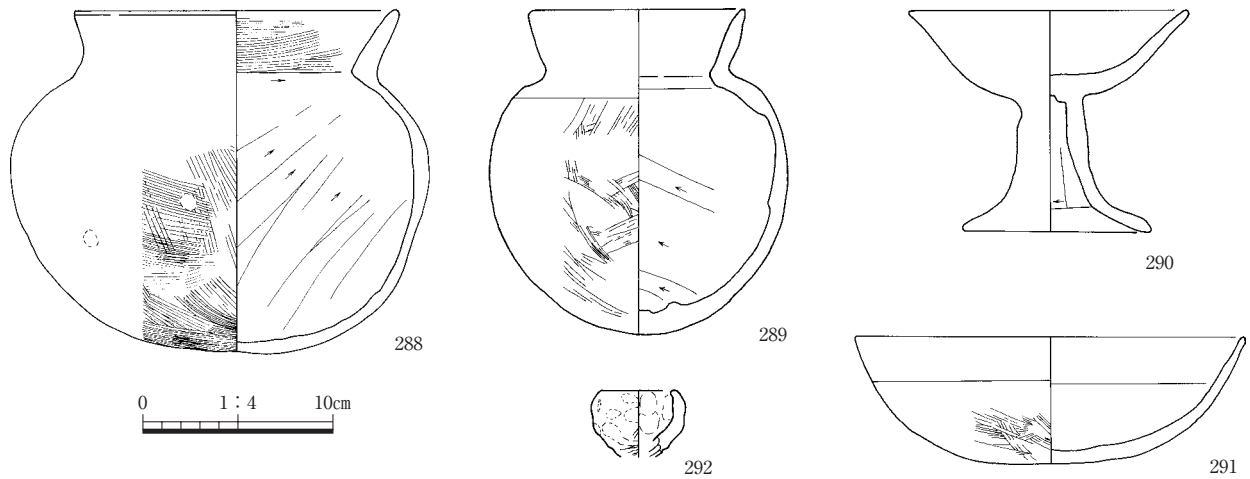
	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
P 1	28×28	70	主柱穴
P 2	34×30	70	主柱穴
P 3	22×22	70	主柱穴
P 4	20×20	74	主柱穴
P 5	28×28	20	
P 6	27×22	40	棟持柱？
P 7	23×23	70	棟持柱？
P 8	21×21	70	
S K 1	80×60	17	
S K 2	75×52	20	

SK 2が埋まった後で掘られたと考えられる。S I 1やS I 3にあるような火処の土坑は、調査できた範囲にはない。北部分に焼土面があり、床面で直接火が焚かれたことが知られるが、これが主要な火処であったかは不明である。

S I 1とS I 2の間隔は1.5mしかないので、周堤を築いた場合には両者が並存することは難しいであろう。一



第34図 S I 2 遺物出土状況



第35図 S I 2 床面出土土器

第35図 遺物観察表

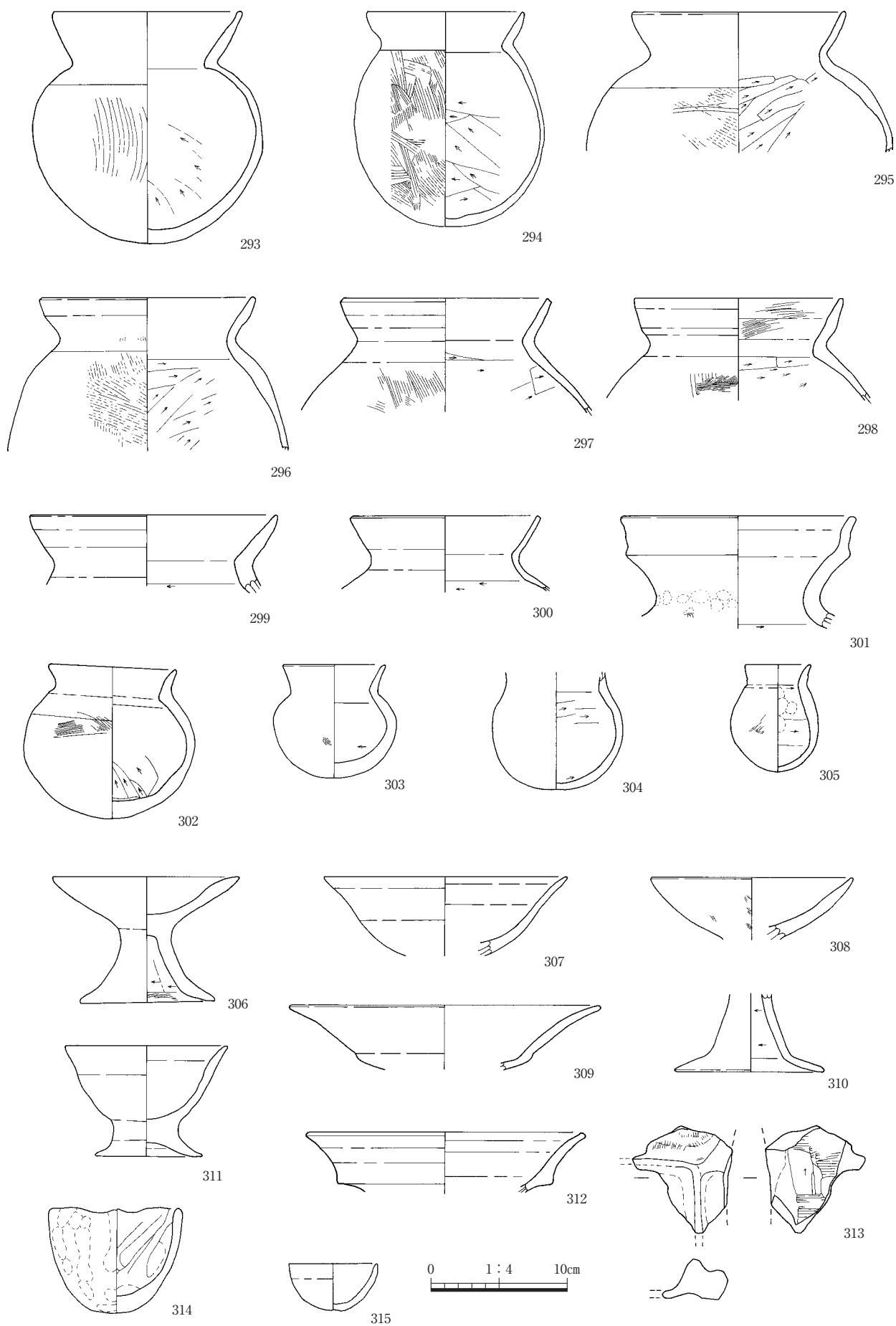
*復元値 △現存値

遺物 番号	押図 番号	遺構 層位	種別 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎 焼	土 成	色調	備考
288	35	S I 2 床直	土師器 甕	17.0	18.1	外面：頸部以上ナデ 以下ハケメ 内面：口縁部ヨコハケ 頸部以下ケズリ	密 良好		内外面：鈍い黄橙色～灰黄褐色	
289	35	S I 2 床直	土師器 甕	11.1	17.0	外面：頸部以上ヨコナデ 以下ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ 頸部以下ケズリ	やや密 やや良好		内外面：浅黄橙色	
290	35	S I 2 床直・埋土下層	土師器 高杯	14.3 9.7	11.6	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：杯部ヨコナデ 脚部ケズリとヨコナデ	やや密 やや軟質		内外面：浅黄褐色	
291	35	S I 2 P4埋土・埋土上層	土師器 椀	20.5	6.6	外面：口縁部ヨコナデ 以下ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、以下ナデ	やや密 やや良好		内外面：橙色	
292	35	S I 2 床直	土師器 手捏土器	*4.0	△3.5	内外面：指押さえ	密 良好		内外面：橙色	

方でS I 3とは隣接して存在できると思われる。また、S I 2の構造は、4本柱で床面が浅く貼床を基本的に設けないなど、他の2つとは異質な点があり、おそらくより古い形態を示しているであろう。しかし、出土遺物から見るとS I 2とS I 1にはほとんど時期差はない。以上から、S I 2とS I 3が同時に連続して建てられて並存し、両者を統合してS I 1が建築された可能性が高いと考えられる。S I 2の床面積は14.4㎡に復元される。S I 3が単独で、3.5倍のS I 1に増築されたと考えられるよりも、2軒を合わせた上で1.5倍に拡大したと考える方が、蓋然性が高いように思われる。この解釈が正しければ、S I 2で出土した遺物には、S I 3とS I 1で使われたものが多く含まれていることになろう。なお、S I 1とS I 2で出土した土器の2個体が、遺構間で接合した。小型壺258と260（第28図）である。ともに埋土上層どうしでの接合であるため、遺構の新旧を確定する材料とはし難い。

床面および埋土からは大量の土師器が出土している。床面から出土したのは、第35図の5点である。甕288は床面に正立していたので、もともと本住居に属していたものかもしれない。その他は、高杯290は杯部が埋土上層で、椀291は破片がP4の埋土から出土しているというように、出土状況から見ると住居廃絶後に廃棄された可能性がある。

埋土出土の土器には須恵器が皆無で、6世紀代のものがほとんど無いことから、S I 1よりも早い時期に埋没が完了したと考えられる。おそらくS I 1が使用されている段階で、本住居跡は格好のゴミ捨て場になっていたであろう。遺構検出面では、住居跡中央で円形の土坑に土器が詰め込まれたか



第36図 S I 2 出土土器

第36図 遺物観察表

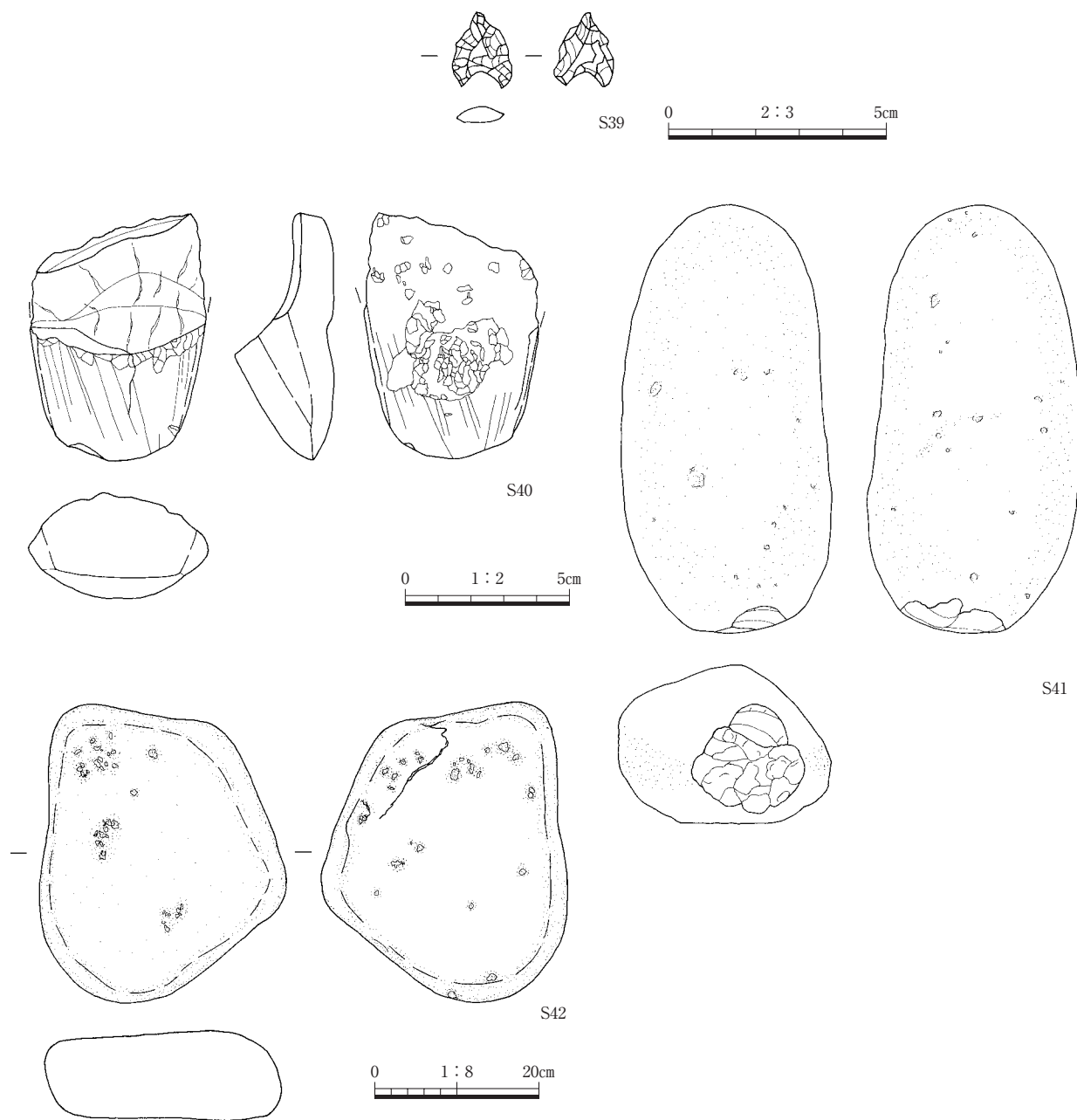
* 復元値 △ 現存値

遺物 番号	挿回 番号	遺構 層位	種別 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎 焼	土 成	色 調	備 考
293	36	S I 2 検出面	土師器 甕	13.5	17.5	外面：頸部以上ヨコナデ 以下ハケメ、ナデ 内面：口縁部ヨコナデ 以下ケズリ、ナデ	やや密 やや良好		内外面：浅黄褐色	底部付近スス付着
294	36	S I 2 埋土上層	土師器 甕	11.3	15.7	外面：頸部以上ヨコナデ 以下ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ 以下ケズリ	やや密 やや良好		内外面：浅黄褐色	
295	36	S I 2 検出面	土師器 甕	*15.4	△10.4	外面：頸部以上ヨコナデ 以下ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ 以下ケズリ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	
296	36	S I 2 埋土上層	土師器 甕	*15.5	△11.3	外面：頸部以上ヨコナデ 以下ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ 以下ケズリ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	外面：黒斑
297	36	S I 2 埋土上層	土師器 甕	*15.0	△ 8.4	外面：頸部以上ヨコナデ 以下ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ 以下ケズリ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	外面：黒斑
298	36	S I 2 埋土上層検出面	土師器 甕	*15.5	△ 7.5	外面：頸部以上ヨコナデ 以下ハケメ 内面：口縁部ハケメ後ナデ 以下ケズリ	密 良好		外面：黒褐色 内面：鈍い黄褐色	
299	36	S I 2 埋土上層	土師器 甕	*18.2	△ 5.7	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ 以下ケズリ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	
300	36	S I 2 埋土上層	土師器 甕	14.1	△ 5.5	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ 以下ケズリ	密 良好		内外面：灰黄色	
301	36	S I 2 検出面	土師器 甕	*17.3	△ 8.3	外面：ヨコナデ 内面：口縁部から頸部ヨコナデ 以下ケズリ	密 良好		外面：鈍い黄褐色～橙色 内面：橙色	外面：黒斑
302	36	S I 2 検出面	土師器 壺	9.1	11.3	外面：頸部以上ヨコナデ 以下ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ 以下ケズリ	やや密 やや良好		内外面：黄褐色	
303	36	S I 2・S D 1 埋土上層・埋土	土師器 壺	* 7.6	8.3	外面：不明 内面：口縁部ヨコナデ 以下ケズリ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	外面：黒斑
304	36	S I 2 検出面	土師器 壺		△ 8.6	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ケズリ後ナデ	密 良好		外面：鈍い橙色 内面：鈍い橙色～褐灰色	外面：黒斑
305	36	S I 2・S D 1 検出面・埋土	土師器 壺	4.8	7.9	外面：頸部以上ヨコナデ 以下ハケメ後ナデ 内面：口縁部ナデ 以下ケズリ、指頭圧痕	密 良好		外面：橙色 内面：鈍い黄褐色	
306	36	S I 2 埋土上層	土師器 高杯	13.3 9.8	9.4	外面：調整不明 内面：口縁部ヨコナデ 脚内部ケズリ後ナデ、ハケ目	やや荒 やや軟質		内外面：淡黄褐色	
307	36	S I 2 検出面	土師器 高杯	*18.0	△ 5.8	内外面：不明	密 やや軟質		内外面：鈍い黄褐色	
308	36	S I 2 検出面	土師器 高杯	*15.0	△ 4.6	外面：口縁部ヨコナデ 以下ハケメ後ナデ 内面：ヨコナデ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	
309	36	S I 2 検出面	土師器 高杯	*22.7	△ 4.7	内外面：口縁部ヨコナデ 以下不明	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	
310	36	S I 2 検出面	土師器 高杯	*10.5	△ 5.8	外面：ヨコナデ 内面：ケズリ ヨコナデ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	
311	36	S I 2 検出面	土師器 低脚杯	11.8 7.8	8.1	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：口縁部ヨコナデ 以下ナデ	やや粗		内外面：橙色	
312	36	S I 2 埋土上層	土師器 高杯	*20.7	△ 4.5	内外面：ヨコナデ	密 良好		内外面：橙色	
313	36	S I 2 検出面	土師器 竈	長さ：7.5 幅：7.3 厚さ：2.5		外面：ナデ、ハケメ 内面：ナデ、ハケメ、ケズリ	密 良好		外面：鈍い黄褐色 内面：褐灰色	
314	36	S I 2 埋土上層	土師器 手捏土器	9.3	7.8	内外面：指押さえ後ナデ	密 良好		外面：浅黄褐色 内面：橙色	
315	36	S I 2 検出面	土師器 手捏土器	6.6	3.5	外面：口縁部ヨコナデ 以下指押さえ後ナデ 内面：指押さえ後ナデ	密 良好		外面：明黄褐色 内面：橙色	

のような出土状況を示していた(図版11)。複数含まれている完形品は、S I 3の建て替え時やS I 1からの不要品と考えると辻褄が合うかもしれない。293から298は甕である。単純口縁のものが多く、S I 1床面出土土器と共通している。小型壺(302~305)や高杯(306~310、312)が多いことも同様である。高杯309や312は少し時期が古いかもしれない。竈313は6世紀代のものであろう。手捏土器(312・313)はともに椀形で、314は手捏土器としては大きく、ともに作りが丁寧である。

石器は4点が出土した。石鏃S39と磨製石斧S40は下層からの混入品である。台石S42は床面中央に置かれていたもの。両平坦面を中心に使用による摩滅が認められ、一部は受熱している。敲石S42は上層と下層のいずれのものか分からない。この他に、北西隅付近の埋土からは、平均で長さ17cm重さ700gの棒状礫が12点まとまって出土した(図版13—2)。いずれの礫にも使用の痕跡はない。蕨などを編むためのおもりかもしれない。

5世紀前半の住居で、おそらく第2四半期にS I 1の建築を契機に廃絶し、5世紀後半の間にゴミ捨て場として利用されていたものと考えられる。



第37図 S I 2 出土石器

第37図 石器観察表

遺物 番号	挿図 番号	遺 構 層 位	型 式	法 量			重 量 (g)	石 材	備 考
				長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)			
S39	37	S I 2 埋土上層	石鏃	1.7	1.4	0.4	0.6	黒曜石	
S40	37	S I 2 検出面	磨製石斧	7.4	5.3	3.2	118.0	黒雲母花崗岩	
S41	37	S I 2 検出面	敲石	12.9	6.4	4.7	593.0	花崗岩	
S42	37	S I 2 床直	台石	36.1	30.0	10.9	18,800.0	安山岩	一部受熱

3. 溝

S D 1 (第38図)

調査地中央を、P79グリッドからQ78グリッドにかけて南西方向に走る断面U字形の溝である。幅は1.4~2.0m、深さは65cmを測る。底面の標高は調査区東端で49.7m、西端で48.5mで、西に向けて傾斜し、調査区外で南北に掘られた溝に合流するようである。2層中から掘り込まれ、竪穴住居S I 2の南辺を削る。底面近くから染付の細片が出土したので、近世に掘られたものと考えられる。大雨の時などに谷を流れる雨水を逃がして、畑地を保護するために設けられたものであろうか。

埋土から土器と石器が出土している。S I 2出土遺物と接合するものが複数ある。高杯316と低脚杯317は本来S I 2に属したものであろう。石鍬S43とS44は下層の遺物が掘り出されたものと考えられる。

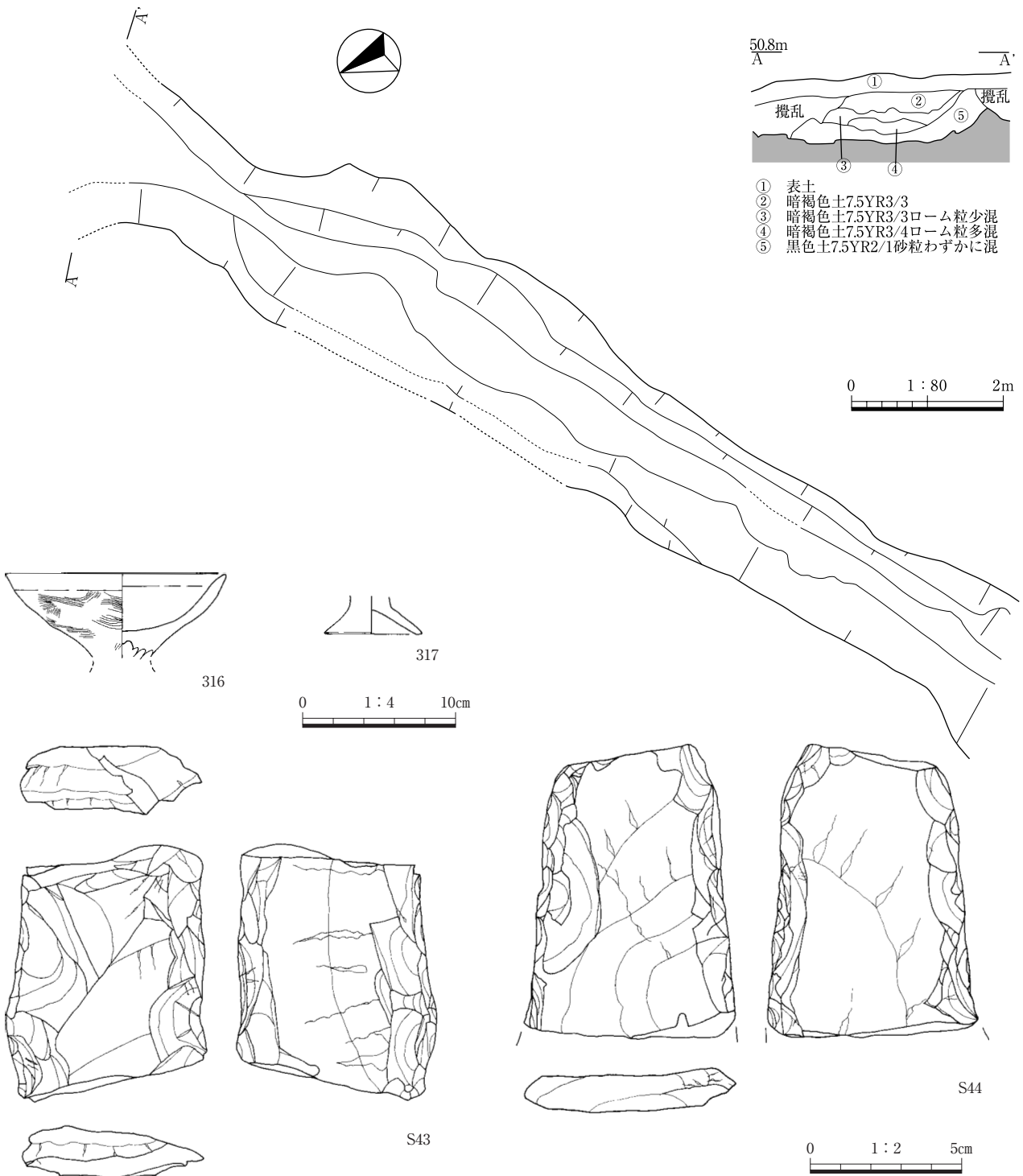
4. 土坑とピット (第39~42図)

調査区からは土坑4基とピット24基を検出した。第1節で述べたとおり、4層上面で検出し遺物が出土しなかったため、本来上層に属していたものか下層に属していたものか不明である。木の根穴とピットの判別においては、ピットとしたものは平面形と断面形が整っていることを根拠にした。しかし、その中には木の根穴が含まれているかもしれない。

多くの土坑とピットは、遺跡の中心部分と考えられる調査区東側の尾根が、谷地形にさしかかる傾斜変換点にそって分布する。これは竪穴住居跡や段状遺構の分布と共通するので、人為的に何らかの目的で掘られたものと考えられる。しかし、掘立柱建物や柵列を構成するような配列を取るものはないので、それぞれの機能は不明である。

第4表 土坑およびピット一覧

長径×短径(cm) 深さ(cm)			長径×短径(cm) 深さ(cm)			長径×短径(cm) 深さ(cm)		
P 1	40×40	33	P 11	42×42	15	P 21	30×30	21
P 2	30×30	54	P 12	48×42	12	P 22	24×24	28
P 3	24×24	32	P 13	27×27	48	P 23	41×20	35
P 4	20×20	21	P 14	41×33	29	P 24	29×29	15
P 5	57×48	20	P 15	86×55	18			
P 6	27×25	21	P 16	36×36	17	S K 1	138×71	34
P 7	22×16	13	P 17	37×31	35	S K 2	147×90	28
P 8	27×22	21	P 18	20×20	27	S K 3	203×60	28
P 9	26×26	21	P 19	28×25	42	S K 4	67×67	65
P 10	46×46	32	P 20	30×27	17			

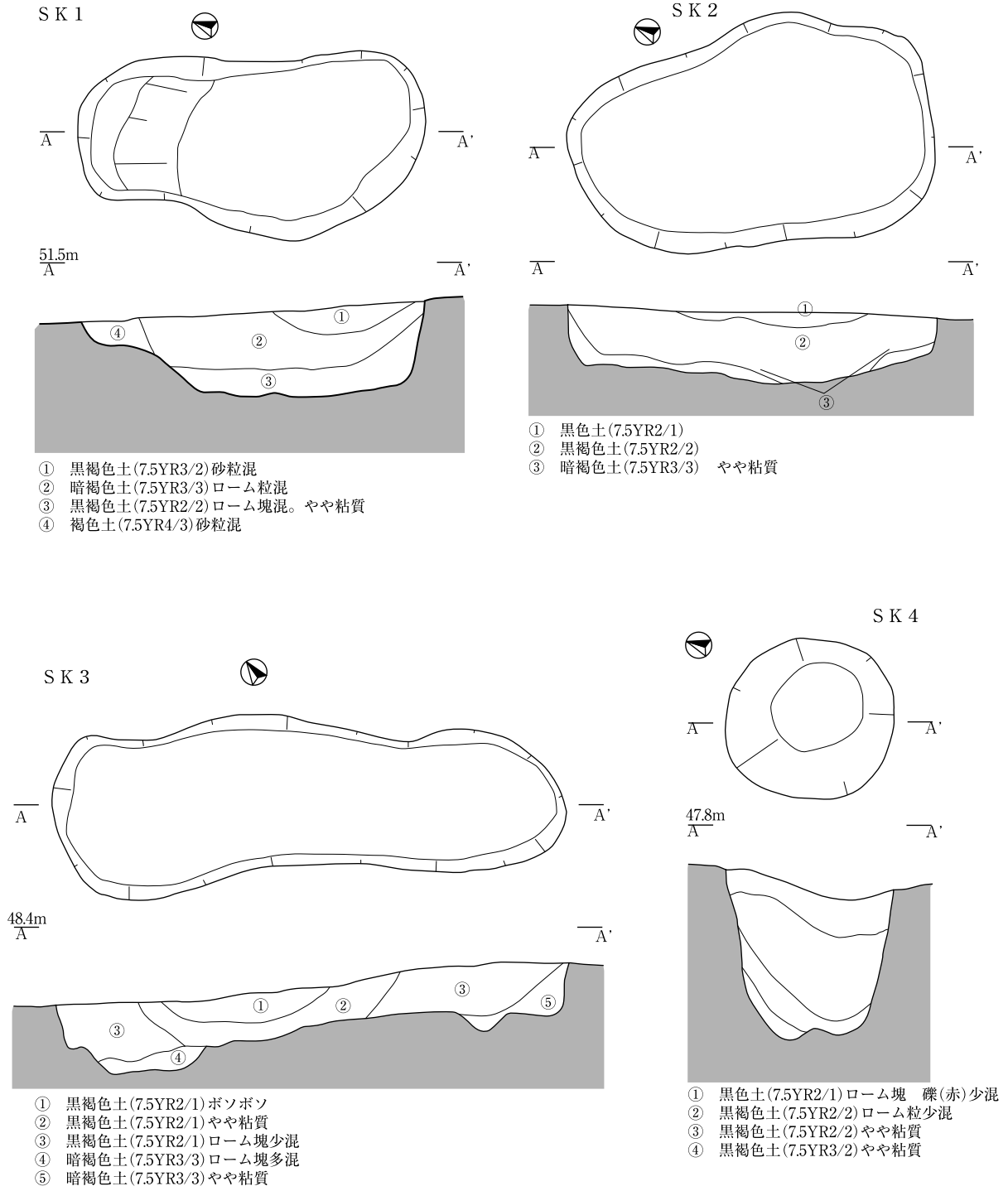


第38図 SD1 および出土遺物

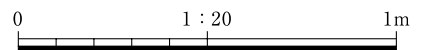
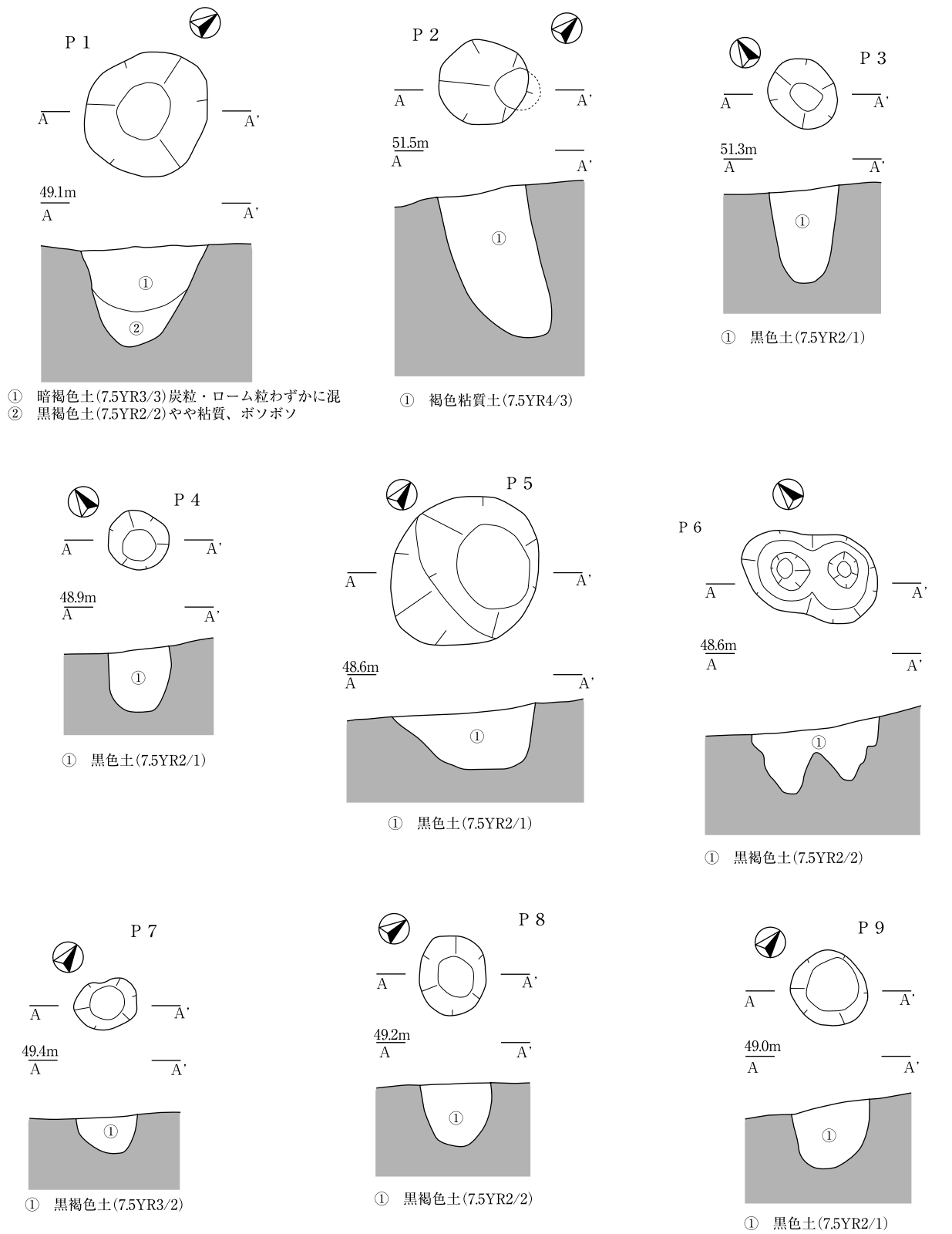
第38図 遺物観察表

*復元値 △現存値

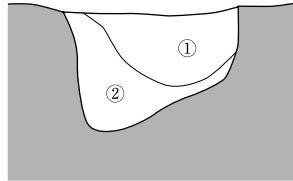
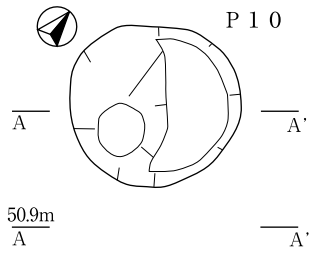
遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm)	文様・調整	胎焼	土成	色調	備考
316	38	SD1埋土	土師器高杯	14.3	△5.5	外面：口縁部ヨコナデ 以下ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ 以下ナデ	密	良好	内外面：橙色	
317	38	SD1埋土	土師器低脚杯	6.4	△2.5	内外面：ナデ	密	やや軟質	内外面：鈍い橙色	
遺物番号	挿図番号	遺構層位	型式	長(cm)	法幅(cm)	量厚(cm)	重量(g)	石材	備考	
S43	38	SD1埋土	石鍬	8.4	6.6	1.6	177.6	泥質片岩		
S44	38	SD1埋土	石鍬	9.6	7.0	1.4	183.1	泥質片岩		



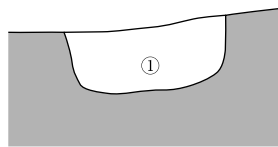
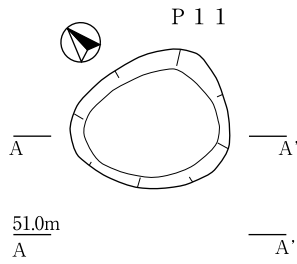
第39図 土坑



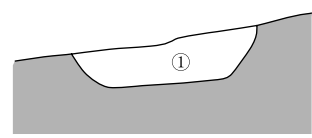
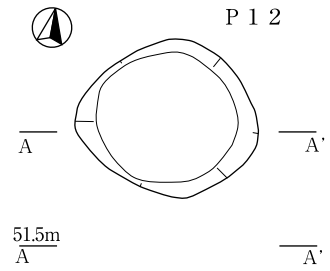
第40図 ピット(1)



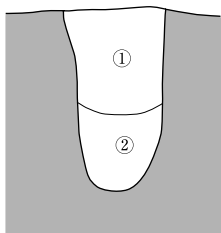
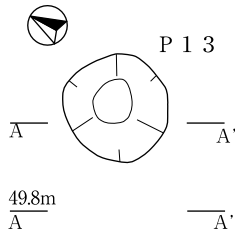
- ① 黒色土(7.5YR2/1)
- ② 黒褐色土(7.5YR2/2)やや粘質



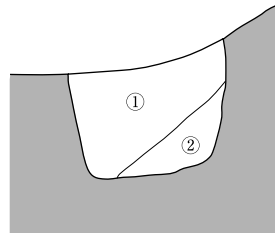
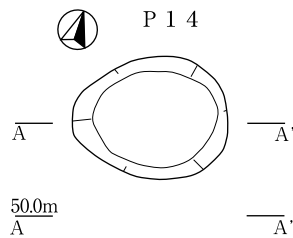
- ① 黒色土(7.5YR2/1)



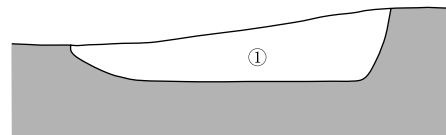
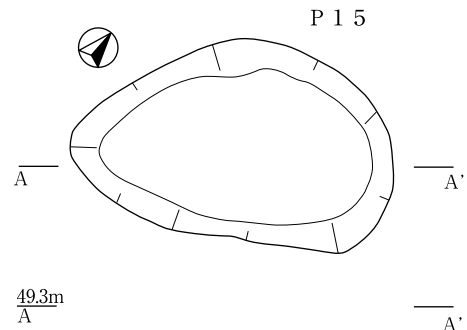
- ① 黒色土(7.5YR2/1)



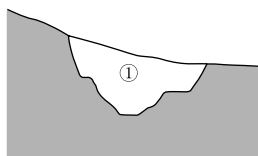
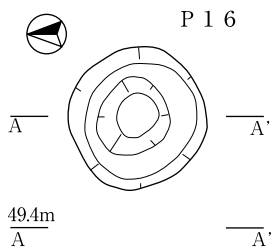
- ① 黒褐色土(7.5YR3/3)やや粘質
- ② 黒褐色粘質土(7.5YR2/2)



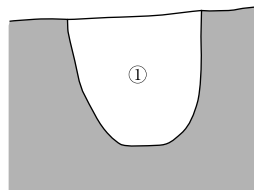
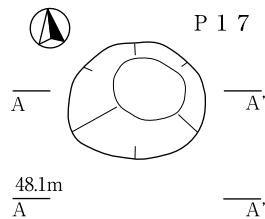
- ① 黒褐色土(7.5YR3/2)やや粘質
- ② 暗褐色粘質土(7.5YR3/4)



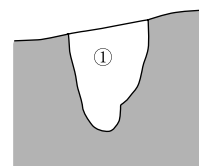
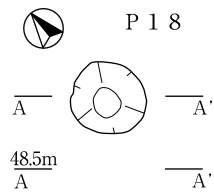
- ① 黒褐色土(7.5YR3/2)



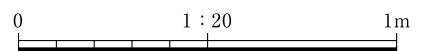
- ① 黒色土(7.5YR2/1)やや粘質



- ① 黒褐色土(7.5YR3/2)やや粘質

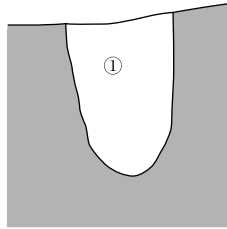
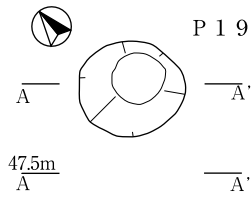


- ① 黒褐色土(7.5YR3/2)やや粘質

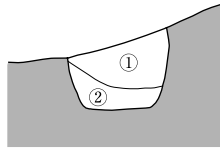
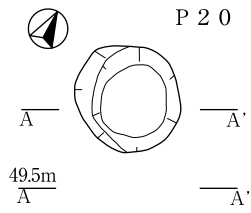


第41図 ピット(2)

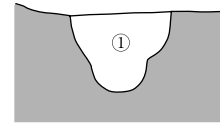
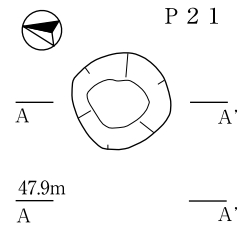
第3章 発掘調査の成果



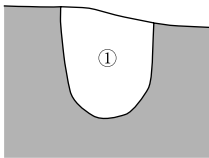
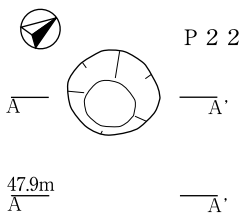
① 黒褐色土(7.5YR3/2)



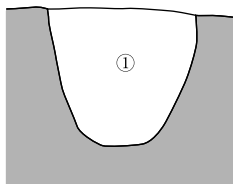
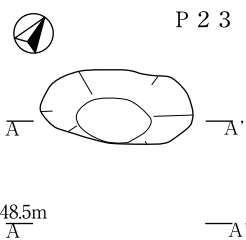
① 黒色土(7.5YR2/1) ローム塊少混
② 黒褐色土(7.5YR2/2) やや粘質 ローム塊混



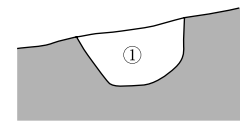
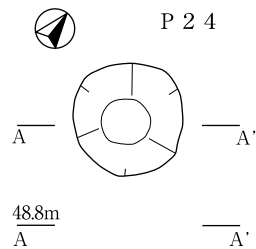
① 黒褐色土(7.5YR2/2) やや粘質



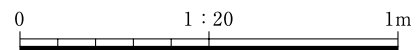
① 黒色土(7.5YR2/1) やや粘質



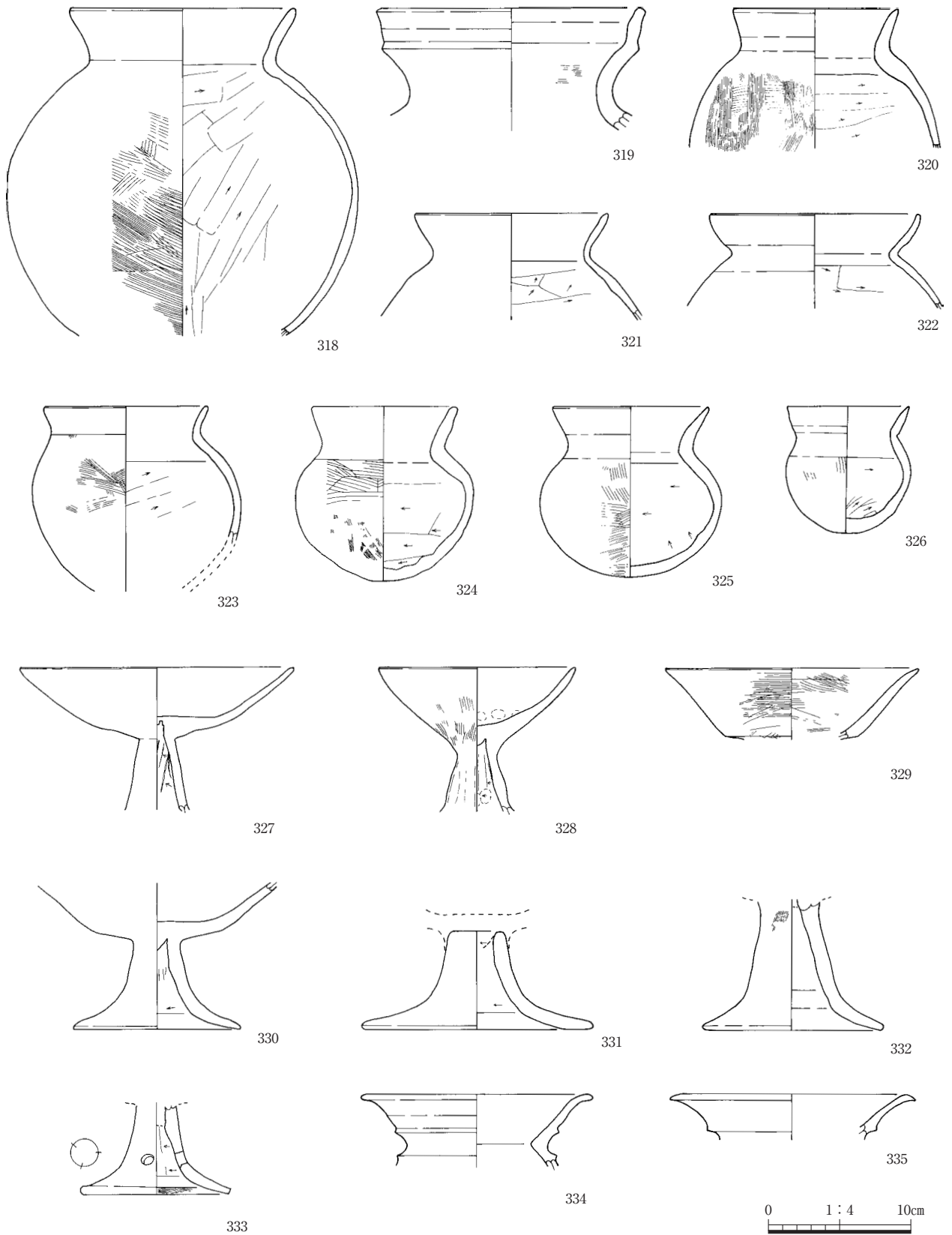
① 黒褐色土(7.5YR2/2) やや粘質



① 黒褐色土(7.5YR2/2) ローム塊少混



第42図 ピット(3)



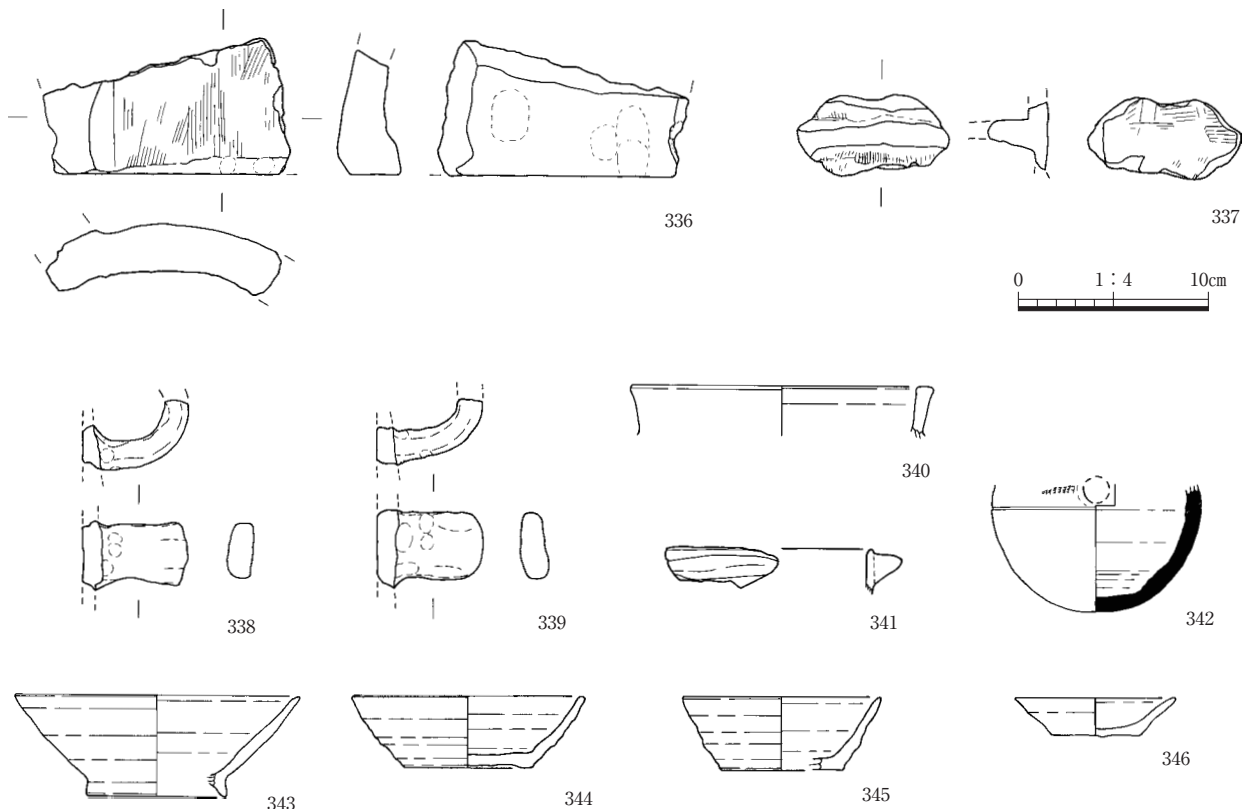
第43図 上層遺構外出土の土器（1）

5. 遺構外の出土遺物（第43、44図）

上層の遺構外からも大量の遺物が出土している。多くは竪穴住居跡と同時期のものであるが、その前後の時期のものが少量含まれている。律令期の遺物を多く出土した坂長第7遺跡が隣接するにもかかわらず、その時期の遺物は皆無である。

318から322は甕、323から326は小型壺、327から333は高杯で、いずれも竪穴住居跡とほぼ同時期のものであろう。鼓形器台334・335や、甑形土器の把手338・339は4世紀代に遡る遺物と考えられる。一方、竈336・337や、須恵器はそう342は6世紀代のもと考えられる。340と341は器形不明で、340には外面にヨコハケがある。これらの遺物は、坂長第8遺跡の本体が古墳時代を通して営まれていることを示しているだろう。さらに、下層の遺物には、弥生時代中・後期の土器が若干あることを考慮すると、本遺跡は縄文晩期から連綿と続くものである可能性がある。

343～346は高台杯と土師皿で12世紀ごろのものである。いずれも調査区東端で出土した。遺跡の中心部分には中世墓群があるのかもしれない。



第44図 上層遺構外出土の土器（2）

第43~44図 遺物観察表

*復元値 △現存値

遺物 番号	挿図 番号	遺構 層位	種別 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高 (cm)	文様・調整	胎 焼	土 成	色調	備考
318	43	Q79 2層	土師器 甕	*15.7	△23.0	外面：頸部以上ナデ 以下ハケメ 内面：口縁部ナデ 頸部以下ケズリ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	外面：黒斑
319	43	表土剥中	土師器 甕	*18.1	△ 8.6	外面：ヨコナデ 内面：頸部以上ヨコナデ 以下ケズリ	密 良好		内外面：橙色	
320	43	西Tr・S80 2層・3層	土師器 甕	*11.6	△ 9.8	外面：頸部以上ナデ 以下ハケメ 内面：口縁部ナデ 頸部以下ケズリ	密 良好		内外面：明黄褐色	
321	43	O80 2層	土師器 甕	13.8	△ 7.5	外面：ナデ 内面：口縁部ヨコナデ 頸部以下ケズリ	密 良好		外面：灰黄褐色 内面：鈍い橙色	外面：黒斑
322	43	P79 3層	土師器 甕	*15.0	△ 6.6	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ 頸部以下ケズリ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	
323	43	S80 3層	土師器 壺	*11.6	△13.0	外面：頸部以上ヨコナデ 以下ハケメ 内面：口縁部ナデ 以下ケズリ後ナデ	密 良好		外面：鈍い橙色～褐灰色 内面：褐灰色	
324	43	西Tr 3層	土師器 壺	* 9.8	12.3	外面：頸部以上ヨコナデ 以下ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ 以下ケズリ	密 良好		外面：明黄褐色 内面：黒褐色	
325	43	O80 2層	土師器 壺	*11.0	△12.0	外面：頸部以上ヨコナデ 以下ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ 頸部以下ケズリ	密 やや軟質		内外面：鈍い黄褐色	外面：黒斑
326	43	P78 3層	土師器 壺	8.6	9.0	外面：頸部以上ヨコナデ 以下ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ 以下ケズリ後ナデ、ケズリ	密 やや良好		内外面：明赤褐色	
327	43	S82 2層	土師器 高杯	*19.4	△10.1	内外面：調整不明 脚内部 ケズリ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	
328	43	西Tr 3層	土師器 高杯	*14.0	△10.2	外面：口縁部ヨコナデ 以下ハケメ 脚ケズリ後ナデ 内面：口縁部ナデ、ナデ 脚：ケズリ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	
329	43	O78 2層	土師器 高杯	*17.9	△ 5.0	内外面：ハケメ後ナデ	密 良好		内外面：橙色	
330	43	P78 3層	土師器 高杯	11.8	△10.3	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ナデ 脚ケズリ、ナデ	密 良好		内外面：橙色	
331	43	S81 3層	土師器 高杯	*16.4	△ 6.9	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ケズリ、ナデ	密 良好		外面：鈍い黄褐色 内面：黒色	
332	43	O78 2層	土師器 高杯	*12.3	△ 9.1	外面：ナデ、ハケメ後ナデ 内面：ヨコナデ	密 良好		内外面：鈍い橙色	
333	43	P78 2層	土師器 高杯	10.3	△ 6.3	外面：ナデ 内面：ケズリ、ハケメ	密 良好		内外面：橙色	穿孔3箇所
334	43	O78 3層	土師器 鼓形器台	*16.4	△ 5.1	内外面：不明	密 やや軟質		内外面：橙色	
335	43	O78 3層	土師器 鼓形器台	*17.4	△ 3.2	内外面：不明	密 やや軟質		内外面：橙色	
336	44	P78 2層	土師器 甕	長さ：7.1	幅：12.4 高さ：3.1	外面：ハケメ 内面：ナデ	密 良好		内外面：鈍い橙色	
337	44	P78 2層	土師器 甕	長さ：4.3	幅：8.0 高さ：△3.1	外面：ハケメ 内面：剥落	密 良好		外面：鈍い黄褐色 内面：褐灰色	
338	44	P78 2層	土師器 甕形土器把手	長さ：5.6	幅：3.7 高さ：1.3	ナデ	密 良好		鈍い橙色	
339	44	東Tr 3層	土師器 甕形土器把手	長さ：5.6	幅：4.2 高さ：1.4	ナデ	密 良好		鈍い橙色	
340	44	Q79 2層	土師器 不明	*15.8	△ 2.6	外面：ヨコハケ 内面：ヨコナデ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色～灰黄褐色	
341	44	O80 2層	土師器 不明		△ 2.4	内外面：ナデ	密 良好		内外面：橙色	
342	44	O80 2層	須恵器 はそう		△ 6.7	外面：ナデ、簾状文、凹線 内面：回転ナデ	密 良好		内外面：灰色	
343	44	P79 3層	土師器 高台杯	*15.0 * 7.4	5.3	内外面：ヨコナデ	密 良好		内外面：鈍い黄褐色	口縁部：スス付着 灯明皿
344	44	東壁 2層	土師器 土師皿	*12.4 6.8	3.8	内面：回転ナデ 底部不整方向ナデ 外面：回転ナデ 回転糸切り	密 良好		内外面：鈍い橙色	
345	44	東壁 2層	土師器 土師皿	*10.5 * 6.4	3.9	内面：回転ナデ 底部不整方向ナデ 外面：回転ナデ 回転糸切り	密 良好		内外面：鈍い橙色	
346	44	O77 2層	土師器 土師皿	8.4 4.6	2.1	内外面：回転ナデ 底部へラ切り	密 良好		内外面：橙色	

第4章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

坂長第8遺跡の古墳時代中期とされる竪穴住居を対象とした分析調査を実施する。住居から出土した炭化物に関しては放射性炭素年代測定を実施する。また、竪穴住居跡床面から出土した土器内土壌について、リン・カルシウム分析を行い、胞衣埋納の有無に関する情報を得る。

第1節 坂長第8遺跡の放射性炭素年代

試料

年代測定用試料は、竪穴住居SI1内のSK2埋土から検出された炭化物1点である。

方法

分析は、AMS法で実施する。試料表面の汚れをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。塩酸や水酸化ナトリウムなどを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

結果

同位体効果による補正を行った測定結果は1770±30BPである。暦年較正は、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5,730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。測定誤差が 2σ の場合、

第5表 放射性炭素年代測定結果

試料名	性状	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (%)	測定年代 BP	Code No.
年代測定用試料	炭化材	1,770±30	-25.94±0.54	1,780±30	IAAA-62342

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

第6表 暦年較正結果

番号	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)												相対比	Code No.	
		σ	cal	AD	232	—	cal	AD	263	cal	BP	1,718	—			1,687
年代測定 用試料	1,766±30		cal	AD	277	—	cal	AD	330	cal	BP	1,673	—	1,620	0.617	IAAA-62342
			cal	AD	139	—	cal	AD	195	cal	BP	1,811	—	1,755	0.084	
		cal	AD	209	—	cal	AD	350	cal	BP	1,741	—	1,600	0.902		
		cal	AD	369	—	cal	AD	378	cal	BP	1,581	—	1,572	0.014		

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、較正曲線やプログラムが改定された場合の再検討がしやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である
- 5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

calAD139-378である。竪穴住居跡から出土した炭化材は、補正年代値で1770±30BP、暦年較正年代でcalAD139-378年を示した。炭化材の由来が不明であるが、木材の場合、心材に近い程、年代値が古くなることを考慮すると、今回の年代値は、出土遺物に基づく竪穴住居跡の時代と同調的といえる。

第2節 坂長第8遺跡出土埋甕内部のリン・カルシウム分析

試料

リン・カルシウム分析試料は、土器内土壌(サンプルB)と対象試料として採取された土壌試料(サンプルA)の2点である。

方法

リン酸は硝酸・過塩素酸分解—バナドモリブデン酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分解—原子吸光光度法、腐植はチューリン法で実施する(土壌養分測定法委員会、1981;土壌標準分析・測定法委員会、1986)。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mmの篩を通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105℃、5時間)により測定する。風乾細土試料の一部を粉砕し、0.5mm ϕ のふるいを全通させる(微粉砕試料)。

風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P₂O₅)濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P₂O₅mg/g)とカルシウム含量(CaOmg/g)を求める。

結果

結果を表2に示す。2点とも値は類似し、リン酸は1.7mg/g前後、カルシウムは2.1mg/g程度である。

リン酸およびカルシウムは、動物遺体に多く含まれる無機元素であるため、遺構覆土に多量に含ま

第7表 リン・カルシウム分析結果

試料名	土性	土色		P ₂ O ₅ (mg/g)	CaO (mg/g)
リン・カルシウム試料A	LiC	10YR1.7/1	黒	1.62	2.09
リン・カルシウム試料B	LiC	10YR2/1	黒	1.84	2.10

土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。
 土性：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性による。
 LiC…軽壤土（粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%）

れていれば遺体埋納の指標となる。このうち、カルシウムは水に溶けやすいため流亡しやすい性質をもつが、リン酸は水にほとんど溶けないため土壤中での移動が少なく、遺体埋納の指標になりやすい。しかしながら、リン酸は自然状態の土壤中にも含まれ、土質によってその含量も異なる。そのため、遺体埋納を推定するためには、土壤が自然状態で保持しているリン酸量を知ることが重要である。自然状態において土壤中に含まれるリン酸量は、腐植が多いほど高い。これは腐植中に植物由来のリン酸が含まれているからである。また粒径組成が細かいほど成分が流亡しにくいので、この場合もリン酸量が高い。

これまで当社が行ってきたリン酸分析の結果をみると、今回のような非火山灰性の土壤の場合、1 mg/g前後が平均値なので、今回の値は若干高めである。しかしながら、土色が黒く腐植の蓄積がみられることや、粒径が細かいことから、今回のような土壤は自然状態においてもリン酸を保持しやすく、やや高めの値になると思われる。今回の分析試料のリン酸値は自然状態の範囲内と見なすことができる。また、対象試料と土器内試料とで含量値に有意な差異が認められなかった。これらのことから、今回の竪穴住居跡床面で検出された土器内の胞衣埋納の可能性については分析結果から積極的に指示することはできない。

【引用文献】

土壤標準分析・測定法委員会編、1986、土壤標準分析・測定法。博友社、354p.
 土壤養分測定法委員会編、1981、土壤養分分析法。養賢堂、440p
 農林省農林水産技術会議事務局監修、1967、新版標準土色帖。
 ペドロジスト懇談会編、1984、土壤調査ハンドブック。博友社、156p.

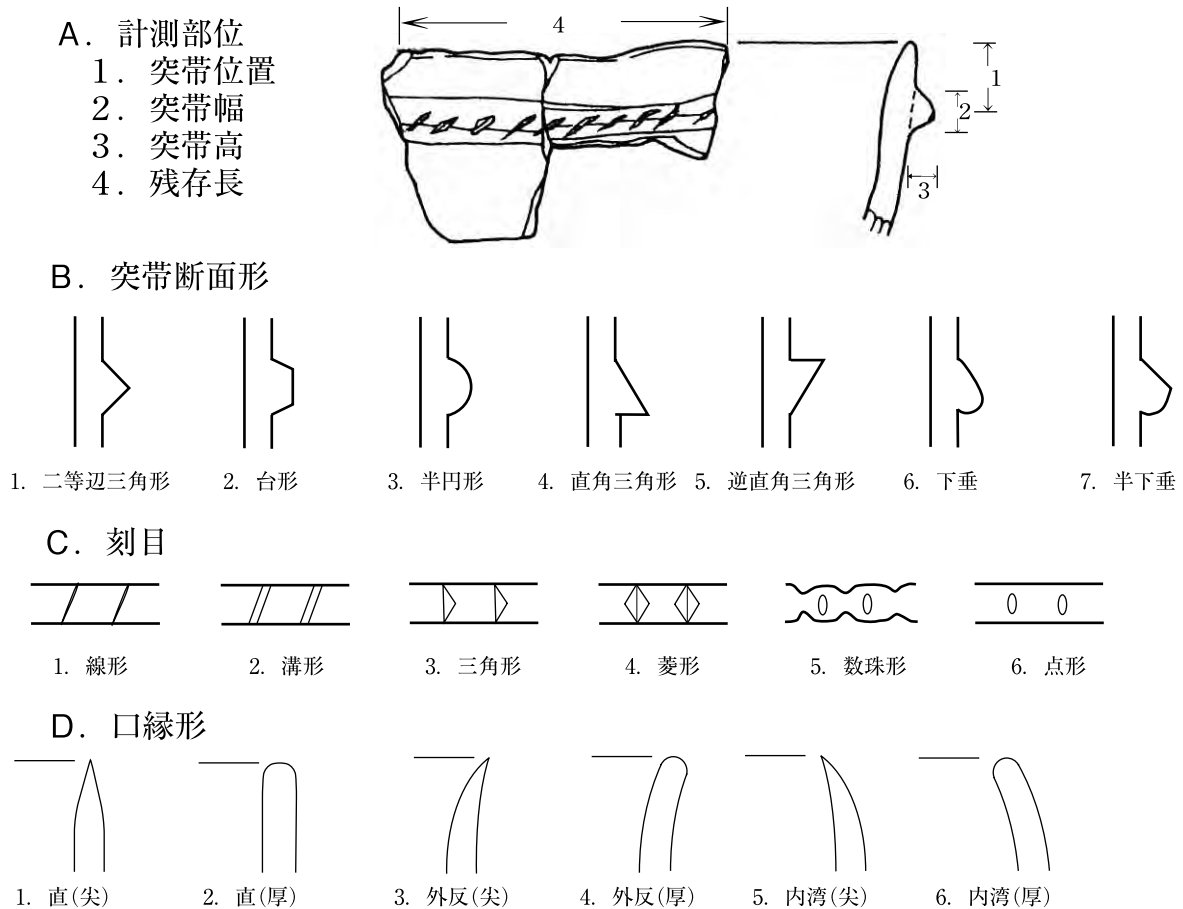
第5章 考 察

坂長第8遺跡出土の突帯文土器について

坂長第8遺跡から出土した突帯文土器の破片は331点を数える。第3章で述べたとおり、本遺跡の突帯文土器には、様々な型式が含まれる。さらに、弥生前期の土器が一定量出土していることを考えると、本遺跡は、当地域における稲作出現期の様相を解明する上で重要な遺跡であると考えられる。そこで、本章では、その基礎的な作業として、突帯文土器について少し詳しく検討する。本遺跡下層資料はわずかに転磨を受けた小さな破片が多いが、突帯文土器は細片であっても抽出が容易であり、その細部の特徴が変異に富むことを活かして、属性を中心に分析を行う。

計測部位と属性分類の基準は、第45図のとおりである。この中で、突帯位置については口縁端部と突帯中央間の距離を測る。残存長は、破片の残り方が点数に与える雑音を排除し、実際の量を知るために試みに計測した。

分析結果を第8表に示す。土器の分類は、第3章と同じで、突帯に刻目があるものを1類、無刻目のものを2類とし、口縁からの突帯の離れ方で細分する。a類は十分離れるもの、b類は口縁の直下に位置するもの、c類は口縁と一体化するものである。1d類のみは特殊で、突帯と口縁の両方に刻



第45図 突帯文土器の分類基準

目をもつものとする。口縁部を欠く突帯付近の破片はo類とし、その他の中に含めるが、a類は数が少なく、c類ではありえないので、実際にはb類である可能性が高い。以下の記述は1類と2類を対比させる形で進める。

総点数331点のうち、1類は54%、2類は46%で、1類が若干多い。これは残存長を基準にしても同様である。1類では、1c類、1b類の順に多く、両者が主体であるのに対し、2類では2b類が60%以上を占める。点数と残存長の間には顕著な差は認められないので、点数を基準に分析することに問題はないであろう。なお、やや乱暴ではあるが、復元可能な資料から、直径を30cmとして計算すると、最も多い2b類でさえ3.4個体分、全体で11.1個体分の破片しかないことになる。明らかに同一個体という破片はかなり少ないので、それぞれの破片を各個体を代表するものとして扱うことに問題はないであろうが、この計算上の個体数との大きな隔たりには留意する必要があるだろう。

突帯位置については、どの細分類についても、1類よりは2類のほうが口縁と離す傾向が認められる。突帯の幅については、1類と2類の間に大きな差が認められない一方で、高さについては、2類のほうが明らかに大きい。高さとの比を取るとその差は歴然で、口縁との距離を合わせれば、2類の突帯のほうがより突出した印象をもたらすであろう。なお、2類中で2c類だけは、1類と同様の幅で低い突帯をもつのは注目に値する。また、1類と2類のいずれにおいても、突帯が口縁に近づくほど突出度が小さくなる傾向が読み取れる。

突帯の断面形で主体となるのは、1類では半円形と二等辺三角形の2つであるのに対し、2類では二等辺三角形が半数以上を占める。これは、突帯の突出度と関係が深いと考えられる。その他の形態の割合はほぼ同じなので、2類ではより規格化が進んでいることになろう。2b類と2c類を取り上げると、2b類のほうが二等辺三角形の割合が大きい。直角三角形と逆直角三角形を加えると、その差はさらに大きくなる。したがって、2b類のほうがより角張った規格的なものであり、対して2c類のほうが1類により近いという評価ができよう。

刻目の形態については、溝形と線形を中心にその他のものも一定量存在し、比較的変異に富むことが分かる。土器分類との関係では、1c類に点形や三角形が多いのが注目される。この2つは技術的には簡略なものと考えられ、刻目の消失の前段階である可能性がある。1c類における突帯そのものの簡略化や、1c類と2c類の突帯形態の類似性を考慮すると、1c類と2c類をつなぐものであるという理解ができるかもしれない。なお、ここには示さないが、突帯断面形と刻目の形態に顕著な相関関係はないようである。

口縁部の断面形については、全体としては1類と2類の特徴は共通している。どちらも約6割が直口縁、4割が外反口縁で、内湾するものはほとんどない。細分類ごとに見ると、2b類では外反口縁で鋭く尖らせるものの比率が高く、突帯の突出と合わせれば、よりシャープな印象をもたらすであろう。さらに、ここでも1c類と2c類の内容構成の類似性が指摘できる。

器面の調整に関しては、転磨を受けた資料が多いため、観察できるのは1類・2類とも約70点ずつである。1類では条痕とナデを施すものがほぼ等量であるのに対し、2類では8割がナデで仕上げられる。しかし、2類にも内面に条痕を施すものや条痕後にナデを加える例が一定量含まれるので、特に外面において条痕を丁寧にナデ消しているものがある可能性は残されている。1b類と1c類、2b類と2c類はそれぞれ割合が似通っており、この属性においては1c類と2c類の類似性は弱い。

以上の結果から、(1d類?) → 1a類 → 1b類 → 1c類 → 2c類 → 2b類 → (2a類?) という組列が想定され

第8表 突帯文土器の属性

		1a類	1b類	1c類	1d類	その他	1類計	2a類	2b類	2c類	その他	2類計
点数		9	66	75	12	17	179	3	92	37	20	152
点数%		5.0	36.9	41.9	6.7	9.5	100.0	2.0	60.5	24.3	13.2	100.0
残存長計 (cm)		40.4	226.6	264.7	50.0		581.7	13.9	324.5	123.4		461.8
残存長%		6.9	40.0	45.5	8.6		100.0	3.0	70.3	26.7		100.0
突帯位置 (mm)	平均	18.8	9.6	6.4	10.1			22.4	11.2	7.9		
	最小	14.9	5.5	2.5	7.8			20.0	6.1	4.1		
	最大	27.5	14.4	11.7	13.7			27.1	20.2	12.3		
突帯幅 (mm)	平均	10.3	9.0	9.8	9.5		9.4	11.7	8.9	10.7		9.6
	最小	4.7	5.2	6.1	7.0			9.4	4.5	6.9		
	最大	12.9	12.2	16.1	12.8			14.4	14.6	18.0		
突帯高 (mm)	平均	5.1	4.0	4.0	4.5		4.1	6.3	4.7	4.6		4.8
	最小	1.9	1.0	1.5	3.3			5.2	1.9	1.8		
	最大	6.8	7.9	7.3	6.7			7.0	7.7	7.7		
突帯高/突帯幅		0.50	0.44	0.42	0.48		0.43	0.57	0.53	0.44		0.51
突帯断面形	1 二等辺三角形	5	22	26	6	4	63 (35.2%)	1	48	16	12	77 (50.7%)
	2 台形		2				2 (0.1%)		2	1		3 (2.0%)
	3 半円形	3	26	31	3	11	74 (41.3%)		16	9	5	30 (19.7%)
	4 直角三角形		4	3	1		7 (3.9%)		4	2		6 (3.9%)
	5 逆直角三角形	1	6	6	1		14 (7.8%)	2	11		2	15 (9.9%)
	6 下垂		2	5	1	1	9 (5.0%)		7	3		10 (6.6%)
	7 半下垂		4	4		1	10 (5.6%)		4	6	1	11 (7.2%)
刻目	1 線形	4	22	18		2	46 (25.7%)					
	2 溝形	4	29	21	2	8	64 (35.8%)					
	3 三角形		5	10	4	5	24 (13.4%)					
	4 菱形	1	2	3	3	1	10 (5.6%)					
	5 数珠形		3	3	1	1	8 (4.5%)					
	6 点形		5	20	2		27 (15.1%)					
口縁形	1 直 (尖)	4	17	21	1		43 (26.4%)		23	12	1	36 (26.7%)
	2 直 (厚)	2	14	35	3		54 (33.1%)	1	23	16		40 (29.6%)
	3 外反 (尖)	2	16	9	2		29 (17.8%)	1	31	4		36 (26.7%)
	4 外反 (厚)	1	17	8	6		32 (19.6%)		13	3	1	17 (12.6%)
	5 内湾 (尖)		2	2			4 (2.5%)		1	1		2 (0.1%)
	6 内湾 (厚)						1 (0.1%)	1	1	1	1	4 (0.3%)
調整 (外面)	条痕	3	17	13			33 (45.2%)		4	2		6 (7.9%)
	ナデ	1	11	10	4	5	31 (42.5%)	1	40	16	8	65 (85.5%)
	条痕後ナデ		3	5		1	9 (12.3%)		2	2	1	5 (6.6%)
調整 (内面)	条痕		14	16	1	1	32 (41.0%)		9	5		14 (18.4%)
	ナデ	4	17	7	2	6	36 (46.2%)	1	35	15	6	57 (75.0%)
	条痕後ナデ		3	4	1	2	10 (12.8%)		1	3	1	5 (6.6%)

る。a類とd類については数量が少ないため不確かである。当然ながら、この組列は層位学の裏付けのないものなので、これまでの研究や出土例との比較検討が必要である。濱田竜彦氏のご教示によれば、本遺跡の突帯文土器には、古市河原田式以前のもの、古市河原田式、古海式、弥生時代前期前半の突帯文系土器が連続的に含まれているという。本遺跡での分類の、1b類の一部が古市河原田式に、1c類の一部が古海式に、2b類の一部が突帯文系土器にあたろう。したがって、おおよその順序は間違っていないと思われる。しかし、この考察では、原位置を遊離した小片をもとに分析を進めたため、器形や調整など捉え切れなかった面が多く、また土器の分類などについては単純化しすぎた嫌いがある。実際の様相はおそらくずっと複雑なはずである。例えば濱田氏によれば、鳥取県西部の古海式では、無刻目突帯の土器が4～6割の比率を占める例があるという。今回の対象資料では、そのような、土器の組み合わせや前後関係などに迫ることは不可能であった。しかし、坂長第8遺跡の本体部分には、良好な資料が遺されている可能性が高く、今後の研究の進展が期待できるところである。

本遺跡の縄文土器および弥生土器を整理検討するにあたっては、濱田竜彦氏と下江健太氏に多大なご教示をいただいた。感謝いたします。

【参考文献】

濱田竜彦 1999 「古市河原田遺跡出土の突帯文土器について」『古市遺跡群1』鳥取県教育文化財団
 濱田竜彦 2008 「中国地方東部の凸帯文土器と地域性」『古代文化』60巻3号

図 版
PLATE



1. 調査地周辺の地形（上が北）



2. 調査地周辺の地形
（西から）

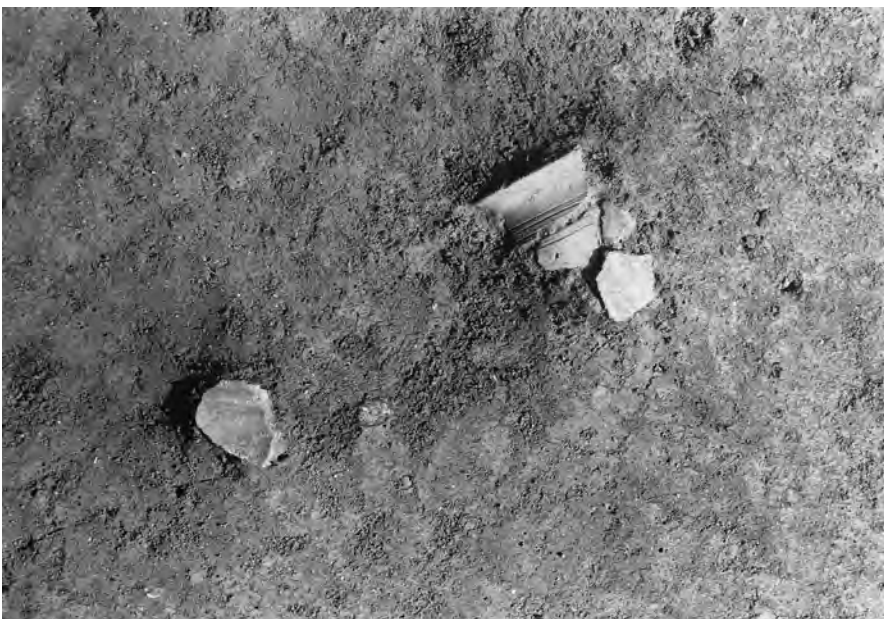
図版 2



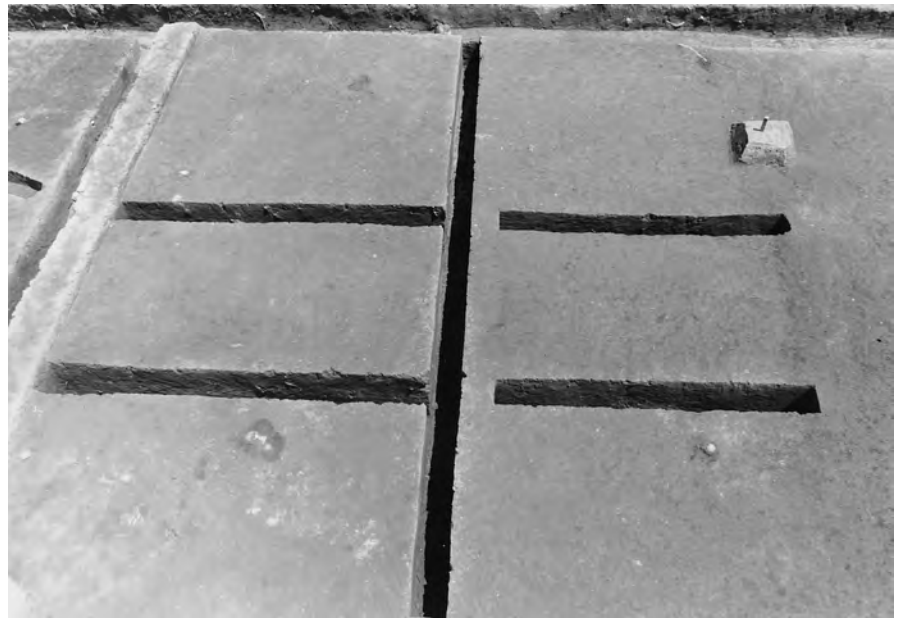
1. 調査前の状況（南から）



2. 調査区完掘状況（北から）



3. 下層弥生土器出土状況（南から）



1. S I 1 検出状況 (西から)



2. S I 1 土層断面 (北から)



3. S I 1 土層断面 (東から)

図版 4



1. S I 1 および S I 3 貼床
(北から)



2. S I 1 貼床および
白色粘土 (東から)

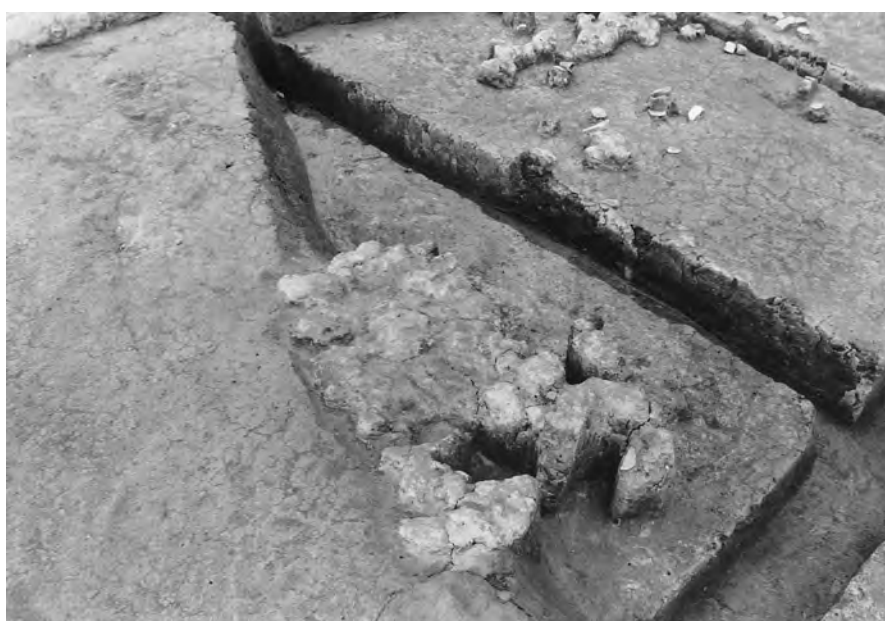


3. S I 1 床面検出状況
(東から)

1. S I 1・S I 2
床面検出状況（南から）



2. S I 1 白色粘土
検出状況（南から）



3. S I 1 白色粘土
断面（南から）





1. S I 1 遺物
出土状況（北西から）



2. S I 1 床面甑形土器
出土状況（東から）



3. S I 1-SK 1 断面
（南から）

1. S I 1—SK 2
検出状況 (南東から)

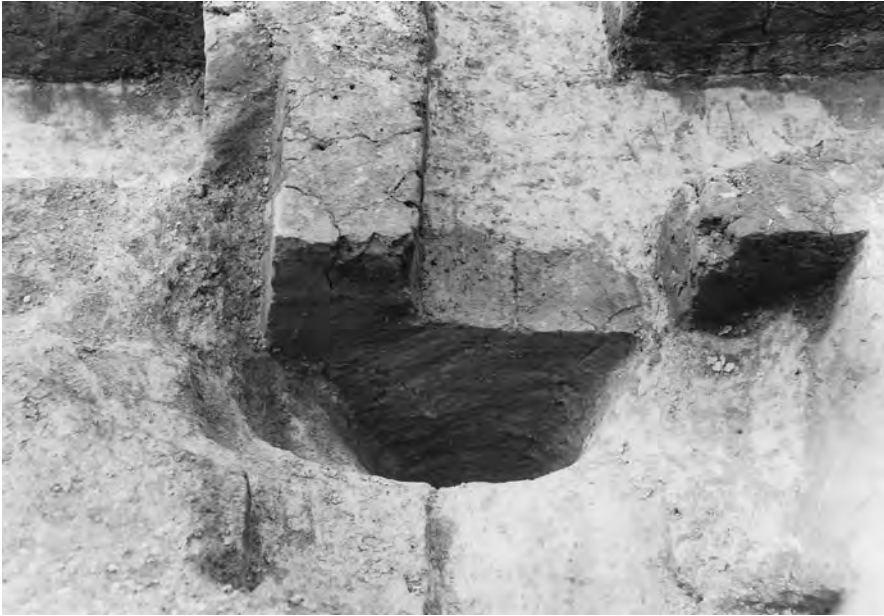


2. S I 1—SK 2 断面
(東から)



3. S I 1—SK 2
底面の土器 (西から)





1. S I 1—P 1 断面
(東から)



2. S I 1—P 1 完掘状況
(東から)



3. S I 1 床面完掘状況
(東から)



1. S I 1 ベッド状遺構
(西から)



2. S I 1 貼床除去後の状況
(東から)



3. S I 1 貼床除去面での
P11 (東から)



1. S I 3床面検出状況
(西から)



2. S I 3—P 1・P 2断面
(北から)



3. S I 3完掘状況(西から)

1. S I 2 および S D 1
検出状況 (西から)



2. S I 2 検出面遺物
出土状況 (西から)



3. S I 2 検出面遺物
出土状況 (西から)





1. S I 2 土層断面 (東から)



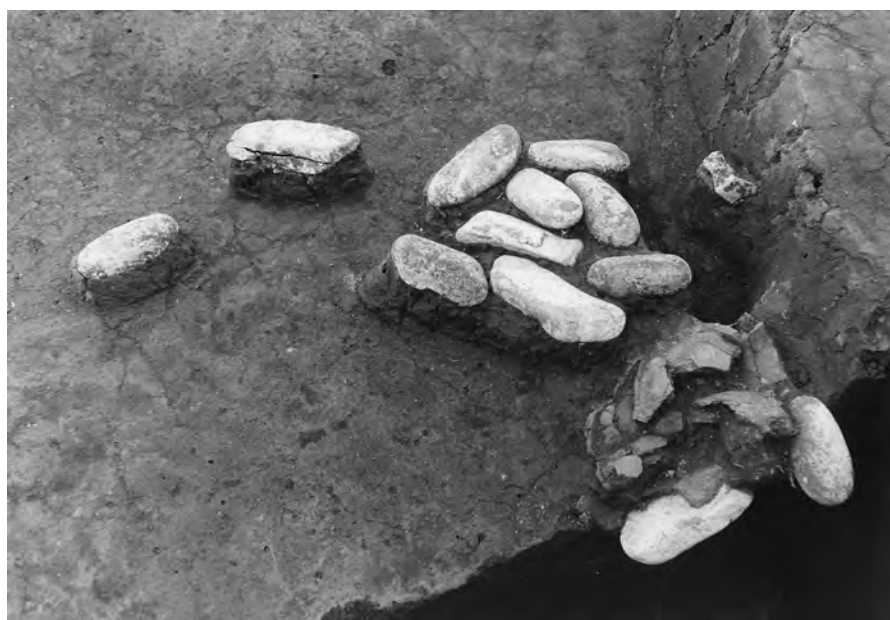
2. S I 2 土層断面 (南から)



3. S I 2 床面検出状況 (南から)



1. S I 2床面遺物
出土状況（東から）



2. S I 2集石出土状況
（東から）

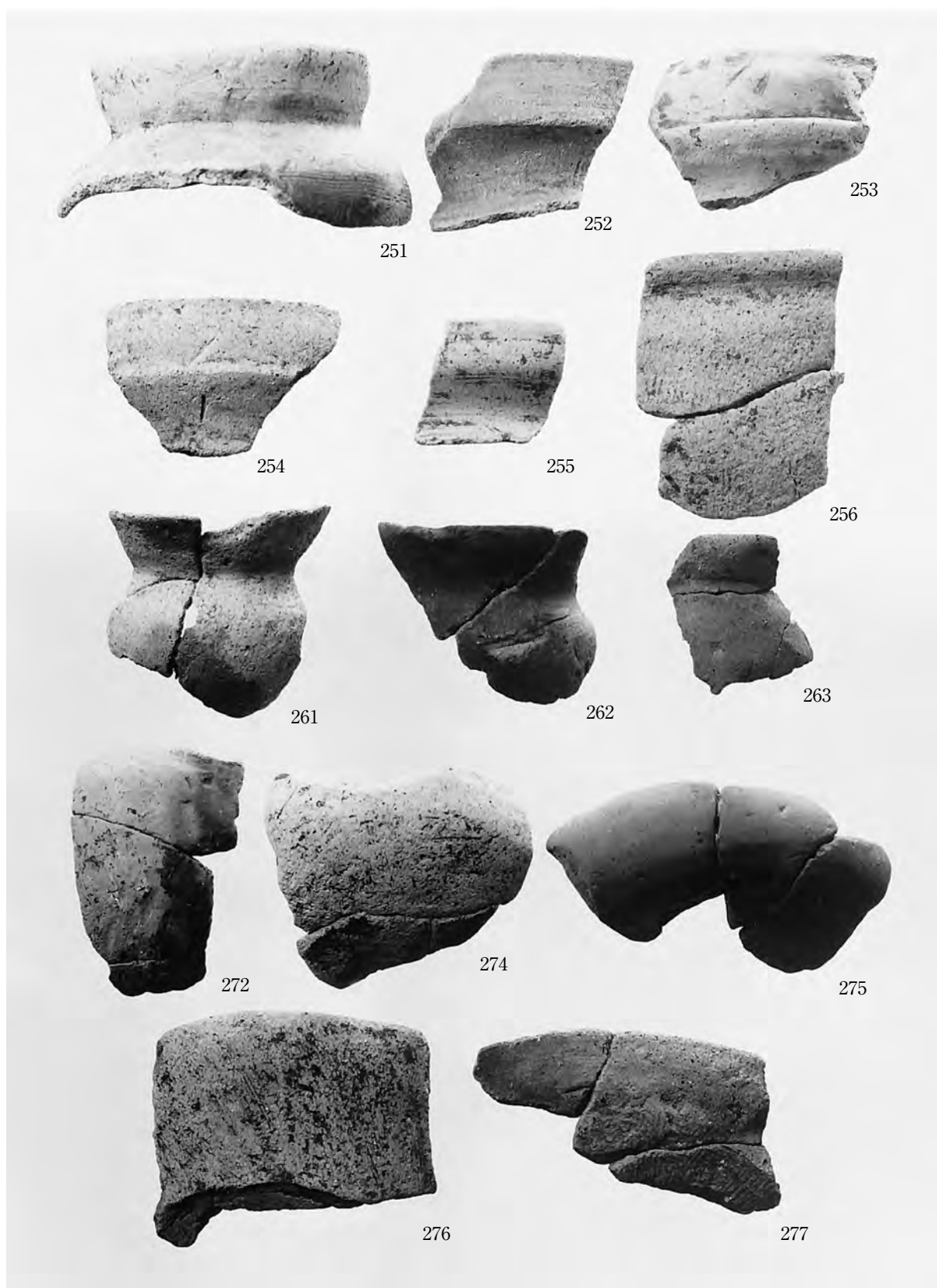


3. S I 2完掘状況（南から）

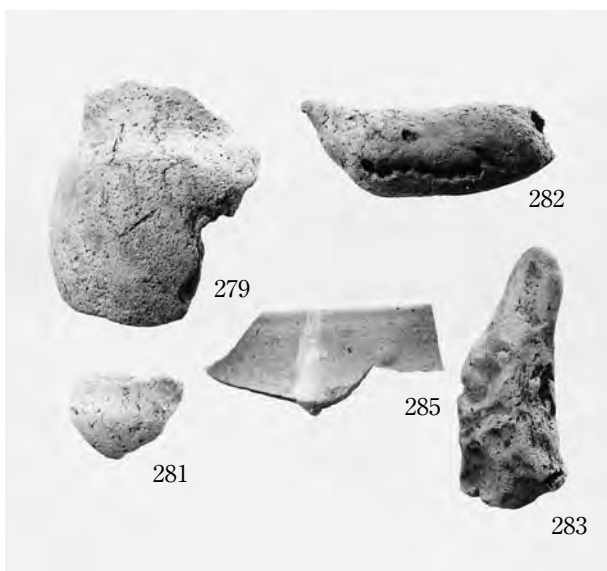


S I 1 出土遺物 (1)

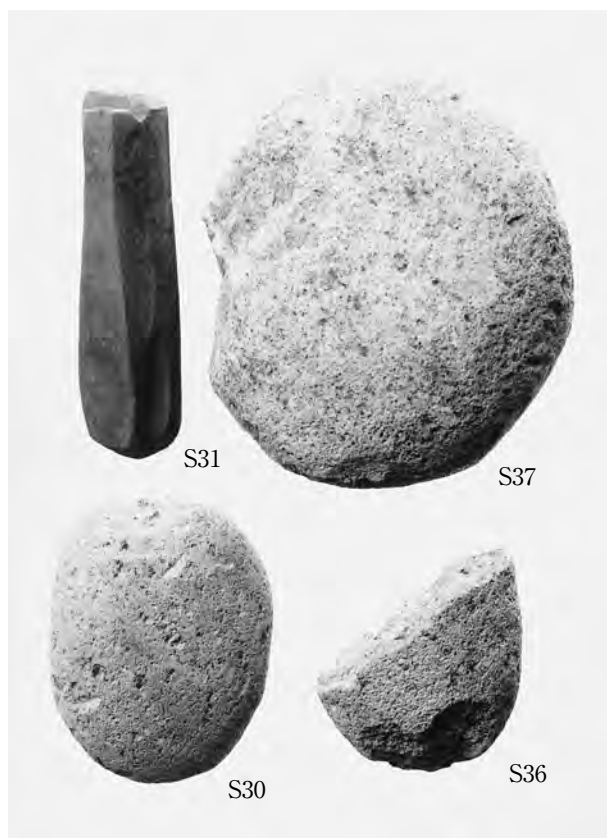




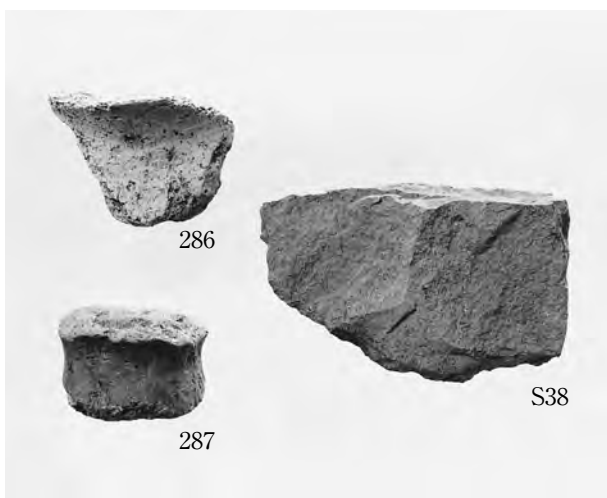
S I 1 出土遺物 (3)



1. S I 1 出土遺物 (4)



2. S I 1 出土遺物 (5)



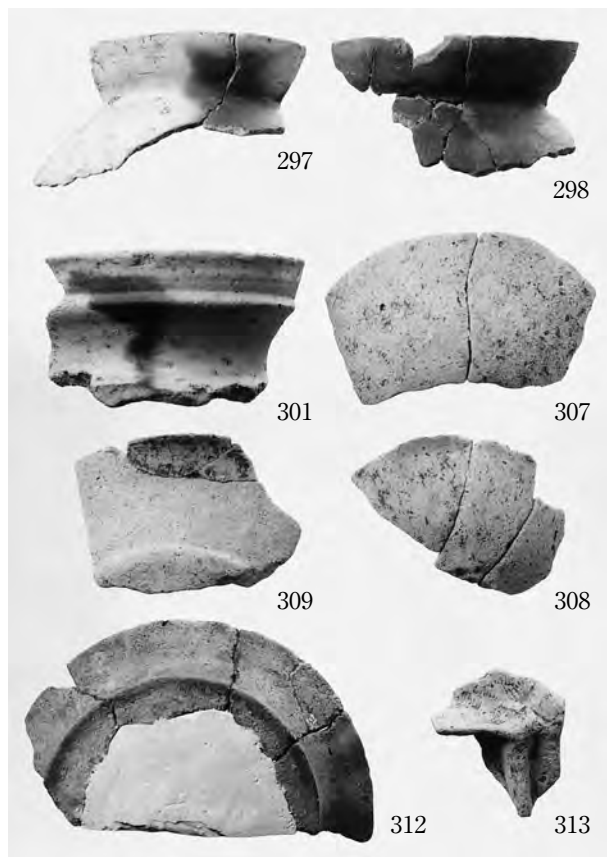
3. S I 3 出土遺物

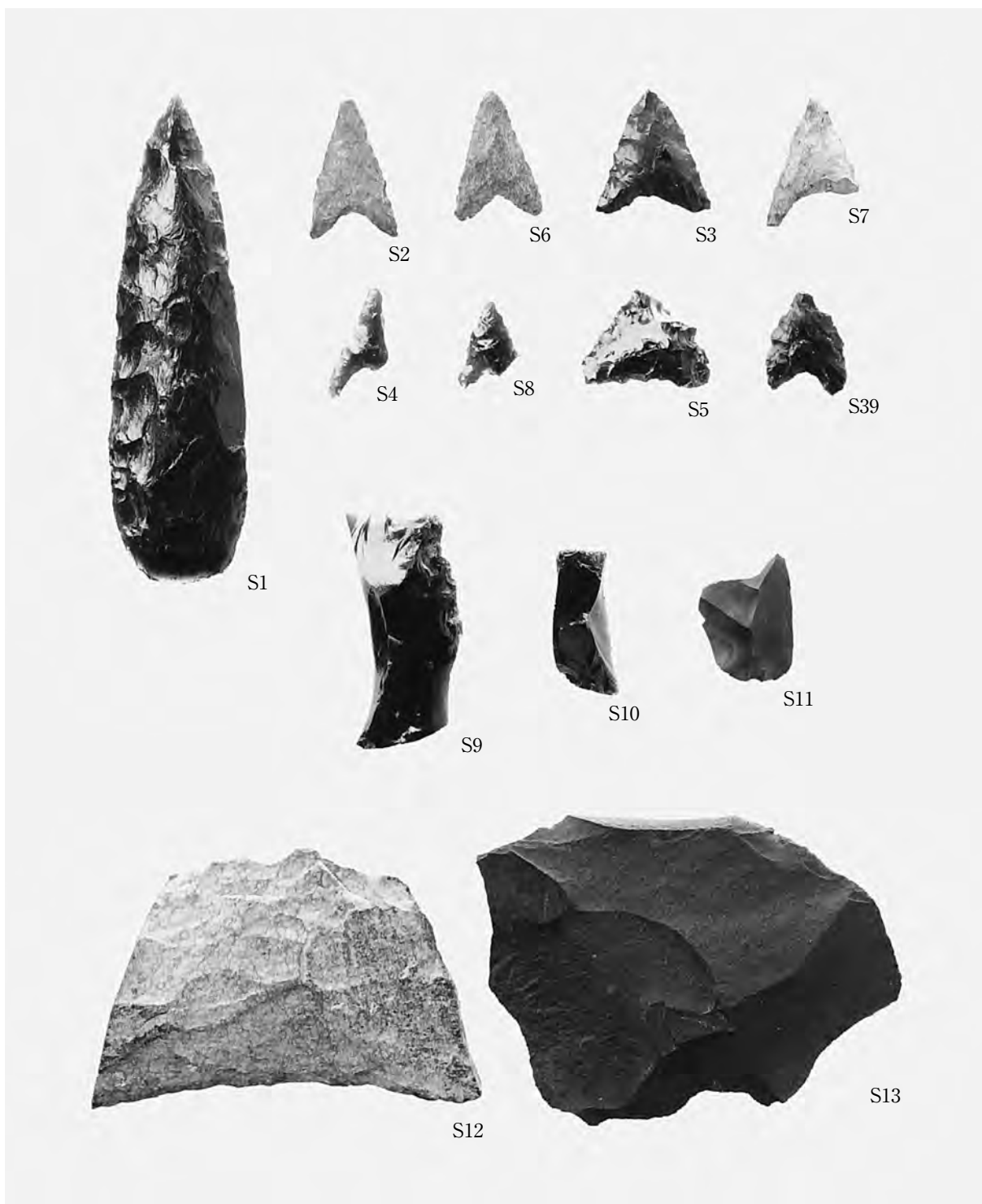


4. S D 1 出土遺物

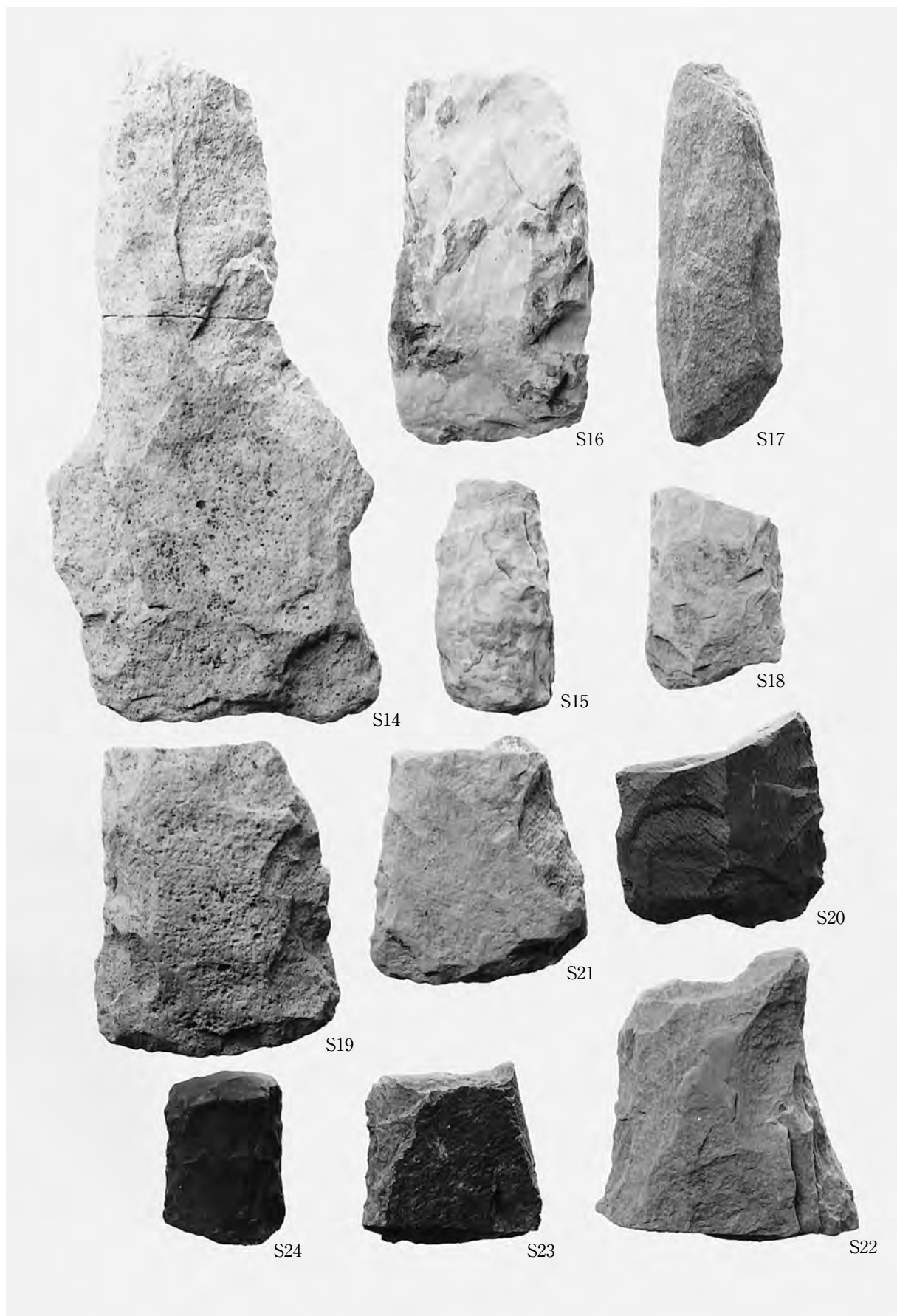


S I 2 出土遺物 (1)

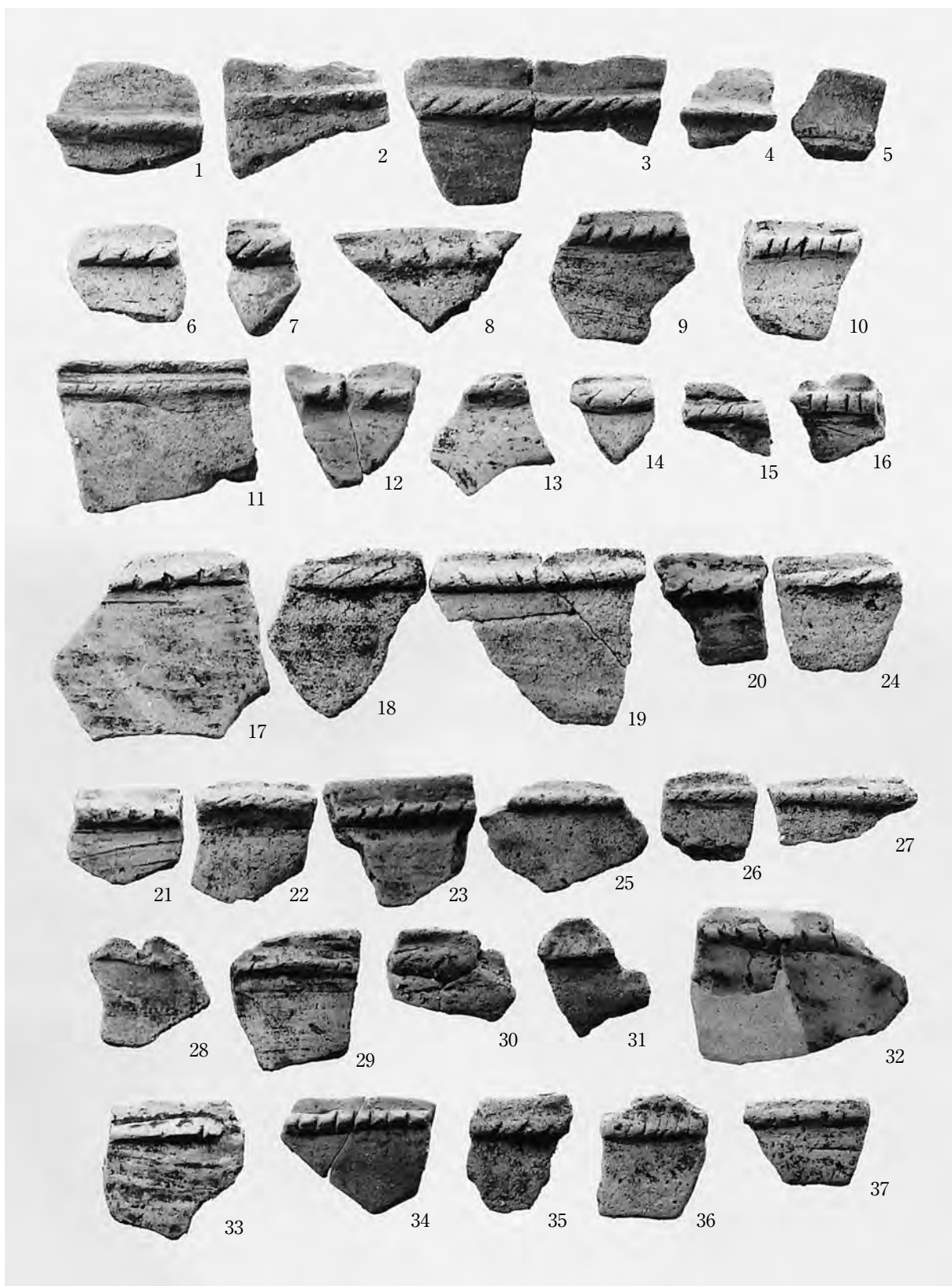




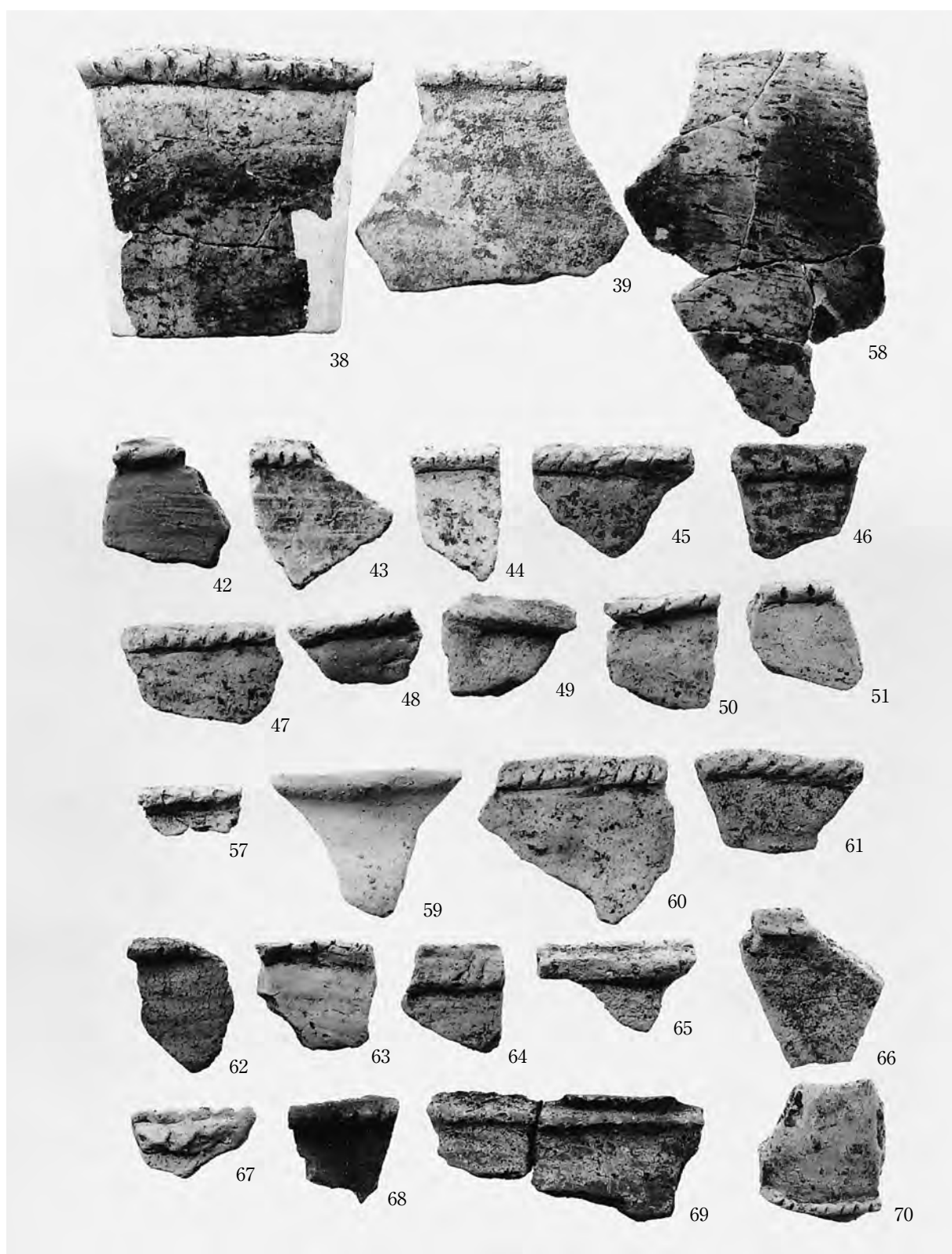
石器 (1)



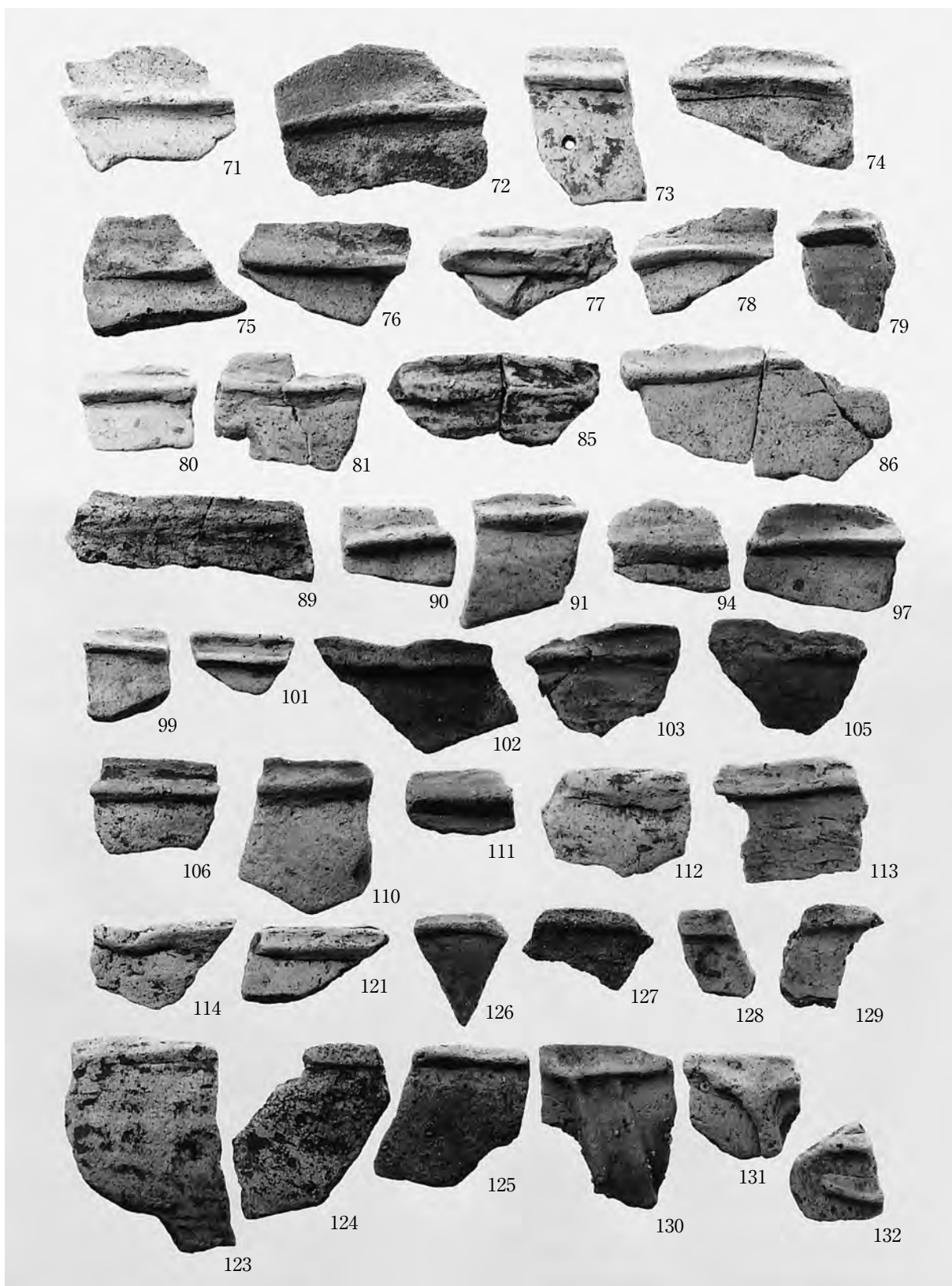
石器 (2)



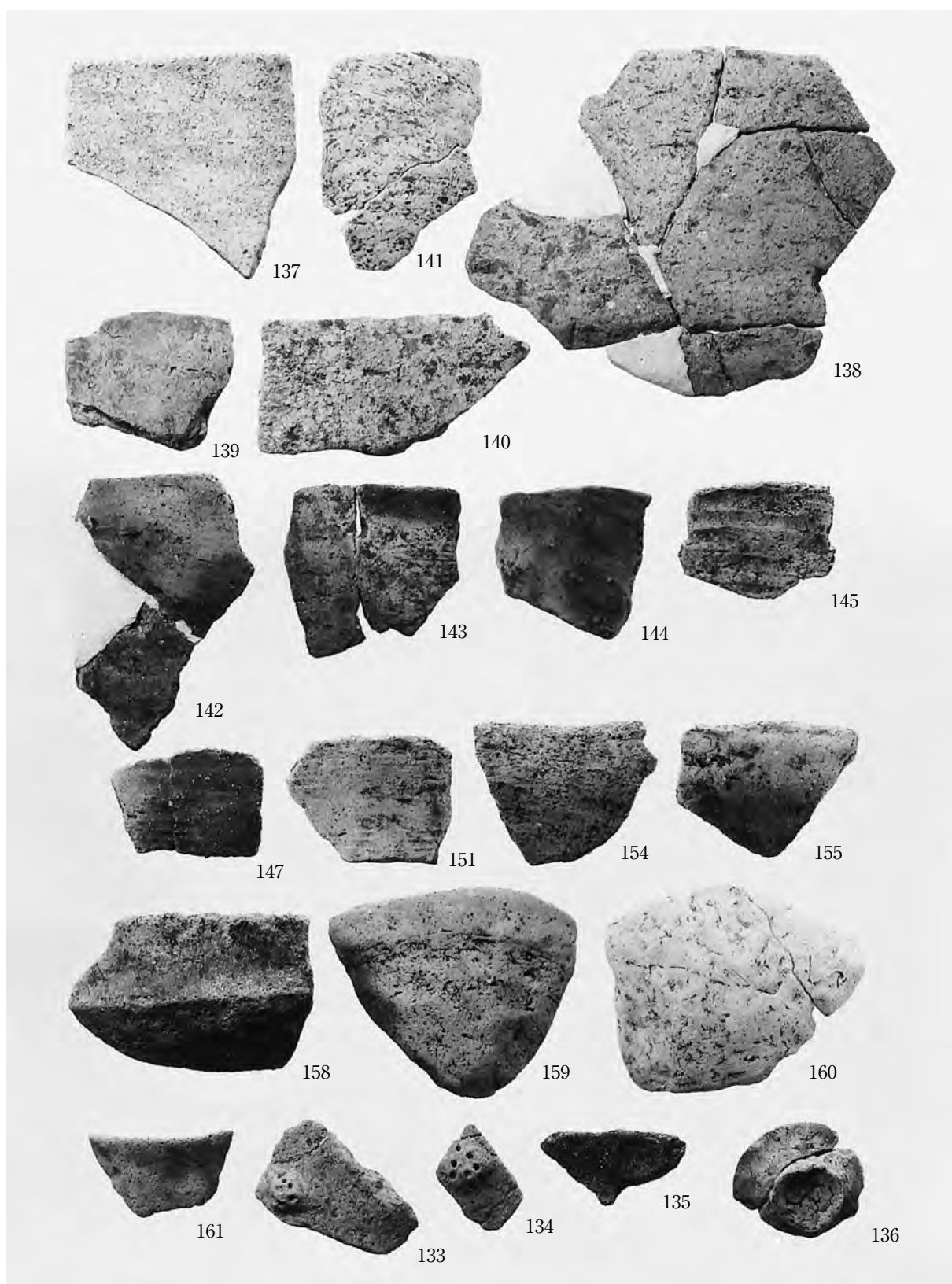
縄文土器（1）



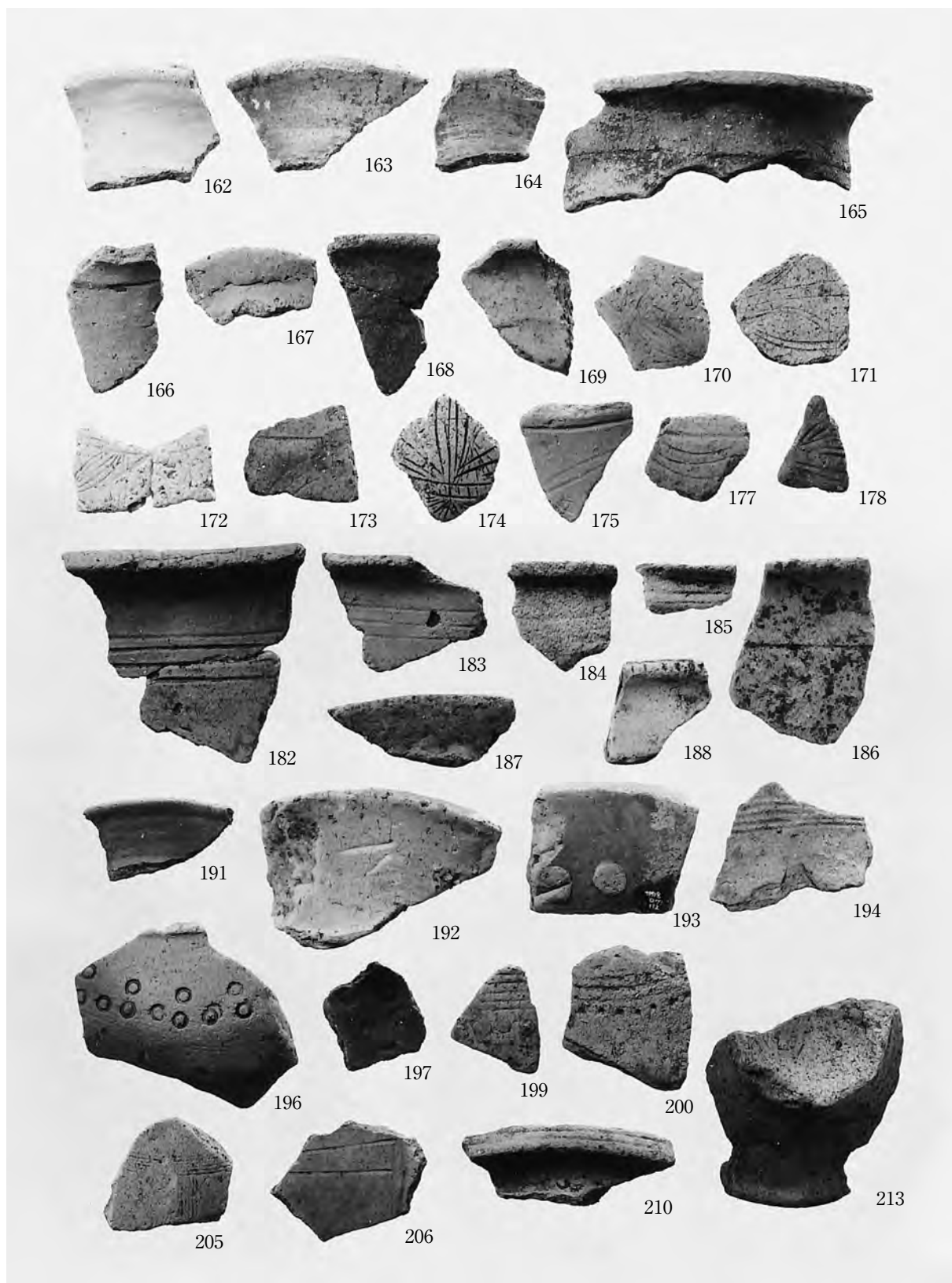
縄文土器 (2)



縄文土器 (3)



縄文土器（4）



弥生土器 (1)



1. 縄文土器 (5)



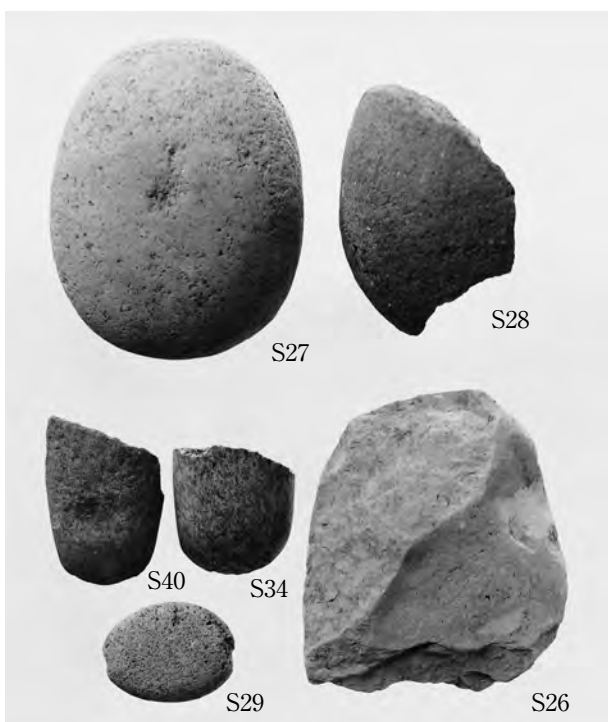
2. 弥生土器 (2)



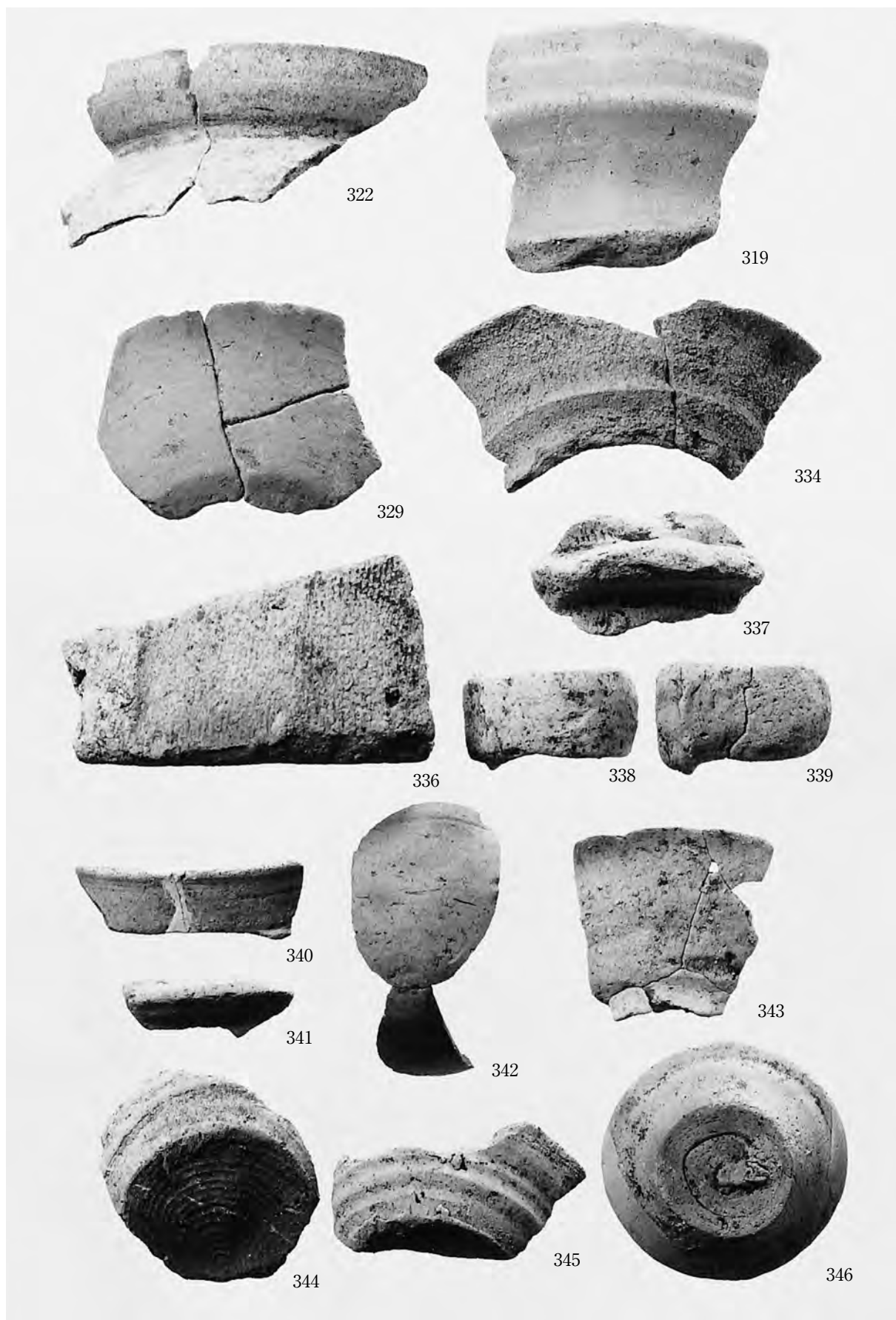
3. 遺構外出土土師器 (1)



4. 遺構外出土土師器 (2)



5. 石器 (3)



古墳時代以降の土器

報告書抄録

ふりがな	さかちようだい8いせき							
書名	坂長第8遺跡							
副書名	一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅳ							
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書							
シリーズ番号	113							
編著者名	高橋 章司							
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団調査室							
所在地	〒680-0151 鳥取県鳥取市国府町宮下1260番地 TEL (0857) 27-6717							
発行年月日	西暦2009年（平成21年）3月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さかちようだい8いせき 坂長第8遺跡	とっとりけんさいはくぐんほうきちようさかちよう 鳥取県西伯郡伯耆町坂長 あざおしみずとおりのみね 字大清水通大峯2102ほか	31390	1-22	35° 22′ 36″	133° 23′ 34″	20060626 ～ 20061025	2,340㎡	国道181号（岸本バイパス）道路改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
坂長第8遺跡	集落	縄文～弥生時代	段状遺構	1基	縄文土器、弥生土器、石器		尖頭器（草創期）	
		古墳時代	竪穴住居	3棟	土師器、須恵器、ガラス玉		埋甕	
		時期不明	土坑・ピット	31基				

鳥取県教育文化財団調査報告書 113
一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

鳥取県西伯郡伯耆町

さか ちょう だい 8 い せき
坂 長 第 8 遺 跡

発行 2009年3月23日

編集 財団法人 鳥取県教育文化財団 調査室
〒680-0151 鳥取県鳥取市国府町宮下1260番地
電話 (0857) 27-6717

発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団

印刷 勝美印刷株式会社